

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第161集

花
屋
敷
遺
跡
I

東大阪市

花 屋 敷 遺 跡 I

河内花園駅前地区第一種市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇〇七年三月

財団法人
大阪府文化財センター

2007年3月

財団法人 大阪府文化財センター



1. 06-1-1 調査区第5面全景 (東から)



2. 06-1-1 調査区第4面全景 (西から)



1. 出土した陶磁器類



2. 19埋桶 出土漆器

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第161集

東大阪市

花屋敷遺跡Ⅰ

河内花園駅前地区第一種市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

財団法人 大阪府文化財センター

序 文

花屋敷遺跡は東大阪市吉田1丁目に所在し、ラグビーで全国的に著名な「花園」の、近鉄奈良線の河内花園駅の北側に隣接しています。現在、近畿日本鉄道株式会社により、奈良線連続立体交差化工事が進められており、財団法人大阪府文化財センターは、それに伴い平成11年より周辺の調査を行なってきました。

今回の調査は、河内花園駅前地区第一種市街地再開発計画に伴う発掘調査です。調査では、中世の遺構面が複数確認されました。主な遺構としましては、井戸、溝、貯水施設と導水施設、土坑、柱穴などが検出されました。遺物も、土師器皿・羽釜、瓦器椀、瓦質甕、備前焼甕、常滑焼甕、東播系須恵器練鉢、中国製青磁椀などが多く出土しています。また、木製品も多く、曲物、漆塗椀、箸、下駄、草履、紡織具、毬と豊富です。

特に溝から出土した2点の墨書された木簡は、注目すべきものです。1点は「西方源三上」であり、もう1点は「□田八郎」と人名が記され、続けて「小麦十九把」、また「ウ（芋）カラ六把」と書かれていました。溝は南北方向と東西方向に走行しており、建物を囲んでいたものと思われます。集落の年代は出土した遺物より13世紀後半から15世紀と考えられています。

周辺の同時代の遺構としましては、南西約1.6kmに若江城跡があります。城の周辺地域において、数棟の建物が溝に囲まれた屋敷が集まって集落が構成される、その様な村が散在している風景が浮かんできます。

大和川は、江戸時代の宝永元（1704）年に堺方面に付け替えられる以前は、西側が長瀬川、東側が玉串川に分かれて北流していました。玉串川は、更に菱江川と吉田川に分岐して流れていました。花屋敷遺跡の中世集落は、ちょうどこの分岐する所に当たります。花園駅の南側には「市場」という旧字名が残されており、舟運の盛んな時代には、交易の中継点として大いに賑わったと思われます。大和川が付け替えられた後、菱江川は菱屋東新田、吉田川は川中新田、玉串川は玉井新田として開発されました。

今回発掘調査が行われるまで、この地域では埋蔵文化財に関してほとんど空白地帯というような状況でしたが、この地域の歴史を紐とく手がかりとなる、一定の調査成果を挙げることができました。今回の調査で得られた成果をより多くの方々にご活用頂ければ幸いです。

最後になりましたが、調査に当たっては河内花園駅前地区市街地再開発組合、大阪府教育委員会などの関係各位に多大なご協力、ご指導を頂きました。記して感謝の意を表します。今後とも当センターの事業に、より一層ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成19年3月

財団法人 大阪府文化財センター
理事長 水野 正好

例 言

1. 本書は、大阪府東大阪市吉田1丁目地内に所在する花屋敷遺跡06-1の発掘調査報告書である。
2. 調査は河内花園駅前地区第一種市街地再開発事業に伴い河内花園駅前地区市街地再開発組合から平成18年5月1日～平成19年3月30日の間、委託を受け、大阪府教育委員会の指導の下、財団法人大阪府文化財センターが実施した。現地における調査は平成18年5月12日～平成18年7月31日まで行った。平成18年8月1日～平成19年3月30日まで遺物整理作業を行い、平成19年3月30日、本書刊行を以って終了した。
3. 調査は以下の体制で実施した。

調査部長 赤木克視 調整課長 田中和弘
中部調査事務所長 小野久隆 調査第二係長 森屋美佐子
主任技師 岡本圭司 専門調査員 影山美智与
4. 遺物の撮影は中部調査事務所主査片山彰一が、木製品・金属製品ほかの保存処理と樹種の同定については同主査山口誠治、専門調査員岩立美香が、獣骨の同定は班長宮崎泰史が行った。土師器皿の一部については網伸也、南孝雄が、木製品の器種については、黒須亜希子が判別した。木簡の釈文については、関西大学助教授原田正俊先生および当センター理事長水野正好にご教示いただいた。
5. 調査の実施に当たっては地元河内花園駅前地区市街地再開発組合、東大阪市教育委員会、大阪府教育委員会をはじめとし、下記の方々にご指導、ご協力を賜った。記して謝意を表したい。

【調査協力】（順不同、敬称略）
福永信雄、菅原章太（以上、東大阪市教育委員会）松尾信裕（（財）大阪市文化財協会）
橋本久和（高槻市教育委員会）森村健一（堺市教育委員会）原田正俊（関西大学）
小谷利明（八尾市立歴史民俗資料館）
6. 調査の実施に当たって、自然科学分野の分析として、「花粉・珪藻・植物珪酸体分析」をバリノ・サーヴェイ株式会社へ委託した。その報告は第4章に田中義文・馬場健司・伊藤良永「花屋敷遺跡06-1発掘調査における花粉・珪藻・植物珪酸体分析」として掲載している。
7. 本報告書の編集と執筆は岡本（上記の第4章を除く）があたった。
8. 本調査に関わる写真・実測図などの記録類は、財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

凡 例

1. 実測図の基準高は東京湾平均海面（T.P.）を使用している。
2. 座標の単位はすべてmである。座標は世界測地系である。
3. 全体図および遺構実測図の方位は座標北である。なお、真北を基準とした場合、調査区周辺の座標北は0° 13′ 西に、磁北は7° 01′ 西に偏位する。
4. 発掘調査や遺物整理は当センターの「遺跡調査基本マニュアル」（2003年版）に準拠して行った。
5. 調査名は上記のマニュアルにのっとり「花屋敷遺跡06-1」と命名した。また各調査区はさらに枝番号をつけて標記した。（例）第1調査区の場合：花屋敷遺跡06-1-1
これらの名称は遺物の取り上げ、注記などに用いている。
6. 土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2004年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
7. 遺構番号は基本的に調査時に付けたものを使用した。調査区、遺構面、遺構の性格に関係なく、通しのアラビア数字の後に遺構の種類を示す名称が続く。（例）14溝、16井戸、117ピット
8. 遺構図の縮尺は遺構面全体図が1/200、1/300、遺構の平・断面図には1/10・1/20・1/40を使用している。そのほか各図にスケールを用いて表記してある。
9. 遺物実測図の縮尺は1/4を基調とするが、一部、金属製品、石製品および小形の土器が1/2、大形の本製品が1/8となっている。縮尺は各挿図にスケールにて示した。写真図版については遺物のスケールを統一していない。
10. 遺構図の断面の位置は、「L」によってその位置を明記した。
11. 掲載した遺物の番号は掲載順に通しの番号を与えている。
12. 本文・挿図・写真図版の遺構・遺物番号は一致する。
13. 本文中、第1図は国土地理院発行平成10年度版大阪東北部・平成7年度版大阪東南部1/50,000を、第2図および第61図は東大阪市都市開発課発行平成13年度版H-6-3-23 1/25,000を、第4図は原1987「河内低地の地形分類」を、第5図は国土地理院平成14年度発行大阪府東北部・平成14年度発行大阪府東南部・平成18年度発行生駒山・平成13年度発行信貴山の各1/25,000を、第6図は大阪府文化財分布図2001年度版を、それぞれ一部改変して使用した。
14. 土器の記述は主に下記の文献を参考にした。
中世土器研究会編1995『概説中世の土器・陶磁器』真陽社
菅原正明1988「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会
石井啓、福本浩子編2005備前歴史フォーラム資料集『備前焼研究最前線』Ⅱ～備前焼、その歴史、今まで何がわかって、何がわからないのか～備前市歴史民族資料館・備前市教育委員会
上田秀雄1982「14～16世紀の青磁器碗の分類について」『貿易陶磁器研究』No.2 日本貿易陶磁器研究会
勝田邦夫・阿部嗣治1983『若江遺跡発掘調査報告書』Ⅰ遺構編 東大阪市遺跡保護調査会
福永信雄1993『若江遺跡第38次発掘調査報告書』財団法人東大阪市文化財協会
千喜良淳2002「中・南河内における土器器皿の変遷」『瓜生堂遺跡第46、47-1・2次発掘調査報告書』東大阪市教育委員会

目 次

カラー図版 1

1. 06-1-1 調査区第5面全景（東から） 2. 06-1-1 調査区第4面全景（西から）

カラー図版 2

1. 出土した陶磁器類 2. 19埋桶 出土漆器

序文

例言

凡例

目次

第1章 調査の経緯と方法	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査の方法	3
第2章 遺跡の位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査成果	9
第1節 基本層序	9
第0層 第1層 第2層 第3層 第4層 第5層	
第2節 遺構と遺物	11
1. 現地表面	11
2. 第1調査区 盛土と第1面	11
3. 第1調査区 第1層と第2面	14
4. 第1調査区 第2層と第3面	14
14窪地 15溝 17溝 18溝 16井戸	
5. 第1調査区 第3層と第4面	19
19埋桶 60溝 20土坑と周辺のピット 25ピット 30土坑 35ピット	
37ピット 40ピット 53溝 61ピット	
6. 第1調査区 第4-2面	26
87土坑	
7. 第1調査区 第4層と第5面	29
80溝 80溝〔柵〕 14溝 83土坑 第5面検出のピットと土坑 123ピット	
8. 第1調査区 第5層と第5-2面	44
150ピット 155土坑	
9. 第2調査区 遺構面	44
172土坑	

第4章 花屋敷遺跡06-1発掘調査における花粉・珪藻・植物珪酸体分析	45
はじめに	45
第1節 試料	46
第2節 分析方法	46
1. 珪藻分析	46
2. 花粉分析	47
3. 植物珪酸体分析	47
第3節 結果	48
1. 珪藻分析	48
2. 花粉分析	51
3. 植物珪酸体分析	53
第4節 考察	53
1. 珪藻化石群集からみた古水文環境	53
2. 調査区およびその周辺の古植生	54
第5章 まとめ	59
第1節 遺構の変遷	59
第2節 出土した木簡と花屋敷	61

挿図目次

第1図 花屋敷遺跡位置図	1
第2図 調査区位置図	2
第3図 調査区地区割図	2
第4図 河内低地地形分類図	5
第5図 花屋敷遺跡周辺の土地条件図	5
第6図 花屋敷遺跡周辺の遺跡分布図	7
第7図 基本層序	10
第8図 06-1-1調査区第1面全体図	11
第9図 廃土出土遺物	11
第10図 06-1-1調査区第2面全体図	12
第11図 06-1-1調査区第2層出土遺物	12
第12図 06-1-1調査区第3面全体図	13
第13図 06-1-1調査区第3面検出遺構断面図	15
第14図 14窪地出土遺物	16
第15図 15溝出土遺物	16
第16図 17溝出土遺物	16
第17図 16井戸出土陶磁器	16

第18図	16井戸出土金属製品	17
第19図	06-1-1 調査区第3層出土遺物	17
第20図	06-1-1 調査区第4面全体図	18
第21図	19埋桶〔貯水施設〕・60溝〔導水施設〕平・断面図	19
第22図	19埋桶〔貯水施設〕平・断面図(左) 平・立面図(右)	20
第23図	19埋桶底遺物出土状況	21
第24図	19埋桶側板	22
第25図	19埋桶〔貯水施設〕(上)・60溝〔導水施設〕(下)出土遺物	23
第26図	20土坑と周辺のピット平・断面図	25
第27図	20土坑出土土師器皿	25
第28図	06-1-1 調査区第4面検出遺構	26
第29図	37ピット平・断面図	26
第30図	14溝〈下層〉出土遺物	27
第31図	06-1-1 調査区第4面検出遺構出土遺物	27
第32図	06-1-1 調査区第4-2面全体図	28
第33図	06-1-1 調査区第4層出土遺物	28
第34図	87土坑、108ピット平・立面図	29
第35図	87土坑出土板材	29
第36図	06-1-1 調査区第5面全体図	30
第37図	80溝断面図	31
第38図	80溝〔柵〕板平・立面図	31
第39図	80溝出土遺物①	32
第40図	80溝出土遺物②〈上層～下層〉	33
第41図	80溝出土遺物③〈最下層〉	34
第42図	80溝出土木製品①	35
第43図	80溝出土木製品②	36
第44図	80溝出土木製品③〈上層～下層〉	37
第45図	80溝出土木製品④〈最下層〉	38
第46図	80溝出土木製品⑤〈最下層〉	39
第47図	80溝出土木製品⑥〈最下層〉	40
第48図	06-1-1 調査区第5面検出柱の残る柱穴	41
第49図	06-1-1 調査区第5面検出遺構出土遺物	41
第50図	06-1-1 調査区第5層検出遺物	41
第51図	06-1-1 調査区第5-2面全体図	42
第52図	06-1-1 調査区第5-2面検出遺構出土遺物	42
第53図	06-1-2 調査区全体図	43
第54図	花屋敷遺跡の位置	45
第55図	花屋敷遺跡の周辺の地形起伏と考古遺跡	45

第56図	河内平野とその周辺の地形	46
第57図	80溝分析試料採取位置	47
第58図	主要珪藻化石群集の層位分布	51
第59図	花粉化石群集の層位分布	53
第60図	植物珪酸体含量の層位分布	53
第61図	調査区周辺の字名と主要遺構模式図	60

写真目次

写真 1	60溝竹製導水管継目部分	21
写真 2	珪藻化石	56
写真 3	花粉化石	57
写真 4	植物珪酸体	58

表目次

表 1	珪藻化石の生態性区分および環境指標種群	48
表 2	珪藻分析結果 (1)	49
	珪藻分析結果 (2)	50
表 3	花粉分析結果	52
表 4	植物珪酸体含量	53

写真図版目次

図版 1	06-1-1 調査区 第1面 (上) 第2面 (下)
	1. 第1面全景 (西から) 2. 第2面全景 (東から)
図版 2	06-1-1 調査区 第3面
	1. 第3面全景 (東から) 2. 第3面全景 (西から)
図版 3	06-1-1 調査区 第4面
	1. 第4面全景 (東から) 2. 第4面全景 (西から)
図版 4	06-1-1 調査区 第4面
	1. 20土坑遺物出土状況 (北から) 2. 19埋桶・60溝 [貯水・導水施設] (南西から)

- 図版5 06-1-1 調査区 第4面
1. 60溝竹製導水管と土師器皿54出土状況（北から）
 2. 60溝竹製導水管検出状況（東から）
 3. 19埋桶検出状況
 4. 19埋桶漆器椀出土状況
 5. 19埋桶取水口部
 6. 19埋桶籠出土状況
- 図版6 06-1-1 調査区 第4面
1. 19埋桶半裁状況と60溝より延びる竹製導水管（北から）
 2. 19埋桶側板とタガ（北から）
 3. 19埋桶底板除去後（北から）
- 図版7 06-1-1 調査区 第4面
1. 19埋桶出土籠（クリーニング後）
 2. 19埋桶出土籠網目（部分写真）
 3. 19埋桶上部の籠除去後、遺物出土状況
 4. 19埋桶底板
 5. 第4-2面全景（南西から）
 6. 87土坑、108ピット（北から）
- 図版8 06-1-1 調査区 第5面
1. 第5面全景（西から）
 2. 第5面全景（東から）
- 図版9 06-1-1 調査区 第5面
1. 80溝〔柵〕（左：南から 右上：部分 右下：東から）
 2. 80溝断面（東から）
 3. 第5-2面全景（南東から）
- 図版10 06-1-1 調査区 第5面（上・中）、06-1-2 調査区（下）
1. 118柱穴（北から）
 2. 125柱穴（北から）
 3. 133柱穴（北から）
 4. 134柱穴（南から）
 5. 135柱穴（南から）
 6. 148柱穴（南から）
 7. 06-1-2 調査区全景（西から）
 8. 172土坑（西から）
- 図版11 06-1-1 調査区 出土遺物1
1. 第2層出土遺物
 2. 14窪地（第3面）出土遺物
 3. 15溝（第3面）出土遺物
 4. 16井戸（第3面）出土遺物
 5. 第3層出土遺物
- 図版12 06-1-1 調査区 出土遺物2
1. 20土坑（第4面）出土土師器皿
 2. 19埋桶・60溝〔貯水・導水施設〕（第4面）出土遺物
- 図版13 06-1-1 調査区 出土遺物3
1. 第4層出土遺物
 2. 80溝（第5面）出土遺物1
- 図版14 06-1-1 調査区 出土遺物4
- 80溝（第5面）出土遺物2
- 図版15 06-1-1 調査区 出土遺物5
1. 80溝〈中層〉（第5面）出土遺物
 2. 80溝〈最下層〉（第5面）出土遺物
 3. 第5'層出土遺物
- 図版16 06-1-1 調査区 出土遺物6
1. 80溝（第5面）出土土師器皿
 2. 80溝〈最下層〉（第5面）出土土師器皿
- 図版17 06-1-1 調査区 出土遺物7
- 80溝（第5面）出土漆器

- 図版18 06-1-1 調査区 出土遺物 8
 1. 80溝〈最下層〉(第5面) 出土木簡 2. 80溝〈下層〉(第5面) 出土木簡
- 図版19 06-1-1 調査区 出土遺物 9
 50溝(第4面)・60溝(第4面)・80溝(第5面)・150ピット(第5-2面) 出土木製品
- 図版20 06-1-1 調査区 出土遺物10
 1. 19埋桶〔貯水施設〕(第4面) 側板 2. 87土坑(第4-2面) 礎板
 3. 80溝〈最下層〉(第5面) 出土木製品
- 図版21 06-1-1 調査区 出土遺物11
 1. 80溝〈最下層〉(第5面) 出土木製品 2. 80溝〔柵〕板列(第5面) 構成木製品
- 図版22 06-1-1 調査区 出土遺物12
 1. 柱根・杭 2. 出土鉾滓

遺物 観察表

①土器・陶磁器・土製品類	63
②瓦	66
③木製品	66
④漆器類	68
⑤金属器・石器・鉾滓類	68
⑥柱材	68

遺物出土遺構 一覧

遺物出土遺構 一覧(1)～(4)	69～72
------------------------	-------

報告書抄録

第1章 調査の経緯と方法

第1節 調査の経緯

近鉄河内花園駅周辺は、古くから商店や住宅地が建ち並ぶ賑やかな街であったが、道路も狭く、交通や公共施設が未整備であることなど、防災面や生活環境面での都市基盤整備が急がれる状況となった。そこで、これらの諸問題の抜本的解決を図るため、都市計画道路大阪瓢箪山線及び花園駅前東西線の整備による交通体系を改善するとともに、安全・快適な都市型住宅の供給と駅前にふさわしい商業・業務施設の立地を図る、都市計画、河内花園駅前地区第一種市街地再開発事業が計画された。

事業は河内花園駅前地区再開発組合のもと平成16年4月に施行されることとなった。すでに東大阪市では、再開発事業として、近鉄奈良線の連続立体交差化事業とあわせて平成8年には近鉄布施駅北口、平成15年に若江岩田駅前地区を整備しており、本事業はこれらに続く事業である。^{注1)}

財団法人大阪府文化財センターでは、平成17年度に上記の近鉄奈良線の連続立体交差化事業に伴い、当再開発地区周辺を花園遺跡隣接地として遺跡の有無、広がり確かめる確認調査を実施した。この調査成果において、中世段階の遺構、遺物が確認された。また、東大阪市教育委員会は同年度に当再開発地区内および都市計画道路大阪瓢箪山線地区内において試掘調査を実施し、同様に、中世の遺物の出土と包含層を確認した。



第1図 花屋敷遺跡位置図



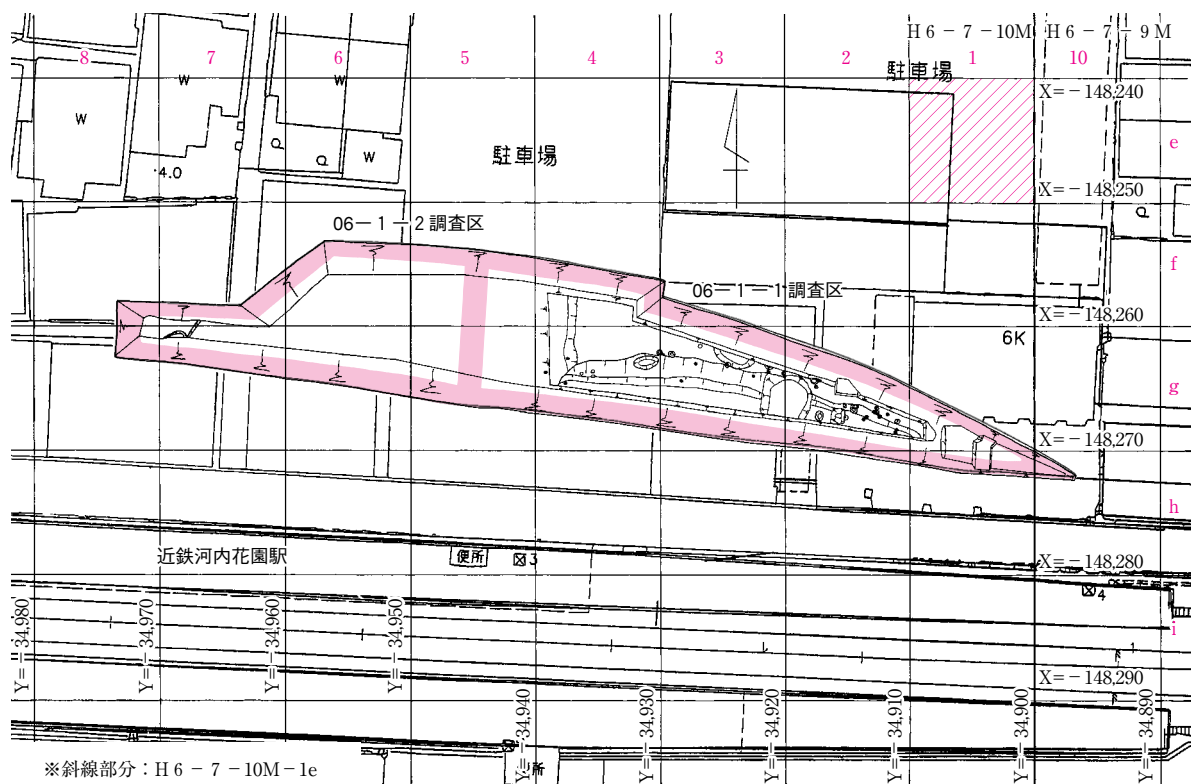
第2図 調査区位置図

そこで、河内花園駅前地区市街地再開発組合は大阪府教育委員会と協議を重ね、財団法人大阪府文化財センターに発掘調査を依頼する運びとなった。

なお、当地は今まで埋蔵文化財の包蔵地として周知されてこなかった。そこで、新たに遺跡名がつけられることになり、東大阪市教育委員会において、当地の字名により、花屋敷遺跡と命名された。

当センターは河内花園駅前地区市街地再開発組合と「河内花園駅前地区第一種市街地再開発事業に伴う花屋敷遺跡発掘調査」（「花屋敷遺跡06-2」）の委託契約を締結し、平成18年5月12日、花屋敷遺跡の調査に着手し、平成18年7月31日に終了した。

遺物整理及び報告書作成は発掘調査終了後引き続き行い、平成19年3月30日に終了した。



第3図 調査区地区割図

また、当センターでは本調査と同時に、近畿日本鉄道株式会社と「近畿日本鉄道奈良線連続立体交差化に伴う花屋敷遺跡発掘調査」の委託契約を締結し、本書が報告する調査区近接地の発掘調査を行い、同様に整理の後、報告書『花屋敷遺跡』Ⅱを刊行した。

第2節 調査の方法

調査地は近鉄奈良線河内花園駅の北側に隣接する。都市計画道路大阪瓢箪山線予定地内である。調査前の地目は住宅地、商店、工場、モータープール、道路などであった。調査の直前にはこれらの構造物は取り壊され、工事用車両を通すために、一部には厚さ30cm程度で碎石も敷かれていた。

地表面の面積で約664㎡、東西に長く約67m、南北方向の幅は最大で約12mを測る。東端が尖り、西側に約5m×10mの張り出し部を持つ。調査は工程の都合にて調査区を東西に約2：1の割合で2つの地区に分けて行った。調査マニュアルにしたがい、東側を06-1-1調査区、西側を06-1-2調査区と命名した。調査区の配置は第2図の通りである。なお、当報告では調査区ごとに分けて本文の記述を行った。

調査は、06-1-1調査区より、機械掘削にて地表面を掘削することから開始した。機械掘削では、事前のデータを基に、現地表から1.0m前後の盛土を、機械によって掘削した。機械掘削終了後は、包含層、遺構面に応じて、人力掘削を行った。

調査区全体の土の堆積状況を把握するための断面は、調査区の幅が狭いこともあり、南北の法面を利用し、東西方向の堆積を確認した。それ以外は必要に応じて断面観察用のアゼを設定することとした。

06-1-1調査区の調査を終了し、埋め戻した後、06-1-2調査区の機械掘削に入ったが、当地区のほとんどが、近現代の攪乱にて削平を受け、西端の張り出し部のみにかろうじて自然な堆積が認められるだけであった。調査区の堆積状況を把握する断面観察は張り出し部の南側の法面を利用した。

測量については、調査区周辺に3級基準点を3点と4級基準点を2点設けた。これらの基準点をもとに、標定点測量を行い、合計3回のクレーン撮影と6回の高所作業車による撮影を行った。測量の基準は世界測地系によった。また、航空測量以外にも必要に応じてこれらの基準点をもとに平板などの測量作業を行った。

遺物の取り上げの際などの地区名称は、国土座標系を基に作成した当センターの『遺跡調査基本マニュアル』に明記された地区割りの名称（第3図）を使用している。

遺構番号は現地調査の際に付与した番号をそのまま使用している。遺構番号の付け方は凡例に示した通りである。

注1)「東大阪市都市開発室ホームページ」、 「河内花園駅前地区市街地再開発組合のホームページ」を参照した。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

花屋敷遺跡は大阪府東部、東大阪市のほぼ中央部に位置する吉田に所在する。

当遺跡は平成11年度から開始された当センターによる近畿日本鉄道奈良線連続立体交差化事業に伴う確認調査によって平成17年に新たに周知された。

埋蔵文化財包蔵地の密度が比較的高い東大阪地域ではあるが、市の東部、生駒山地西麓に展開する遺跡群と、瓜生堂遺跡はじめ市の中心部やや西寄りに位置する、通称瓜生堂遺跡群の間に挟まれた当地域は、遺跡の空白地帯となっていた。それが今回、少し大仰に言うならば、ようやく地域史に寄与する考古学的な資料を得ることができたといえよう。

当遺跡の所在する河内平野は、縄文海進によって最大となった河内湾が、旧大和川や旧淀川の水系による土砂の運搬、堆積によりしだいに陸化が進み、河内潟、河内湖を経て平野が形成されたことは良く知られている。最近の研究では、当遺跡周辺は河内平野の中でも、特に沖積平野面三角州帯Ibと地形分類され、主に弥生時代後期末から古墳時代初頭に堆積した地域と考えられている。

遺跡は近畿日本鉄道奈良線河内花園駅の北側に隣接し、商店や住宅の立ち並ぶ河内花園駅前の市街地として活況を呈している。現地表面は標高でT.P.4.0m前後を測り、平坦な地形である。

遺跡の西端部は旧大和川の流路の一つである玉串川が吉田川と菱江川とに分岐する箇所当たる。今は両河川とも小さな用水路や暗渠に姿を変え、宝永元（1704）年の大和川の付け替え以前に河内平野に洪水を幾度となくもたらした大河としての面影はないが、これらの部位は旧河道の跡及び自然堤防として、現在、周辺部より1m～2m程高くなっている。

第2節 歴史的環境

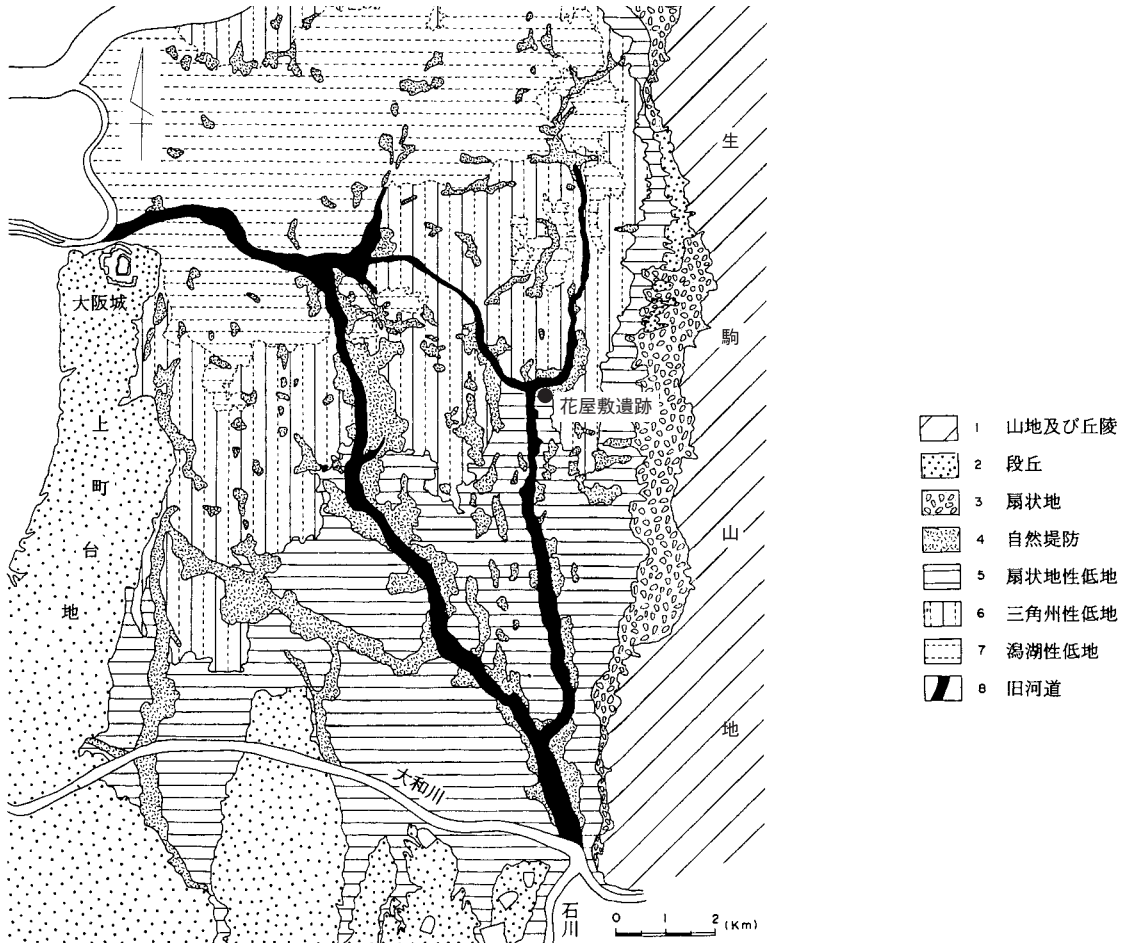
周辺の遺跡に目を向けると、弥生時代から古墳時代前期にかけての著名な遺跡を多くみとめることができる。花屋敷遺跡の西約2.0kmには、マウンドを残す弥生時代中期の良好な方形周溝墓が検出されたことで有名な瓜生堂遺跡、その東側には隣接するように位置する、弥生時代前期の集落・水田遺構が検出された若江・若江北遺跡が存在する。

また、当遺跡の東南約1.7kmには、弥生時代前期から近現代まで、幾重にも水田遺構がおり重なることで有名な池島・福万寺遺跡がある。

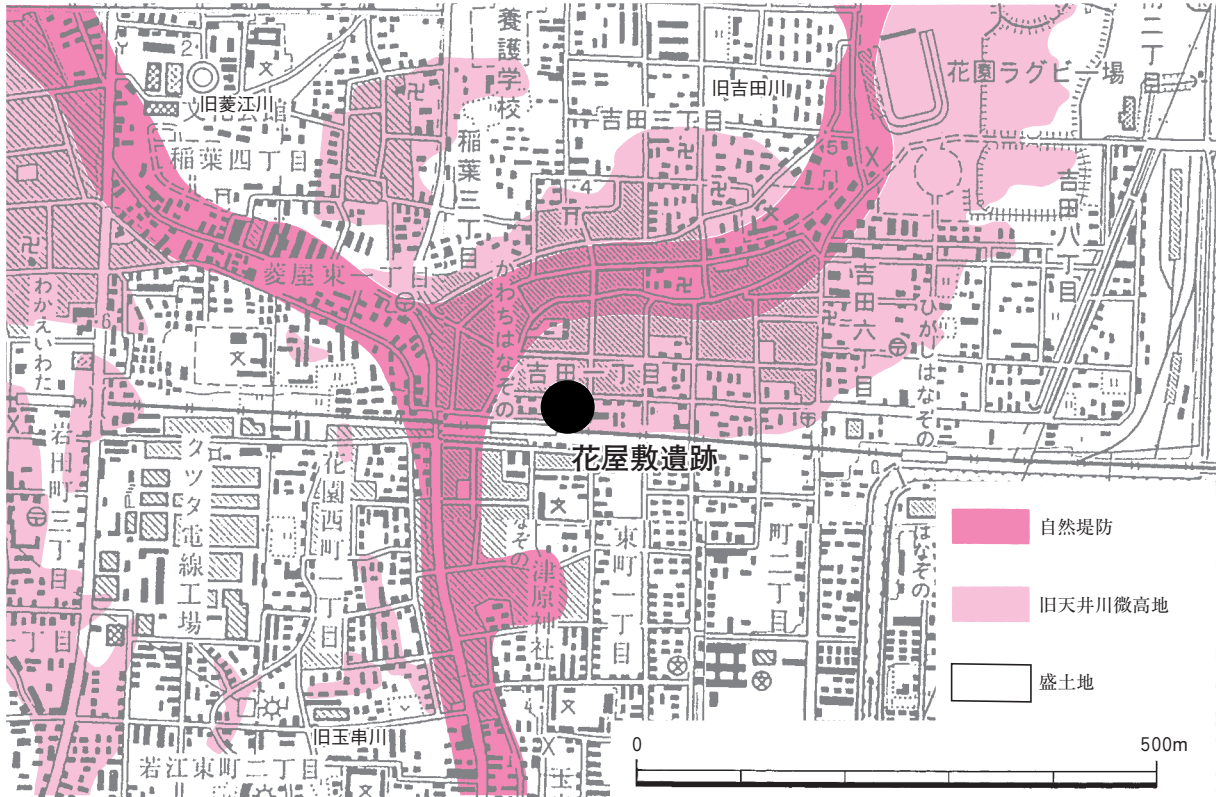
真北約0.6kmには弥生時代前期の稲葉遺跡もあり、弥生時代に存在した河内潟やそこに注ぐ河川周辺を生活の場とした当時の人々の足跡をたどることができる。

縄文時代前期の海進によってできた河内湾は、そこへ流れ込む河川による土砂の堆積で次第に埋まり、安定した平野へと変遷を遂げることとなる。縄文時代は日下遺跡、神並遺跡など、生駒山地西麓域が人々の生活の拠点であったが、この平野部へ生活域や生産域を展開させるようになり、弥生時代中期の遺跡が増加することになる。

弥生時代の後期には洪水の影響などによりこれらの遺跡は縮小し、古墳時代を迎える。古墳時代の集落は洪水を避けるべく、河川の自然堤防上に展開する様相を見せる。



第4図 河内低地地形分類図



第5図 花屋敷遺跡周辺の土地条件図

意岐部遺跡からは古墳時代後期の遺物が出土している。西岩田遺跡では、古墳時代初めから後期の集落を検出している。また、池島・福万寺遺跡においても5世紀から6世紀の集落が調査されている。古墳時代の河内平野部は河川による堆積活動の影響を受け、たえず洪水の危険にさらされ河道の位置も変化するため、居住地、耕作地いずれにおいても、基盤とするには不安定な土地であったようである。そのためか、当地周辺の平野部には大型の古墳は築かれず、目立った群集墳も営まれていない。生駒山地西麓において、山畑古墳群、客坊・花草山古墳群のような後期群集墳が6世紀から7世紀にかけて形成されるのとは対照的である。ただし、最近の調査では、平野部においても、巨摩廢寺遺跡にて古墳が検出され、人物埴輪・水鳥形埴輪などが出土している。そのほか、岩田遺跡では円筒埴輪が出土し、石田神社境内付近に古墳があったという伝承もあり、埋没古墳の存在を示唆する。今後の調査の進展によって、当地周辺平野部の古墳造営の状況が明らかになる可能性がある。

古代には瓜生堂遺跡の中央部で8世紀を主とした集落跡が、西部や北東部で9世紀以降の集落が確認されている。また、岩田遺跡では8世紀中頃から10世紀にかけての集落が検出されている。当地からは、施釉陶器、製塩土器、円面硯、貨銭、帯金具（巡方）、墨書土器、製塩土器などのほか、唐草文軒平瓦が出土するが、この瓦が遺跡の南東約1kmに位置する若江遺跡の出土瓦に類似することを根拠に、この集落は若江寺あるいは若江遺跡と関係のある官人の居住した集落と考えられている。

若江寺は出土する素弁蓮華文軒丸瓦から、飛鳥時代後期頃の創建と考えられている。周辺では、最も古い寺院である。遺構は確認されていないが、川原寺式に類似する瓦の存在、後の奈良時代の瓦に「足得」「中臣」のスタンプが押された恭仁京式文字瓦、平城京、恭仁京との同範の軒平瓦の存在により、中央政権との強力な関係を示唆する向きもある。平安時代には宇治平等院の末寺となっている。

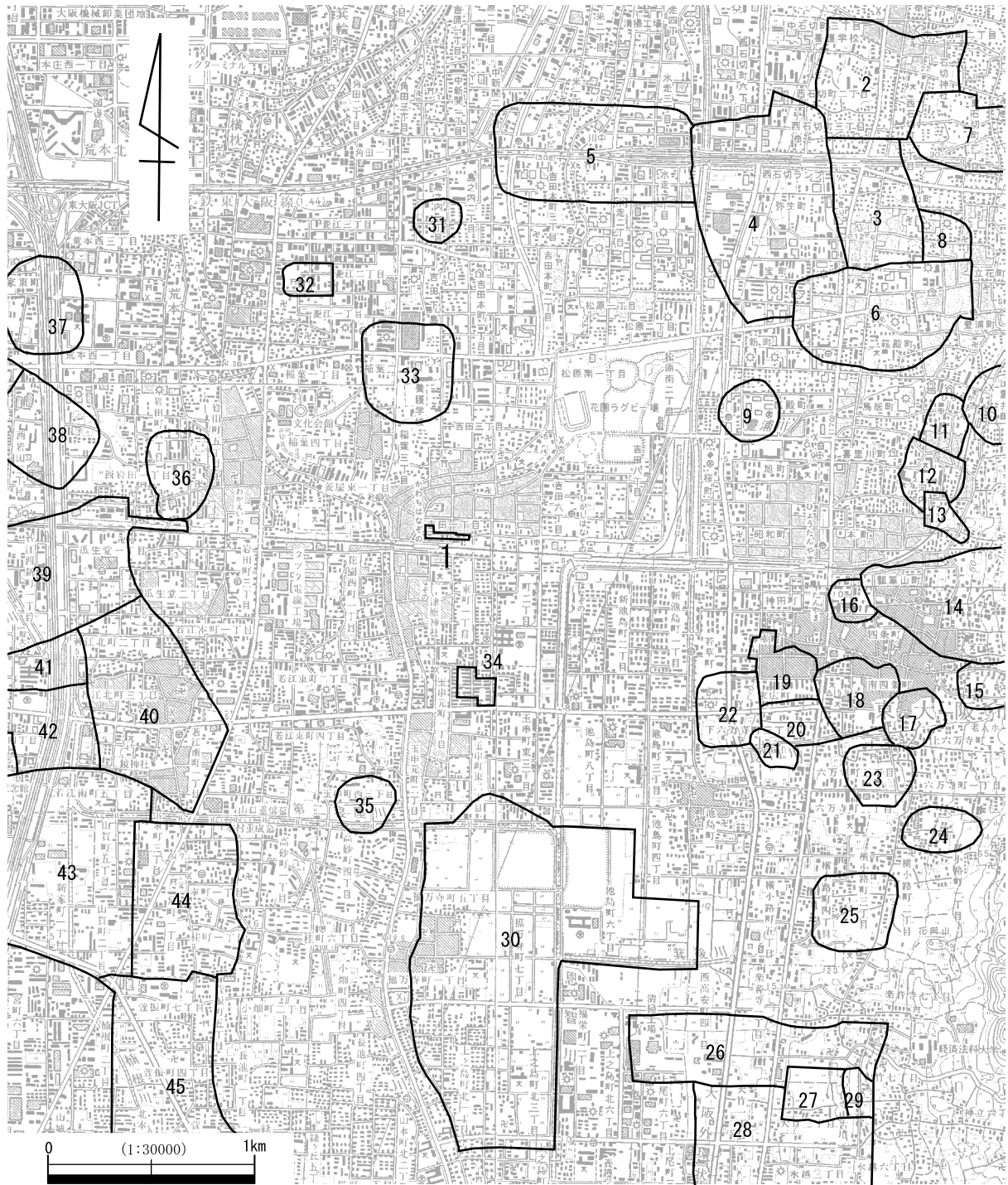
このように、古代の若江周辺は当地の政治的な中核を担ったと注目されており、以降中世の若江城に引き継がれて行く。ほかに、主な古代寺院には生駒西麓にて、河内の郡寺と考えられる河内寺、物部氏の氏寺とも考えられる法通寺がある。

古代後半から中世に目を向けると、花屋敷遺跡の西約1.2kmに位置する、瓜生堂遺跡の東端では、13世紀を最盛期とする12世紀から15世紀にかけての集落跡が見ついている。その瓜生堂遺跡の北に接する岩田遺跡においても12世紀前半から15世紀中頃まで存続したと考えられる集落跡を検出している。当集落は13世紀の中・後半頃から溝で区画されだすという。ただし、瓜生堂遺跡と岩田遺跡の中世集落は隣接するが、区画溝の変遷など、細部において齟齬をきたすきらいがあり、今後の検討を要する。

そのほか、周辺では、12世紀後半から15世紀にかけての集落が、巨摩廢寺遺跡にて見ついている。

水走遺跡は、花屋敷遺跡の北東約2.0kmに位置する。旧玉串川の支流、旧吉田川沿いの遺跡である。発掘された旧吉田川では、12世紀後半の堤防、13世紀の祭祀遺構、およびそれを管理したであろう人々の集落が見ついている。当集落は中世前期、中河内地方一円に力を持った水走氏みずはやが開発に係わったと考えられている遺跡である。同氏は、中臣氏の末裔である平岡連を祖とし、周辺の在地の武士団を束ねた氏族である。同氏は、河内一宮平（枚）岡神社の神職を兼ね、近在の観音寺の別当となった。また、皇領である大江御厨の管理と警護も受け持ち、当地域の社寺に影響を与え、旧大和川の支流の河川や深野池などの湖沼における水運権や漁業権を掌握した有力な在地領主であった。南北朝の内乱では楠木正成に従い南朝方となるが降伏し、以後河内国守護となった畠山氏の臣下として中世を生き延びている。

生駒山西麓部には、鬼虎川遺跡、西ノ辻遺跡、鬼塚遺跡、神並遺跡など中世の集落跡が集中する。当地は南北に走る東高野街道、暗峠ほか奈良、大坂を結ぶ諸街道の交差する地で、先の水走遺跡の地と同



- | | | | | | | | |
|----|--------|----|--------|----|-------------|----|--------|
| 1 | 花屋敷遺跡 | 13 | 河内寺跡 | 25 | 馬場川遺跡 | 37 | 新家遺跡 |
| 2 | 植附遺跡 | 14 | 山畑古墳群 | 26 | 大竹西遺跡 | 38 | 西岩田遺跡 |
| 3 | 西ノ辻遺跡 | 15 | 花草山古墳群 | 27 | 心合寺跡 | 39 | 瓜生堂遺跡 |
| 4 | 鬼虎川遺跡 | 16 | 市尻遺跡 | 28 | 太田川遺跡 | 40 | 若江遺跡 |
| 5 | 水走遺跡 | 17 | 上六万寺遺跡 | 29 | 〔国〕史 心合寺山古墳 | 41 | 巨摩廃寺遺跡 |
| 6 | 鬼塚遺跡 | 18 | 縄手遺跡 | 30 | 池島・福万寺遺跡 | 42 | 若江北遺跡 |
| 7 | 神並遺跡 | 19 | 五合田遺跡 | 31 | 吉田遺跡 | 43 | 山賀遺跡 |
| 8 | 瀬田廃寺 | 20 | 段上遺跡 | 32 | 菱江寺跡 | 44 | 西郡廃寺遺跡 |
| 9 | 鶴立遺跡 | 21 | 下六万寺遺跡 | 33 | 稲葉遺跡 | 45 | 萱振遺跡 |
| 10 | 出雲井遺跡群 | 22 | 北鳥池遺跡 | 34 | 花園遺跡 | | |
| 11 | 狐塚遺跡 | 23 | 船山遺跡 | 35 | 玉櫛遺跡 | | |
| 12 | 皿池遺跡 | 24 | 半堂遺跡 | 36 | 岩田遺跡 | | |

第6図 花屋敷遺跡周辺の遺跡分布図

様、旧大和川分流や深野池を利用した水上交通の発達した場所でもあったと考えられ、おのずと集落が形成され、発展していったものと思われる。これらの遺跡はほぼ連続する遺跡群であり、奈良、平安時代から集落が認められる地域である。これらの地域では神並遺跡、西ノ辻遺跡の地を中心に、集落が断続的に展開し、場所を移動させながら、中世、さらに一部は近世へ続くものと思われる。

南北朝の内乱をへて、畠山氏は守護職として河内に権勢を振るうことになるが、河内国支配における政治的な拠点として築かれたのが若江城である。14世紀末、畠山義深もしくは畠山基国が、守護代遊佐氏に築かせた城とされるが、詳細は不明である。しばらくは河内国守護所として機能するが、文明9(1477)年に遊佐氏は畠山義就により同城を追放され、河内国守護所も義就により高屋城へ移される。

さらに、空白期間を経て、織田信長は永禄11(1568)年に入洛の後、河内国北半国とともに同城を三好義継に与えたものの、天正元(1573)年には義継を滅ぼし、新たに義継の家臣らに城を預けている。さらに信長は大坂の石山本願寺攻めの拠点として当城を用いている。本願寺との和解後はその役目を終え、天正8年頃に廃城となったようである。

発掘調査では、数地点で信長時代であろうと思われる城の関係遺構として土塁、堀跡や、井戸、礎石建物などが見ついている。堀の中には敵兵の進入を防ぐ逆茂木を配する箇所も検出されている。若江城の廃絶後、中河内の中心は八尾に移り、当地の政治的な求心性は弱まることとなる。

江戸時代に入ると、玉串川など、旧大和川の分流を利用した水運が発達し、剣先船による物資の運搬が頻繁に行われた。当花屋敷遺跡の北に接していた近世の旧吉田村は、吉田川を挟み南北に分かれて位置する村であるが、市場という字名が残り、古い町並みの中に、現在も大念仏寺の末寺である西昌寺や春日社がある。また、遺跡の0.3km程南に位置する玉串の地には式内社津原神社が鎮座するが、当地も近世に旧市場村として登場している。これらの地が河川を利用した物資の集積地として繁栄したことは容易に推察できる。もっとも、玉串周辺は、平安時代には宇治平等院の領地、玉串庄であった可能性が高く、鎌倉時代には、楠木氏が活躍した拠点の一つと考えられている。当地は、古代・中世から交通の要衝で商業も盛んであったことが窺える。

近代に入ると、大正3(1914)年には近鉄奈良線が開通する。花屋敷遺跡の地も花園駅の駅前として商店街が発達し、今日に至るが、今後も、近鉄奈良線の高架及びそれに伴う再開発により新たな発展を遂げていこうとしている。

※河内平野の形成過程および上述の遺跡についての解説、報告は枚挙に暇なく、下記の参考文献のほか、各遺跡に関する発掘調査報告書などを参照した。

【参考文献】

- 高橋学1991「河内平野の地形環境分析Ⅰ－河内平野の環境分析に関する基礎考察－」『池島・福万寺遺跡発掘調査概報』－89－1～6 調査区の概要－ 財団法人大阪文化財センター
- 原秀禎1987「河内低地の地形分類」『河内平野遺跡群の動態』Ⅰ近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－プロローグ編－ 大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター
- 布施市史編纂委員会編1962『布施市史』第1巻 布施市役所
- 東大阪市教育委員会2003『東大阪市の歴史と文化財』－わが街再発見－改訂版
- 藤井直正1983『東大阪の歴史』 松籟社
- 福永信雄2006『若江寺・若江集落と若江城』(1617会2006年10月例会資料)

第3章 調査成果

第1節 基本層序

以下に、当調査地にて構成される基幹となる層序を記す。各層は基盤となる面の番号を踏襲するようにつけている。なお、各層中より出土した遺物の詳細は「第2節遺構と遺物」において記述している。

第0層：地表面（第0面）から第1面に至る間の層を当報告では第0層とした。近代以降の客土、攪乱層である。構造物を除去した際に最近敷かれた上部のバラス層と、粗砂～シルトに多量の廃棄物が混ざった攪乱層で形成されている。地表面（T.P.4.2m）前後から1m強（T.P.3.2m程度）の深さまでが、当層である。ただし、調査地の中央部から西側、つまり、第1調査区の西端と第2調査区の大半は、攪乱による削平が特に激しかった。地表面から2m程度まで掘削したが、さらに下位に攪乱が続いた。よって、これらの地域には遺物包含層、遺構面が全く残っていなかった。

第1層：T.P.3.1m前後、層の厚みは10cm～30cmを測る。第1面の基盤となる層である。褐灰色10YR4/1粗砂混シルトほかで形成される。部分的に、上部の攪乱により削平を受けている。わずかではあるが、近世陶磁器や瓦片が出土している。当層の上下の面が耕作面と考えられるので、近世もしくはそれ以降に人為的に形成された耕作土と思われる。

第2層：T.P.3.0m前後、層の厚みは10cm～30cmを測る。第2面の基盤となる層である。オリーブ灰色2.5GY5/1粗砂・礫混シルトほかで形成される。部分的に細かく分層される遺物は、刷毛目唐津椀などの近世の陶磁器、中世の土師器や瓦質土器、土製鈴などが出土している。下位の第3面検出の16井戸から近世陶磁器やキセルが出土している。近世段階における人為的な堆積、耕作土と思われる。

第3層：T.P.2.7m前後、層の厚みは10cm～20cmを測る。第3面の基盤の層である。灰オリーブ色5Y5/2粗砂混シルトほかで形成される。中世の土師質土器、瓦質土器、瓦、陶磁器などが出土した。中世から近世にかけての堆積層と思われる。

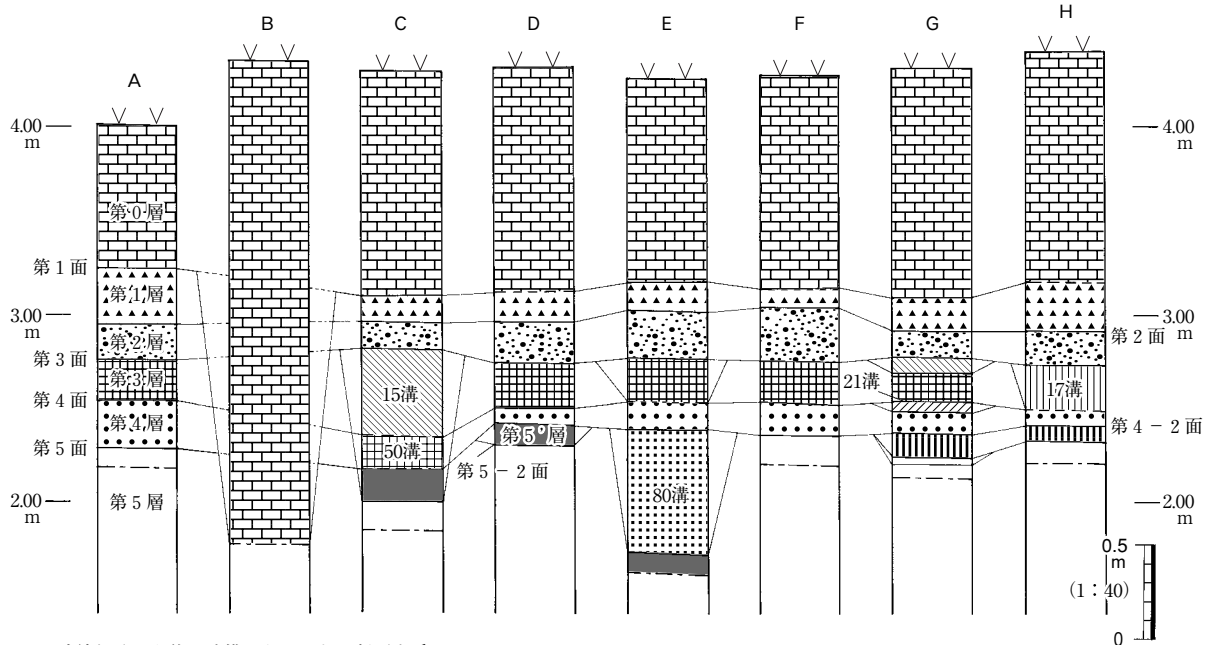
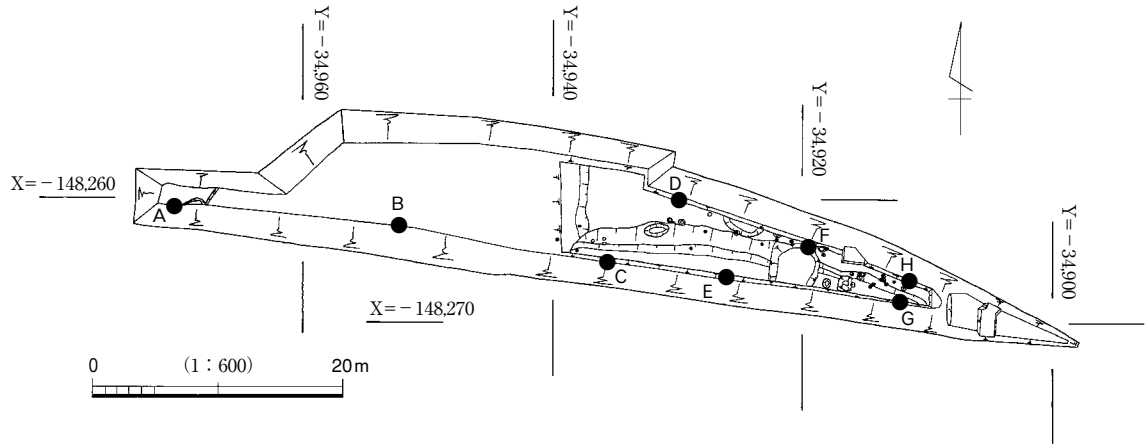
第4層：T.P.2.5m前後、層の厚みは10cm～20cmを測る。第4面の基盤の層である。灰色7.5Y5/1シルト混粗砂ほかで形成される。中世の土師質土器、瓦質土器、瓦、陶磁器などが出土した。

調査区東端部において第5層との間に部分的に間層がみられ、その層をはずすと、新たに遺構面（第4-2面）を検出した。

第5層：T.P.2.3m前後、第5面の基盤の層である。灰色10Y6/1粗砂・礫ほかで形成される。基本的に当層以下には遺物は包含されないが、一部、06-1-1調査区の西北部に遺物を包含する層（第5'層）が見られ、部分的に、下位から新たに面を検出した（第5-2面）。この層、灰色7.5Y5/1粗砂混シルト中より中世の土師器皿などが出土した。

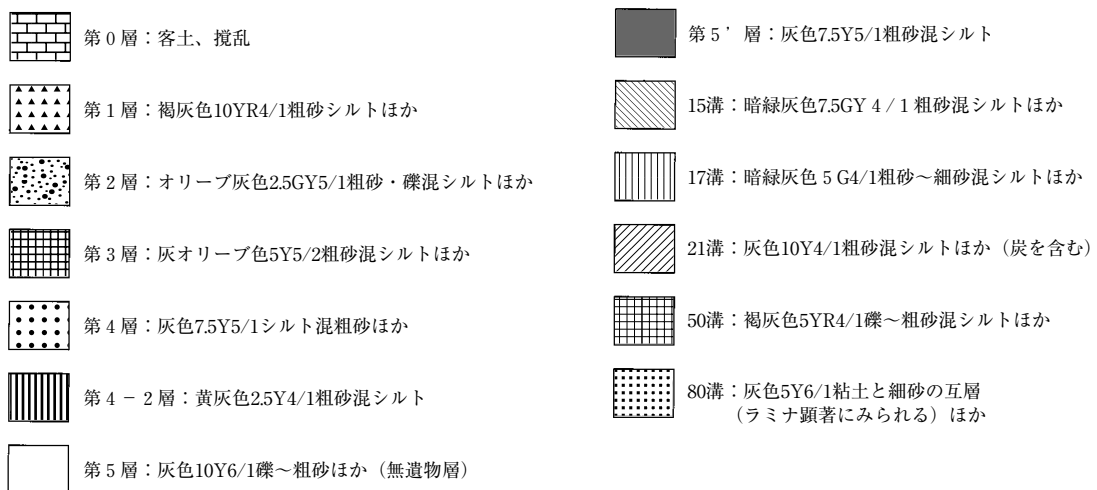
なお、柱状図（第7図）では第4-2層と第5'層とが同一層の様にも見て取れるが、第4-2層の除去後に80溝が検出されていることと、第5面で検出した80溝が第5'層および、第5-2面の遺構、136土坑を削平しているため、層位の矛盾はない。

第1層から第5層の各層は一樣にグライ化を受け、灰色、青灰色と化し、土質も粗砂～シルトで構成され、沖積低湿地の様相を呈している。また、各層はほぼ水平に堆積しているが、総じて調査区の中央部やや東部位（D地点近辺）が高く、そこから緩やかに東西方向に向かい傾斜している。中世の遺構面

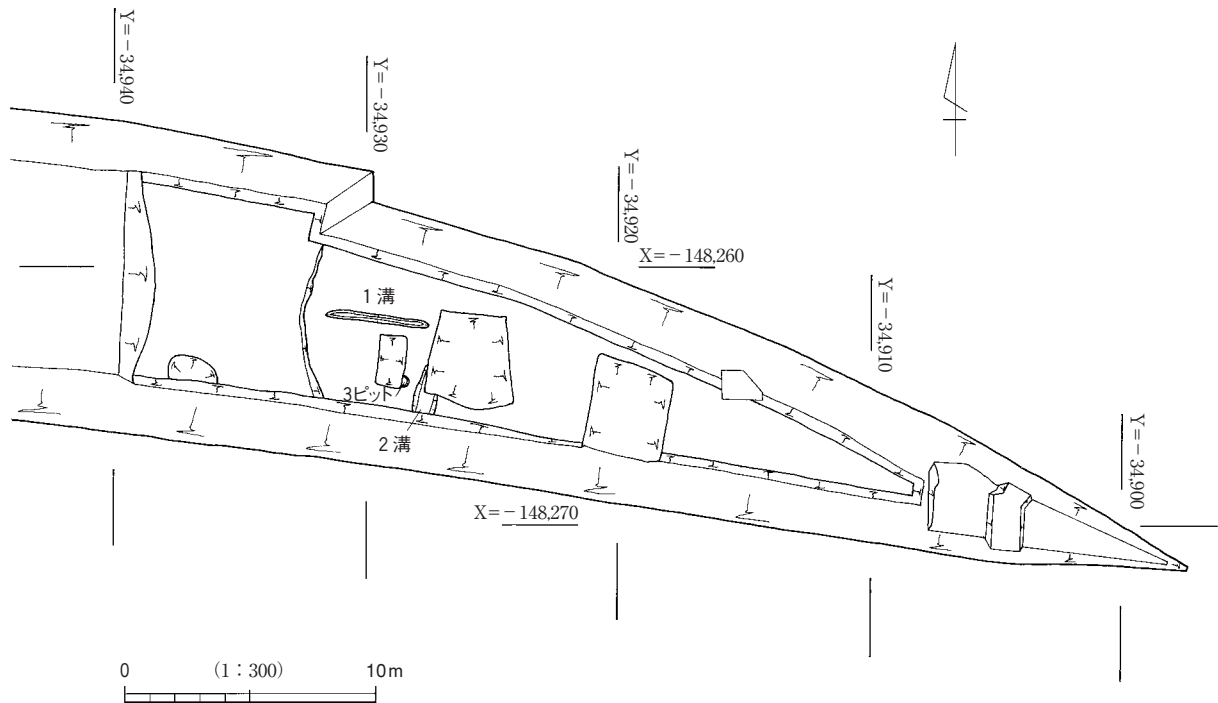


※破線部分は上位の遺構などにより、削平を受けているライン

(縦 1/20)



第7図 基本層序



第8図 06-1-1 調査区第1面全体図

である第5面を例にとると、東端（H地点近辺）とは比高差は約15cmを測る。

また、第2調査区にあたる西側は、攪乱が激しく、その大半が削平を受けているため、その詳細は明らかではないが、西端部（A地点近辺）も10cm程度低くなっている。

当調査区の西側約70m先には、江戸時代以前の旧吉田川の旧河道や自然堤防であったことを示す、比高差が2m程度の急激な高まりが南北方向に帯状に認められるが、当調査区の範囲においては、これと呼応するような極端な地層の隆起は認められない。

むしろ、滞水、水はけの悪さを示すグライ化の強い土質や、若干凹凸を持ちながらも、全体的に東側へ地形が傾斜するさまは、当地が旧吉田川により形成された自然堤防の後背湿地であったことを示すものと思われる。

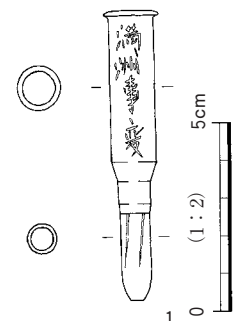
第2節 遺構と遺物

1. 現地表面

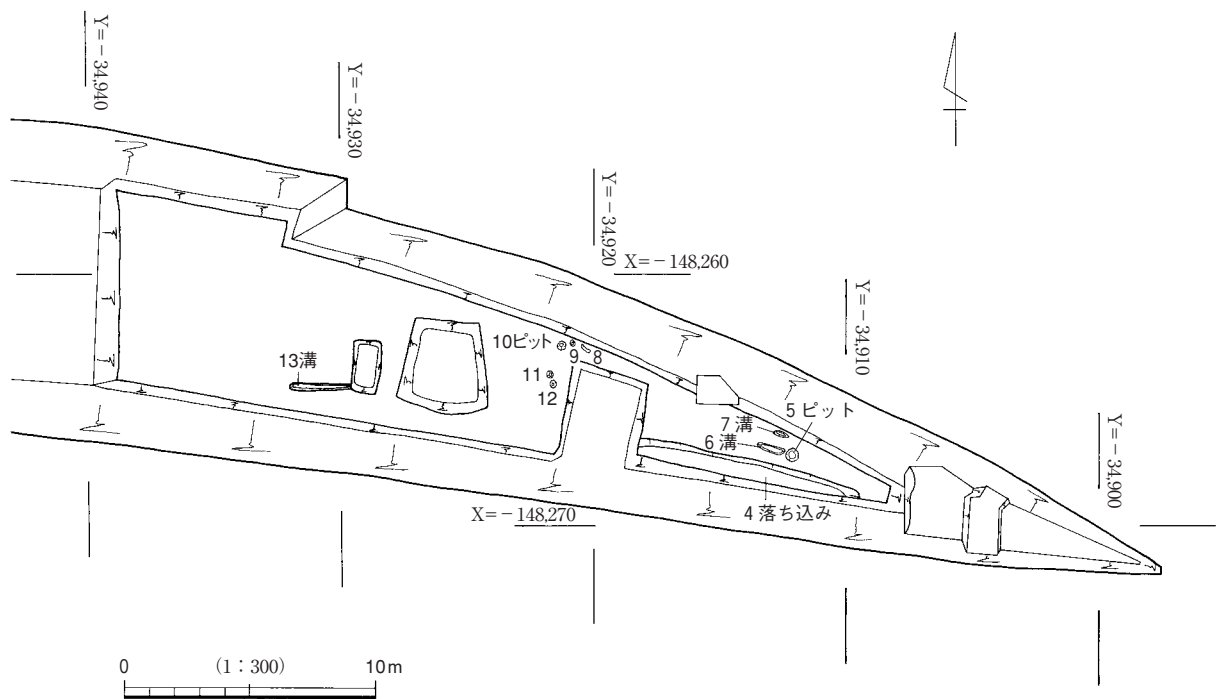
第0面とした、現地表面はT.P.4.0m～4.2m前後を測る。調査以前は住宅地、工場、モータープール、道路などとして使用されていた。調査直前には、構築物は除去され、一部には厚さ70cmほどで碎石が敷かれ、更地と化していた。0.2m程度の比高差の中で若干の凹凸は有るが、調査区全体としては、東側がやや高く、西側が低くなっている。

2. 第1調査区 盛土と第1面（第8・9図 図版1）

基盤となる0層は、近代以降の盛土、攪乱であり、先述の通り機械掘削にて除去しているが、廃土から陶磁器、下駄、ガラス瓶などの生活用品が散見された。興味深いものとして太平洋戦争以前の銃の薬莖が見つかった。「満州事変」の文字が刻まれており、当時の記念品であると思われる。近年、近代の戦争関係



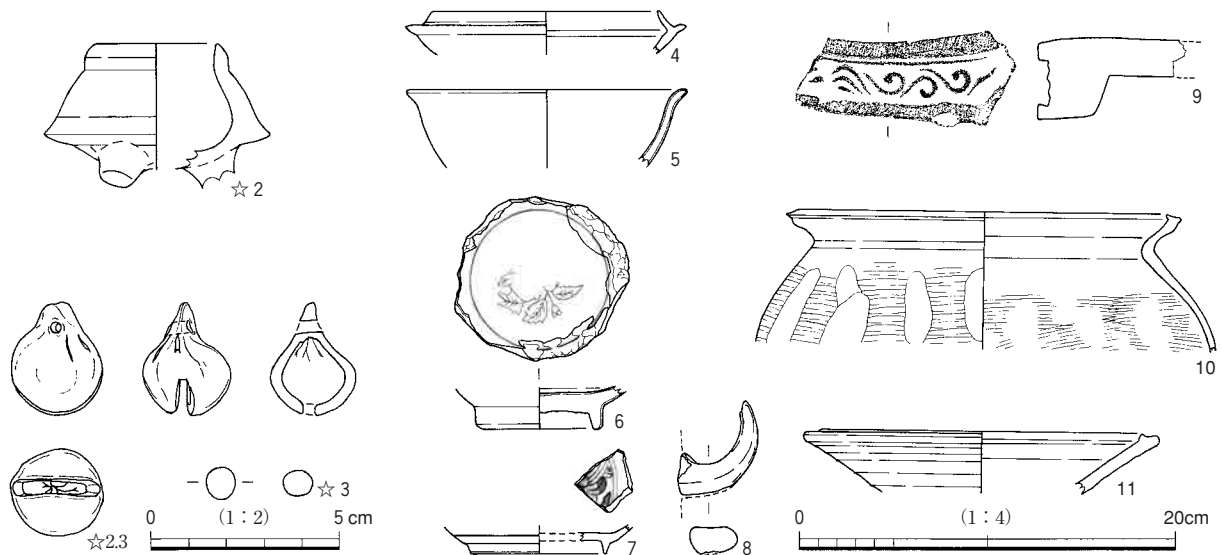
第9図 廃土
出土遺物



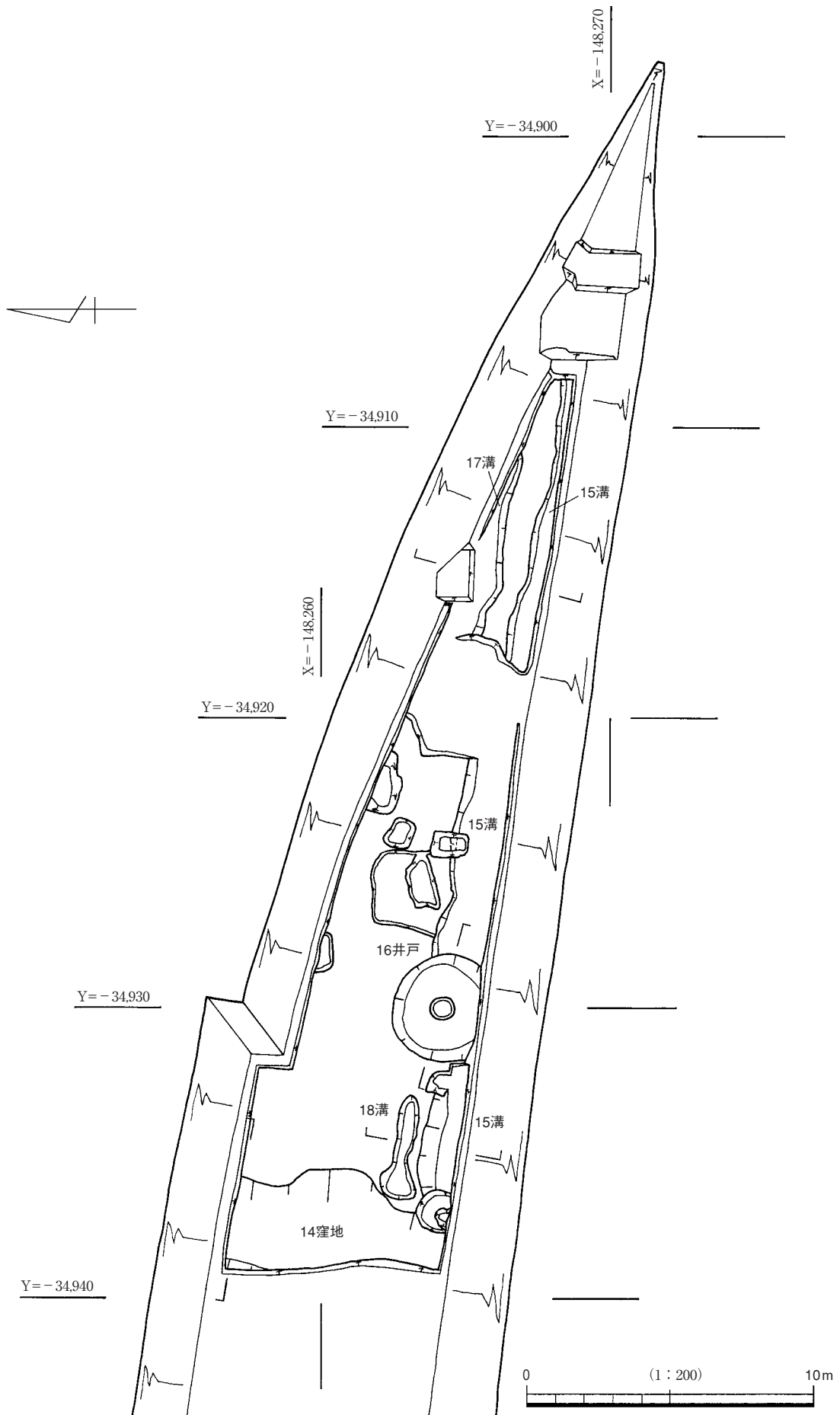
第10図 06-1-1 調査区第2面全体図

の遺物が注目を浴びることも少なくないので、ここに図化した。

第1面は0層を除去した面である。T.P.3.15m前後を測る。ほぼ平坦な遺構面である。若干の鋤溝の痕跡などと思われる遺構と土坑が散見されただけであった。また、東西方向に延びる4落ち込みを検出しているが、下位の面（第2面）には同じ位置に15溝が存在する。4落ち込みは15溝の最終段階を表しているとも考えられる。当初、基盤となる第1層に中世の遺物を包含するというので、当面を精査したが、当面直上と第1層中に近世の遺物が含まれることがわかった。よって、近世以降の耕作面と考えられる。



第11図 06-1-1 調査区第2層出土遺物



第12図 06-1-1 調査区第3面全体図

3. 第1調査区 第1層と第2面（第10図 図版1）

第1層を除去した面である。T.P.3.0m前後を測る。ほぼ平坦な遺構面である。第1面と同じく耕作に関係すると思われる遺構が散見されただけである。遺構からは遺物は出土していないが、当面を挟む第1層および第2層中で近世の波佐見焼などの遺物が出土しているため、当該期の耕作面と考えられる。

4. 第1調査区 第2層と第3面（第11・12図 図版2・11）

第2層を除去した面である。T.P.2.8m前後を測る。溝3条、井戸1基、窪地1箇所を検出した。

第2層および第3面直上の遺物は、その大半が中世の遺物で占められるが、近世の唐津焼などが若干出土している。第11図には、当層より出土した各時代の遺物を図化した。中でも4の須恵器杯身や8の土師器把手は古代に遡る遺物であるが、各層において古墳時代、古代の遺物も少しは出土している。近隣にこれらの遺跡が存在する可能性を示唆するものとする。10は中世の甕であろう。また、中世の遺物でも7の中国製青花皿や、11の瀬戸焼鉢のように中世の後半代に属する遺物も少なくない。

14窪地（第13・14図 図版11）

調査区の西側に位置する。下面の第5面で検出された14溝が埋没する過程でできた窪地である。不定形ではあるが、南北に長くN-11°-Wを取る。長さ7.30m、幅は最大で3.45m検出した。遺構の西の肩は、調査地の西部を大きく削平する攪乱に削られており、これは、下部の14溝も同様である。北側は調査区外へ続き、南側は攪乱で乱されているため、詳細は不明であるが、下位の14溝と連動すると考えると、調査区の南端で一応収束すると思われる。

前述のように、先行する中世の溝（14溝）が埋まる過程での窪地であることから、遺構としての土砂の堆積はさらに下位へと続く。堆積物は灰色7.5Y4/1シルト混粗砂が中心であり、下位の溝の堆積の粘性の土壌とは大きく土質は異なる。また、深さも0.25m程度と浅く、当面の時期では溝としての機能は失われていたと思われるので、単なる窪地としてとらえた。

出土した遺物は概して、下位出土の遺物と近似しており、大半が、窪地が埋没した時期の遺物ではないと思われる。当初、遺構の埋土が連続することから、一部下層まで掘削している。それゆえ、出土する遺物は下位の溝の遺物を少なからず含むと考えられる。中には、14の東播系須恵器練鉢や15の備前焼播鉢のように古い時代の傾向を示す遺物もある。わずかに土師器皿12が16世紀頃の所産と思われ、当該期といえるものであろうと思われる。

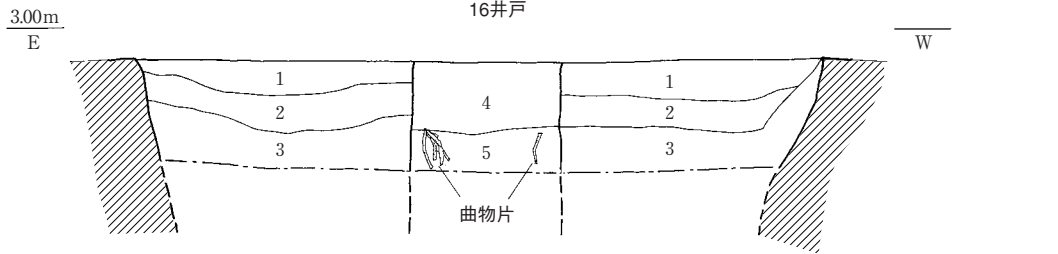
15溝（第13・15図 図版11）

調査区の南端を東西に直線で延びる溝である。E-12°-Sをとる。検出した幅は1.90mであるが、南側の肩は調査区外となる。長さは29.00m検出されているが、東側は調査区外へ延びる。西側の端は攪乱によって破壊されてはいるが、14窪地と隣接することから、その手前で収束するものと思われる。深さは0.4m程度を測る。埋土は暗オリーブ灰色2.5GY4/1粗砂～細砂混粘土などであり、特に、中位から上部は多量の砂で覆われていた。よって、当溝は洪水などの営力により、一気に埋没したと考えられる。

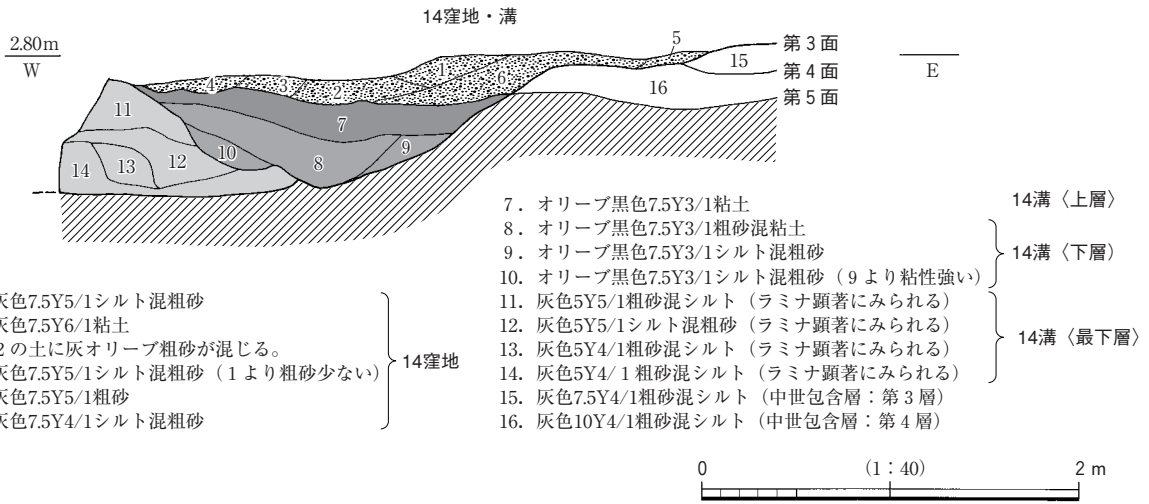
土師器皿、瓦質土器など中世の遺物が出土しているが、24の備前焼播鉢のように下位の層や遺構から出土する遺物と類似するものが多い。それでも22の京都産模倣であろう土師器皿、25の瓦質播鉢のように15世紀後半に属する遺物もある。

17溝（第13・16図）

調査区の東北部を東西に延びる溝である。15溝に平行して走る。残長6.50m、幅0.80m、深さ0.16mを測る。埋土にはラミナが顕著にみられるオリーブ灰色2.5GY4/1細砂混シルトがはいる。北の肩は調査

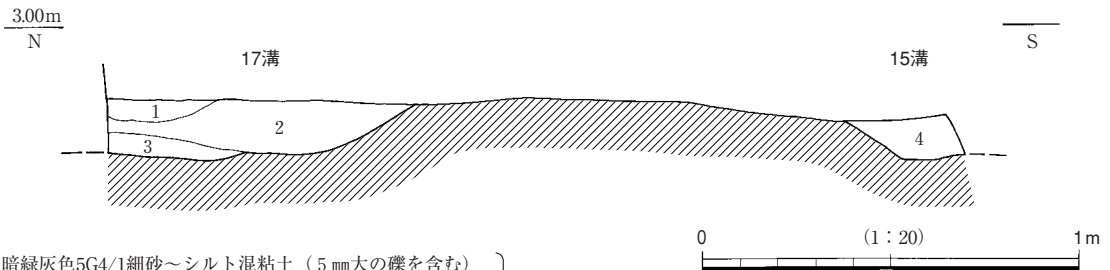


1. 暗緑灰色7.5GY4/1粗砂～細砂混シルト (緑灰色10GY5/1粘土をブロック状に含む)
2. 暗オリーブ灰色5GY4/1粗砂～細砂混粘土 (灰色10Y4/1シルト～粘土 5 cm大をブロック状に含む)
3. 灰色10Y4/1粗砂～細砂混シルト (灰色7.5Y4/1粘土をブロック状に含む)
4. 灰色10Y4/1粗砂～細砂混シルト (粗砂～細砂はブロック状に混じる。同色の粘土もブロック状に含む)
5. 4と似るが粘性強い

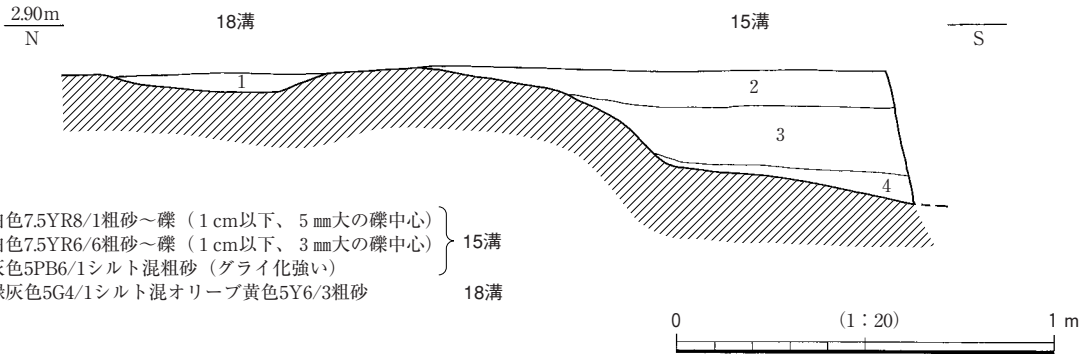


1. 灰色7.5Y5/1シルト混粗砂
2. 灰色7.5Y6/1粘土
3. 2の土に灰オリーブ粗砂が混じる。
4. 灰色7.5Y5/1シルト混粗砂 (1より粗砂少ない)
5. 灰色7.5Y5/1粗砂
6. 灰色7.5Y4/1シルト混粗砂

7. オリーブ黒色7.5Y3/1粘土
8. オリーブ黒色7.5Y3/1粗砂混粘土
9. オリーブ黒色7.5Y3/1シルト混粗砂
10. オリーブ黒色7.5Y3/1シルト混粗砂 (9より粘性強い)
11. 灰色5Y5/1粗砂混シルト (ラミナ顕著にみられる)
12. 灰色5Y5/1シルト混粗砂 (ラミナ顕著にみられる)
13. 灰色5Y4/1粗砂混シルト (ラミナ顕著にみられる)
14. 灰色5Y4/1粗砂混シルト (ラミナ顕著にみられる)
15. 灰色7.5Y4/1粗砂混シルト (中世包含層：第3層)
16. 灰色10Y4/1粗砂混シルト (中世包含層：第4層)

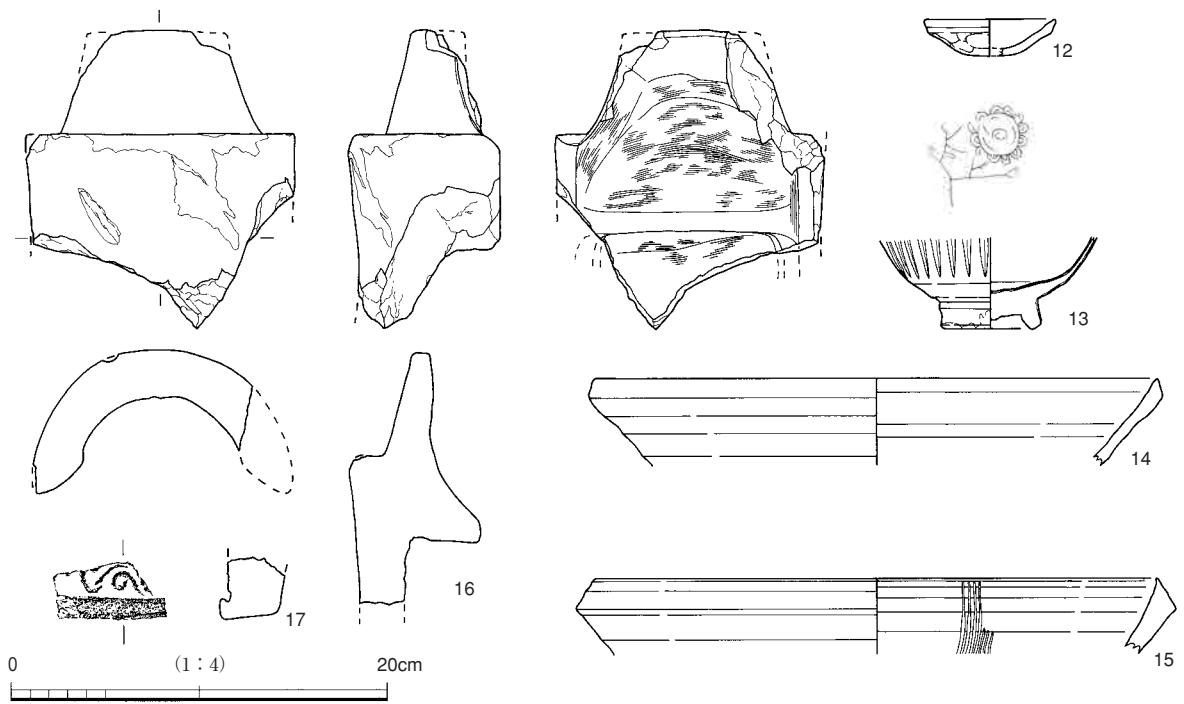


1. 暗緑灰色5G4/1粗砂～シルト混粘土 (5 mm大の礫を含む)
2. オリーブ灰色2.5GY細砂混シルト (ラミナ顕著にみられる)
3. 黄灰色2.5Y4/1粘土 (下方に細砂を多く含む。焼土粒含む)
4. 暗オリーブ灰色2.5GY4/1粗砂～細砂混粘土

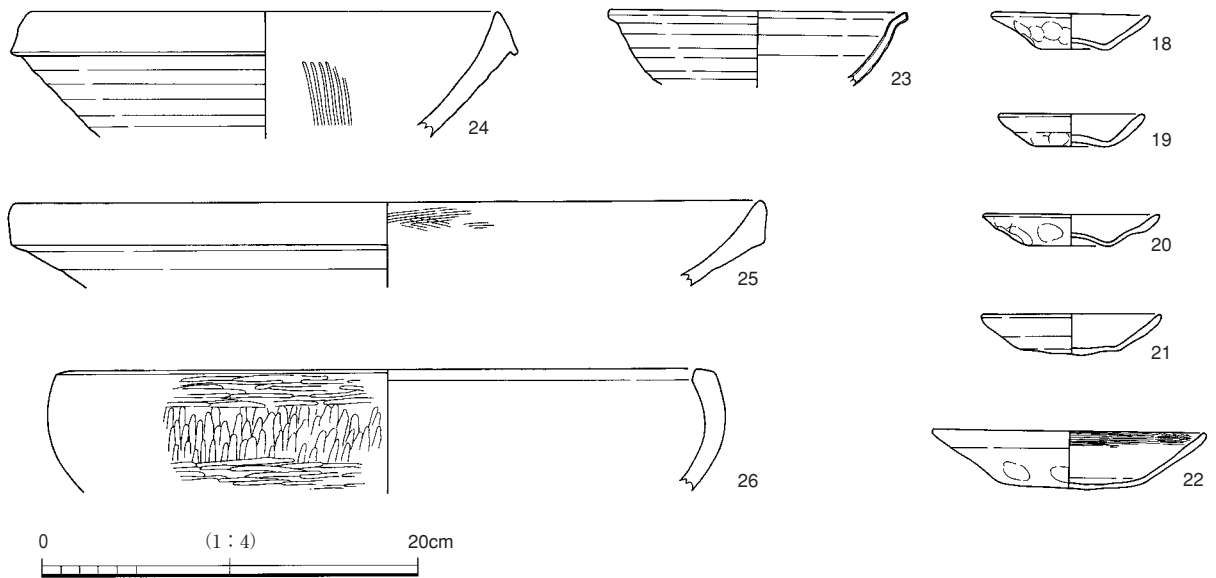


1. 灰白色7.5YR8/1粗砂～礫 (1 cm以下、5 mm大の礫中心)
2. 灰白色7.5YR6/6粗砂～礫 (1 cm以下、3 mm大の礫中心)
3. 青灰色5PB6/1シルト混粗砂 (グライ化強い)
4. 暗緑灰色5G4/1シルト混オリーブ黄色5Y6/3粗砂

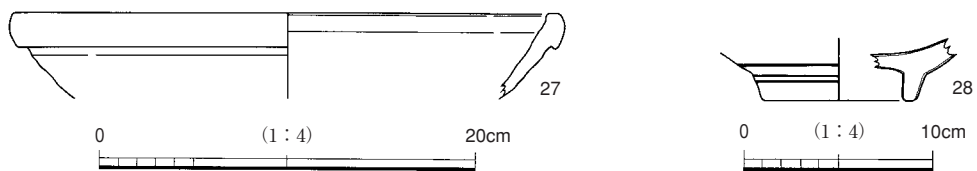
第13図 06-1-1 調査区第3面検出遺構断面図



第14図 14窪地出土遺物

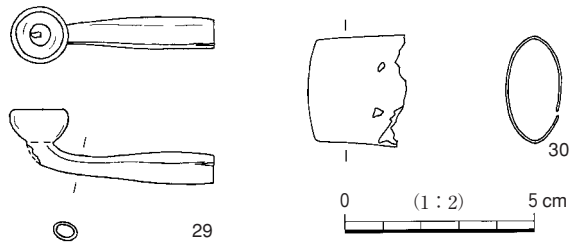


第15図 15溝出土遺物



第16図 17溝出土遺物

第17図 16井戸出土陶磁器



第18図 16井戸出土金属製品

区外となる。当溝の西側は攪乱によって壊されているが、15溝のように調査区の西端まで延びることはない。15溝ほどではないが17溝は砂粒の含む割合が高く、水流の強い形での堆積が行われたものと思われる。遺物には土師器皿、土師質羽釜、瓦、瓦器、常滑焼甕などが出土しているが、細片が多い。図化した東播系須恵器練鉢27のように、15溝同様、下位

と同時期の遺物が多い。この溝も埋没する際に下層の遺物を巻き込んでいるのであろう。

18溝 (第13図)

15溝の北に接するように平行して走る長さ3.60m、幅0.57m、深さ0.50mの溝である。浅く、短い土坑ととらえてもよいであろう。遺物は出土していない。堆積には粒の粗い粗砂が多いことから、溝15と同じく、一気に埋まったと思われる。

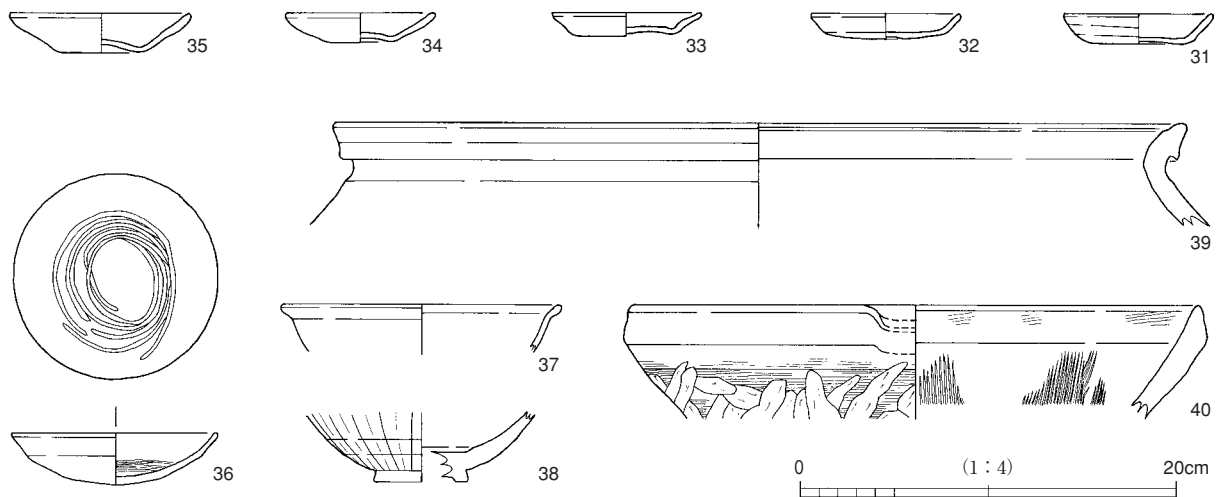
16井戸 (第13・17・18図 図版11)

調査区の南側中央よりやや西に位置する。15溝や第4面の50溝、第5面の80溝を切っている。直径3.70mを測る。粘土をブロック状に含む灰色10YR4/1粗砂～細砂混シルトほか堆積する。中央に直径0.80mの変色部が柱状に認められる。ここに井筒をすえていた。実際、この変色部位にそって、井筒の断片である曲物や竹のタガの残片が出土している。掘方の大きさの割には、井筒は小さいが、当地の土質が軟弱であるため、井戸掘削時に崩落の危険を避けるために、はじめに大きく開口したのであろう。最終的に80溝の底T.P.2.0m程、深さにして1m程度まで掘削したが、遺構はさらに下方へ続いた。

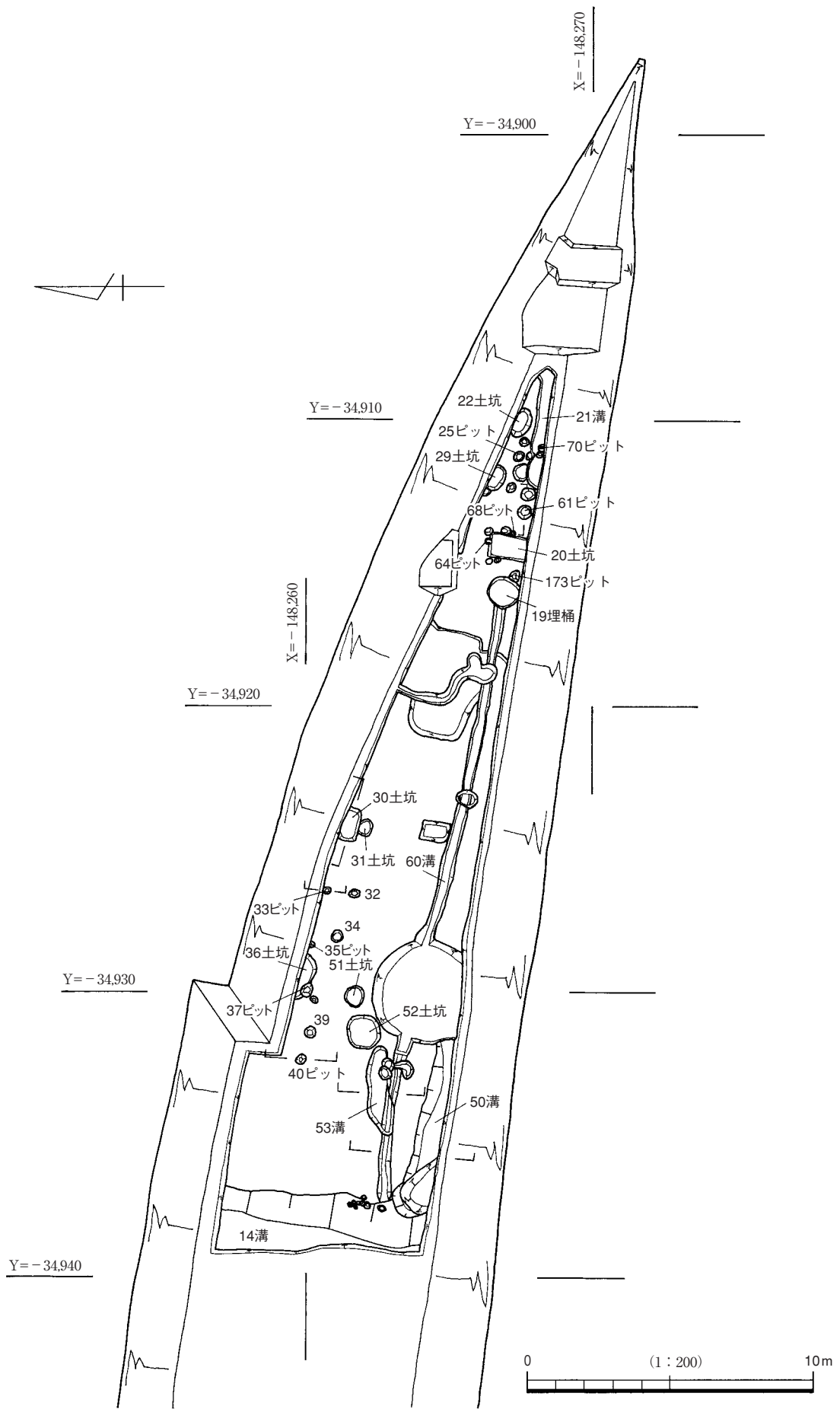
瓦類や中世の遺物も出土しているが、29のキセルの火口部分、30の刀の鞘尻が出土している。また、青磁染付椀28が出土しており、ほかの同面の遺構よりは新しく、18世紀中葉以降の遺構であろう。

16井戸が18世紀の中葉とすると、そのほかの遺構とは时期的に開きがあり、第3面の検出ではあるが、第2層の構築に際し、同遺構の切り込まれた面が飛ばされた可能性が高い。

第3面は当該期の遺物として認知できるものは少なく、当遺構面の時期決定をするのは難しい。



第19図 06-1-1 調査区第3層出土遺物



第20図 06-1-1 調査区第4面全体図

5. 第1調査区 第3層と第4面
(第19・20図 図版3・11)

第4面はT.P.2.5m前後を測る。若干中央部が高く東西が低い。土坑、溝、柱穴と杭を多数検出した。

また、第3層や第4面直上からは土師器皿や瓦器椀、土師質や瓦質の羽釜、鉢、常滑焼甕、瓦などが出土している。土師器皿は下記60溝の説明にて述べるd類が多い。38は龍泉窯系の中国製青磁椀である。39は信楽焼甕である。瓦器椀は和泉型のⅣ-3~4である。時期幅があるが、14世紀中頃から15世紀後半の遺物が多いと思われる。

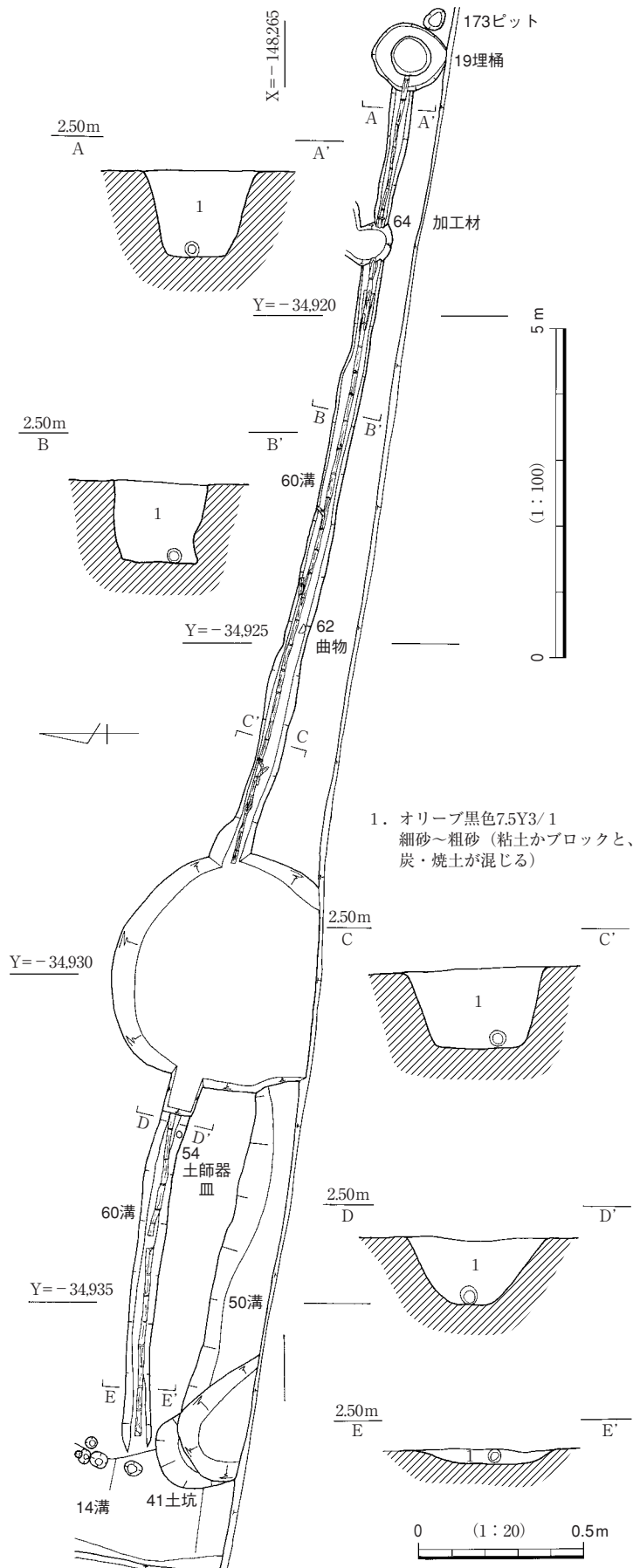
19埋桶〔貯水施設〕

(第21~25図 図版4~7・12・20)

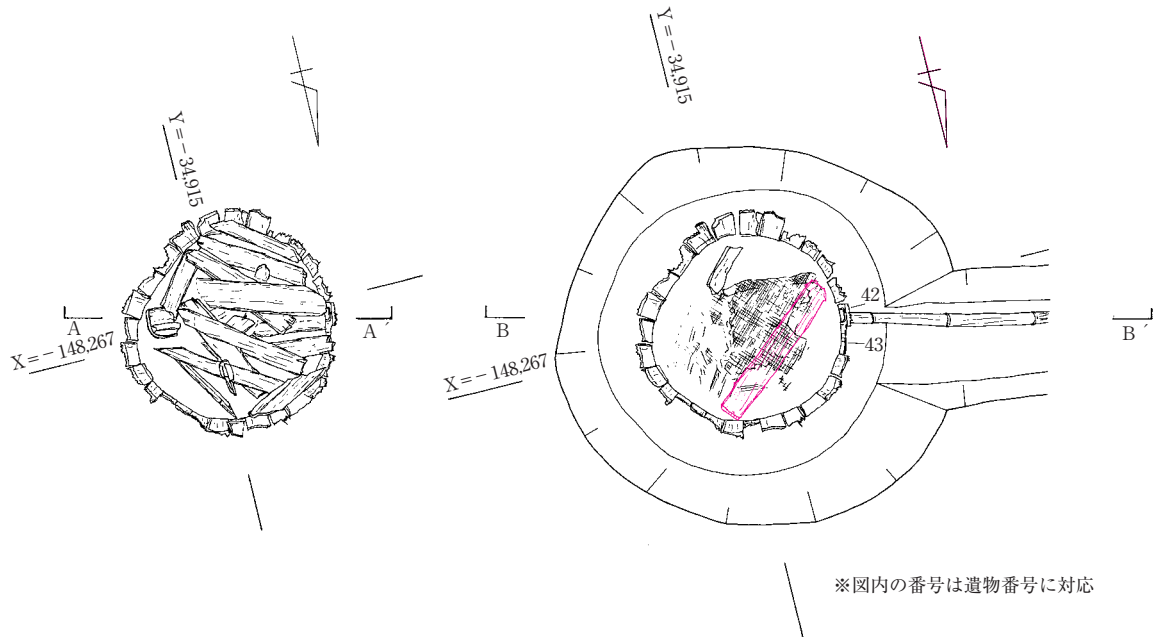
調査区の東南側に位置する。直径0.55mを測る。側板27枚で桶枠が構成されていた。調査当初は単に地下より水をくみ上げる井戸であろうと考えていたが、底板が見つかり、さらには、側板の一枚(42)に直径6cm弱の穴があげられており、ここから以下に述べる60溝に埋設されていた竹筒と結合していることが分かった。結桶を使用した貯水施設であることが判明した。底までの深さは0.7m程度である。このような結桶は中世では各所で見られ、当遺跡の近隣の瓜生堂遺跡などでも、桶底の無い井戸として使用されているが、このような導水用の竹管を伴う施設は近世段階に多いようである。中世の遺構としては珍しいといえる。ただし、構造は単純であり、今後見つかる可能性はあると考えられる。

桶内に堆積した土は6層に分かれるが、基本の土質は細砂~シルトである。

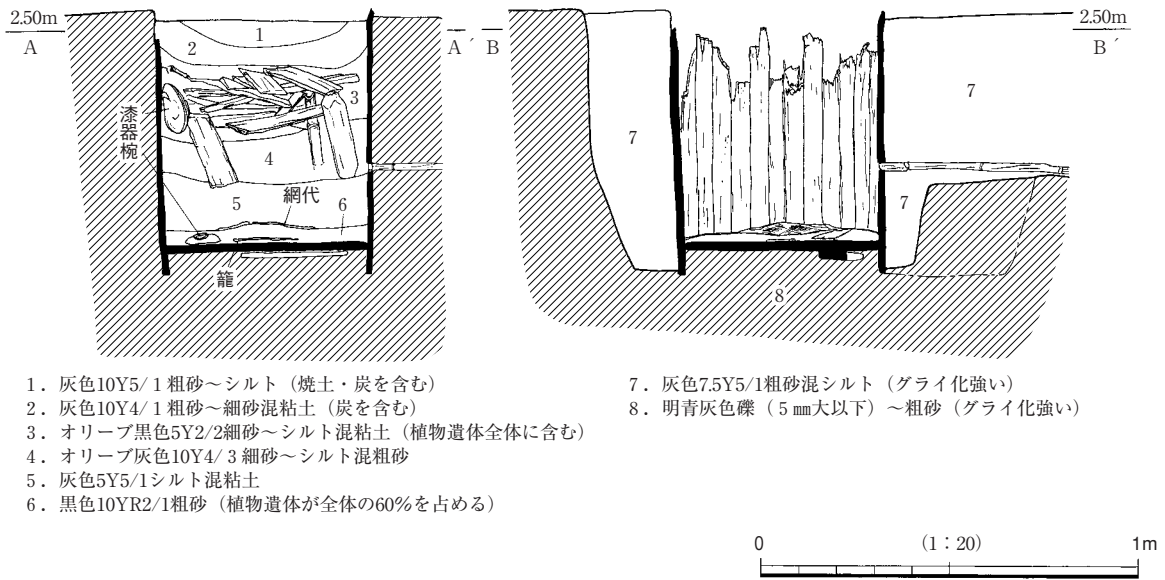
埋土の上方には破断された側板の上



第21図 19埋桶〔貯水施設〕・60溝〔導水施設〕平・断面図



※図内の番号は遺物番号に対応



1. 灰色10Y5/1粗砂～シルト（焼土・炭を含む）
2. 灰色10Y4/1粗砂～細砂混粘土（炭を含む）
3. オリーブ黒色5Y2/2細砂～シルト混粘土（植物遺体全体に含む）
4. オリーブ灰色10Y4/3細砂～シルト混粗砂
5. 灰色5Y5/1シルト混粘土
6. 黒色10YR2/1粗砂（植物遺体が全体の60%を占める）

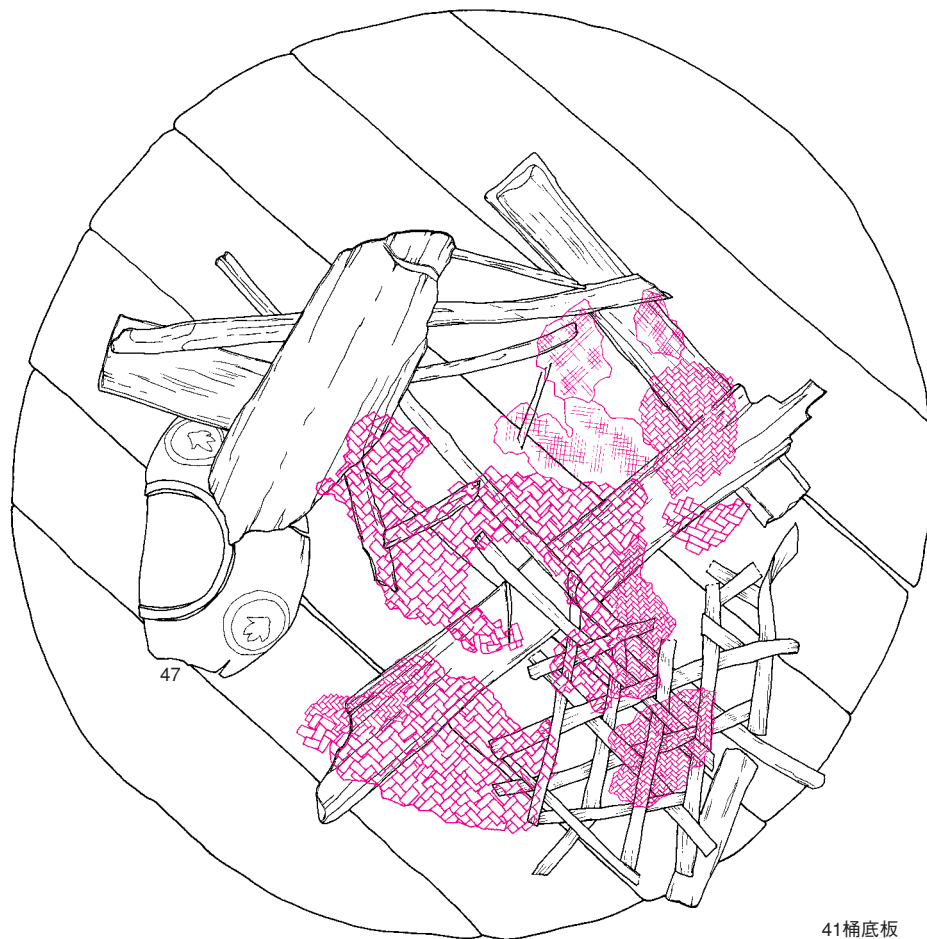
7. 灰色7.5Y5/1粗砂混シルト（グライ化強い）
8. 明青灰色礫（5mm大以下）～粗砂（グライ化強い）

第22図 19埋桶〔貯水施設〕平・断面図（左）平・立面図（右）

部が内側に落ちていた。これらの板は残長30cm前後であることから、上部は検出面よりさらに0.3m程度は延びると思われる。堀方の土は、周りよりグライ化が強く、灰色7.5YR5/1粗砂混シルトである。また、19埋桶の中からは土師器皿、瓦質羽釜が出土している。45は京都産模倣の土師器皿であろう。ほかに、桶にへばりつく形で漆塗椀48と、桶の底から漆塗椀47が出土している。桶底からは、網代製品も出土している。網代製品は網目の違いと重なり具合から見て4点は存在したと考えられる。いずれも竹籠であろう。導水管とは別に、井戸息抜きの竹であろうか、直立した形での竹筒も存在した。漆器椀、瓦質羽釜の形状からみて15世紀前半の遺構と思われる。

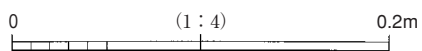
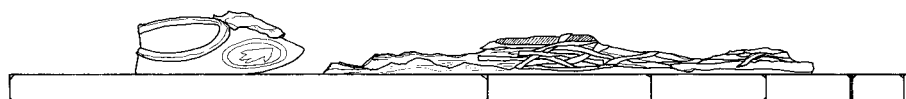
60溝〔導水施設〕（第21・25図 図版4～6・12・19）

調査区の南部に位置する。東西方向に直線で延びる。途中16井戸により削平を受け、東西に断ち切ら



41桶底板

※図内の番号は遺物番号に対応



第23図 19埋桶底遺物出土状況

れているが、これを復元すると、14溝南端近
 辺から発し、西側の19埋桶に取り付くことと
 なる。長さ18.00m、幅0.50m、深さ0.25mであ
 る。溝の内部の埋土を除くと竹筒が検出され
 た。竹筒はなだらかに西側から東側に傾斜す
 る。水を流すために竹筒の節はつぶされ、竹
 同士のつながりは、ジョイントの特別の施設は
 なく、片方の竹をそのままもう一方に差し込
 まれているだけである。竹は埋設され、暗渠

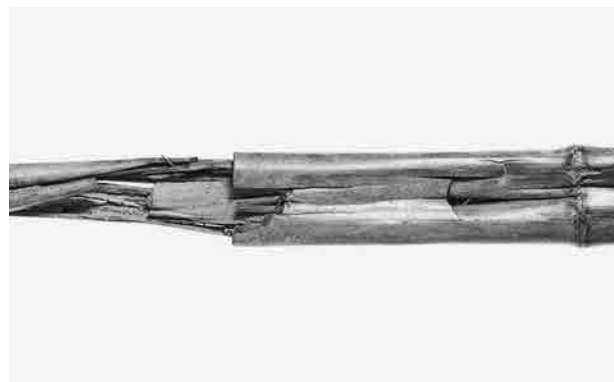
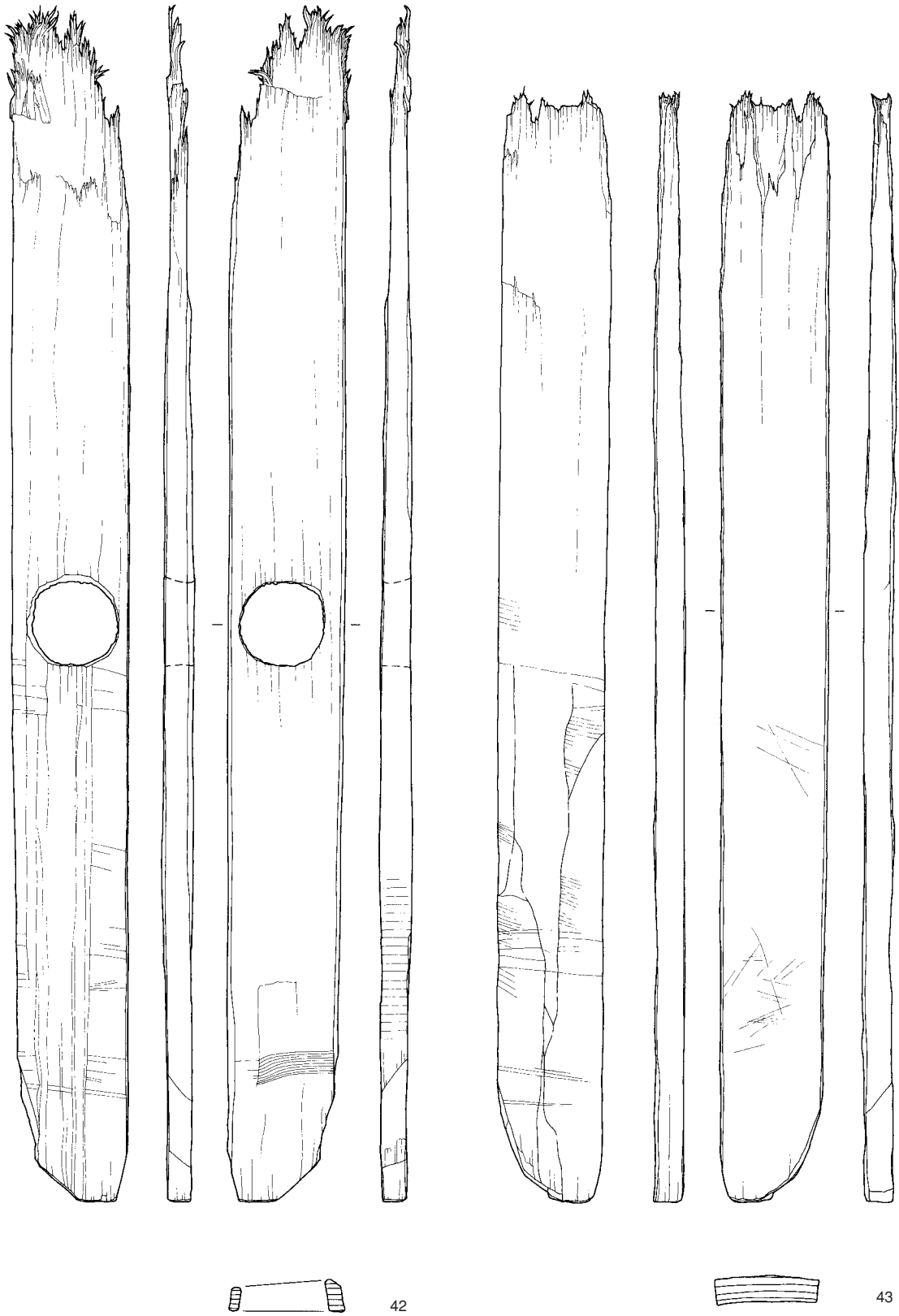
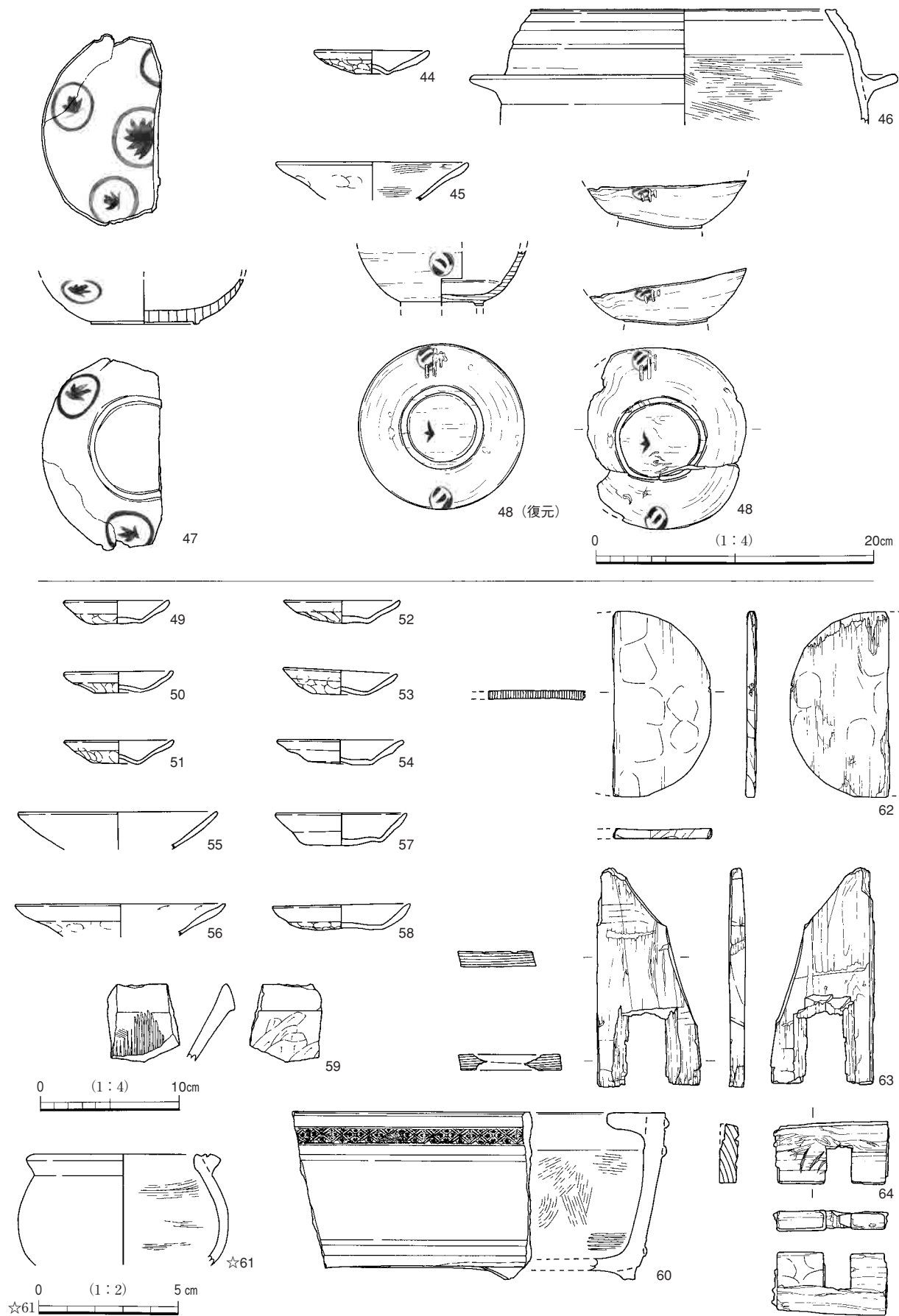


写真1 60溝 竹製導水管継目部分



第24図 19埋桶側板



第25図 19埋桶〔貯水施設〕出土遺物（上）・60溝〔導水施設〕（下）

となって使用されていたものと思われる。14溝の手前で当溝は終わり、竹筒も削られていたが、恐らく、当溝から引き込まれた水を19埋桶に溜めたのであろう。60溝は19埋桶と共に、何か宗教的な施設であろうか。

遺物には当遺跡通有に見られる中世の土器のほか、曲物、「コ」の字状に加工された木製品63、64が出土している。64は導水管となっている竹筒を上から押さえつけて固定していた。63は原位置をとどめない浮いた形で検出したが、同様に使用された板と思われる。

なお、19埋桶・60溝から下記の20土坑（a～c類）とは異なる土師器皿が出土しており、小型をd類、大型をD類とした。d類は口径8.0cm前後、器高は2.0cm前後でやや高い。底部は狭く、体部は指押さえにて外反するが、口縁部は内傾気味におさまる。なお、d類、D類ともに、土師器皿の底部は「平底」、「全体にやや上げ底」、「中央が少し窪む」、「中央が強く窪む。」の4種類（枝番号1～4）に細分している。D類は口径9.0cm前後を測り、底部の面積も広い。器の調整はd類に似る。

20土坑と周辺のピット（第26・27図 図版4・12）

20土坑は19埋桶の東に接する。長方形のプランを呈する。長辺1.25m以上、短辺0.80m、深さ0.40mを測る。埋土には焼土や炭を含む粗砂混シルトである。当土坑からは集積した土師器皿が多数完形で出土している。白磁と瓦の破片を除き当土坑出土の遺物は全て土師器皿である。また、焼土を含む柱穴が20土坑を取り囲む形で7基、62～68ピットを検出した。ピットの形状は、直径0.14m～0.23m、深さは0.13m～0.23mを測る。63ピットは根石を伴い、柱も遺存していた。68ピットは直径0.14m、深さ0.13mを測る。埋土には灰色5Y5/1炭混シルトが入る。

当初、土師器皿が密集する長方形のプランの外側に炭、焼土層が幅0.2m程度で帯状に取り巻くので、土壙墓の掘方と棺の関係を想定したが、炭、焼土を取り除くとこのようなピット類が検出された。19埋桶・60溝と同様、何か宗教的な施設であろうか。

出土した土師器皿を大きく3種に分けてみた。a類（65～70）は、横ナデを施し、指圧痕が残らず、底部は平たく、口縁端部は歪み、丸くおさまる。体部はやや内弯気味に立ち上がる。口径は7.3cm前後を測る。焼成の色調はにぶい橙色が中心である。b類（71～80）は、a類に近いが、体部はやや外反し、口縁端部は尖り気味におさまる。口径は7.5cm前後を測る。焼成の色調はにぶい黄橙色が中心である。c類（81～87）の底部はやや持ち上がり、指圧により体部は外反する。なでて仕上げるが、指圧跡も明瞭に残る。口縁端部はつまみあげ状におさまる。口径は7.7cm前後を測る。焼成の色調は灰黄色が中心である。a類、b類、c類の順に新しい様相をもつと思われる。なお、88は下記に述べる第5面の80溝などに見られるE類に近似し、破碎された遺物でもあることから、下層から巻き込んだ遺物と考えられる。形状の確かな遺物が土師器皿のみで時期を確定し難いが15世紀中頃の遺構であろうか。

25ピット（第31図）

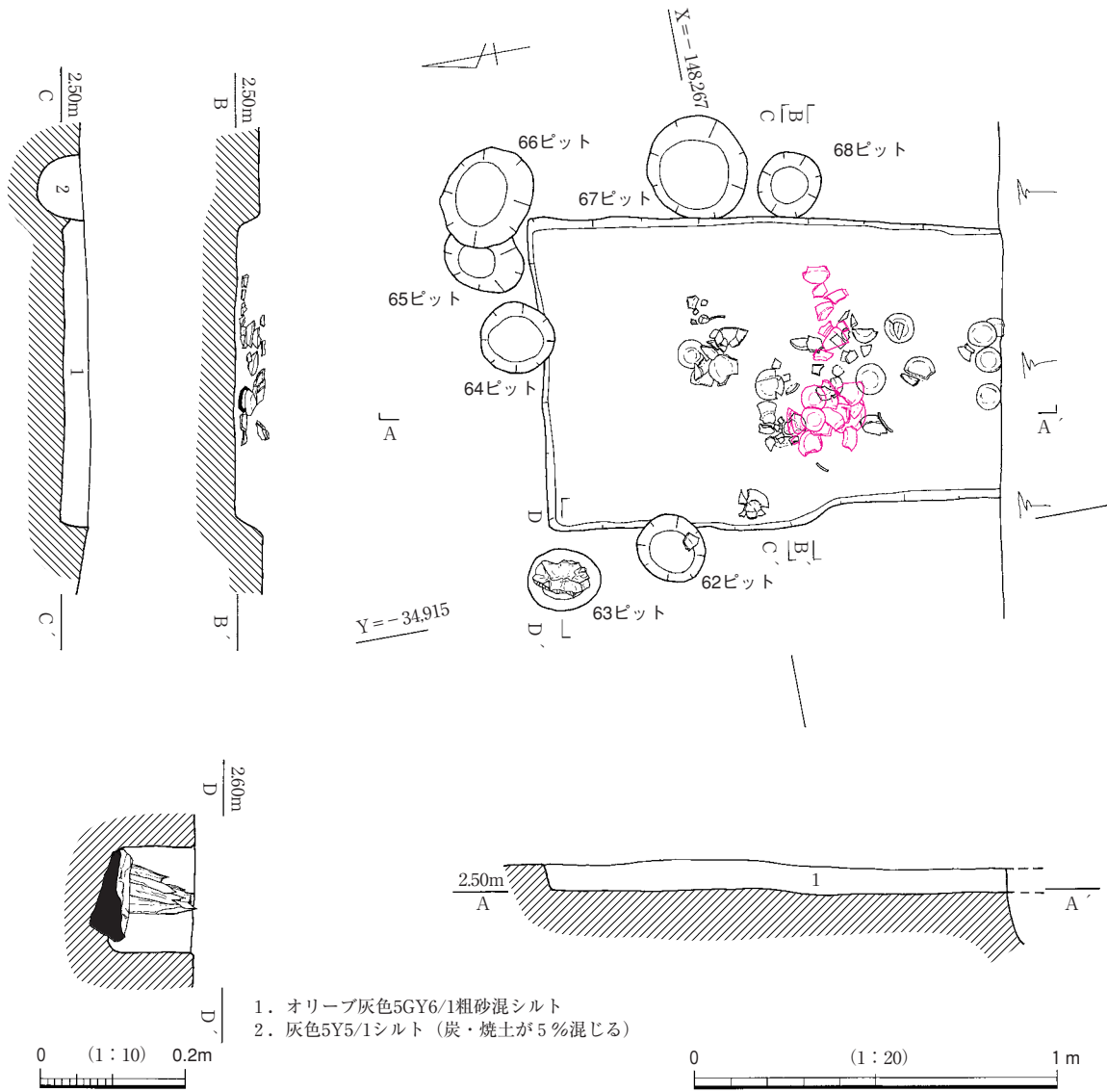
調査区の東端に位置する。直径0.30m、深さ0.05mを測る。図化した土師器皿95が一点出土している。

30土坑（第28・31図）

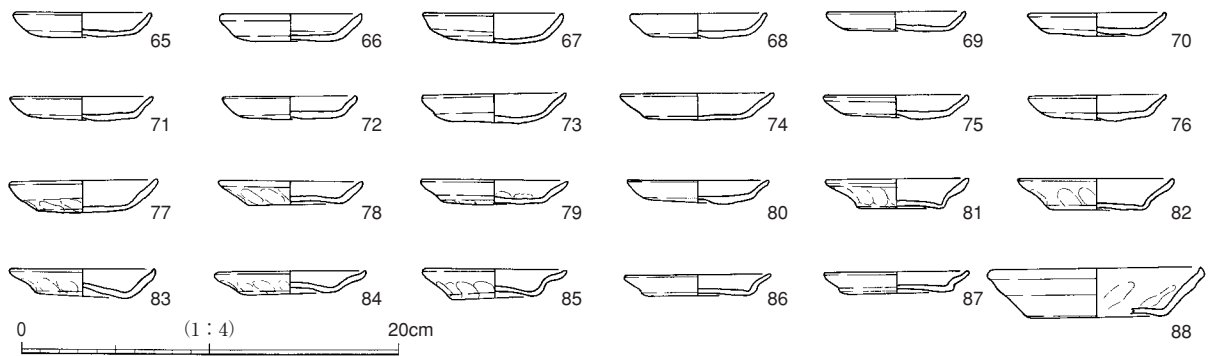
調査区中央北端に位置する。長軸を東西にとる隅丸方形の土坑であるが北は側溝により若干欠損している。長軸1.10m、短軸0.65m以上、深さ0.22mを測る。埋土には黒褐色2.5Y3/1粘土が入る。上方には鉄分が多く、遺構の口は広がる。遺物は図化した96の瓦器碗と土師器皿の細片が3点出土している。

35ピット（第31図）

30土坑の西に位置する。直径0.25m、深さ0.05mを測るピットである。埋土にはオリーブ黒色10Y3/1



第26図 20土坑と周辺のピット平・断面図

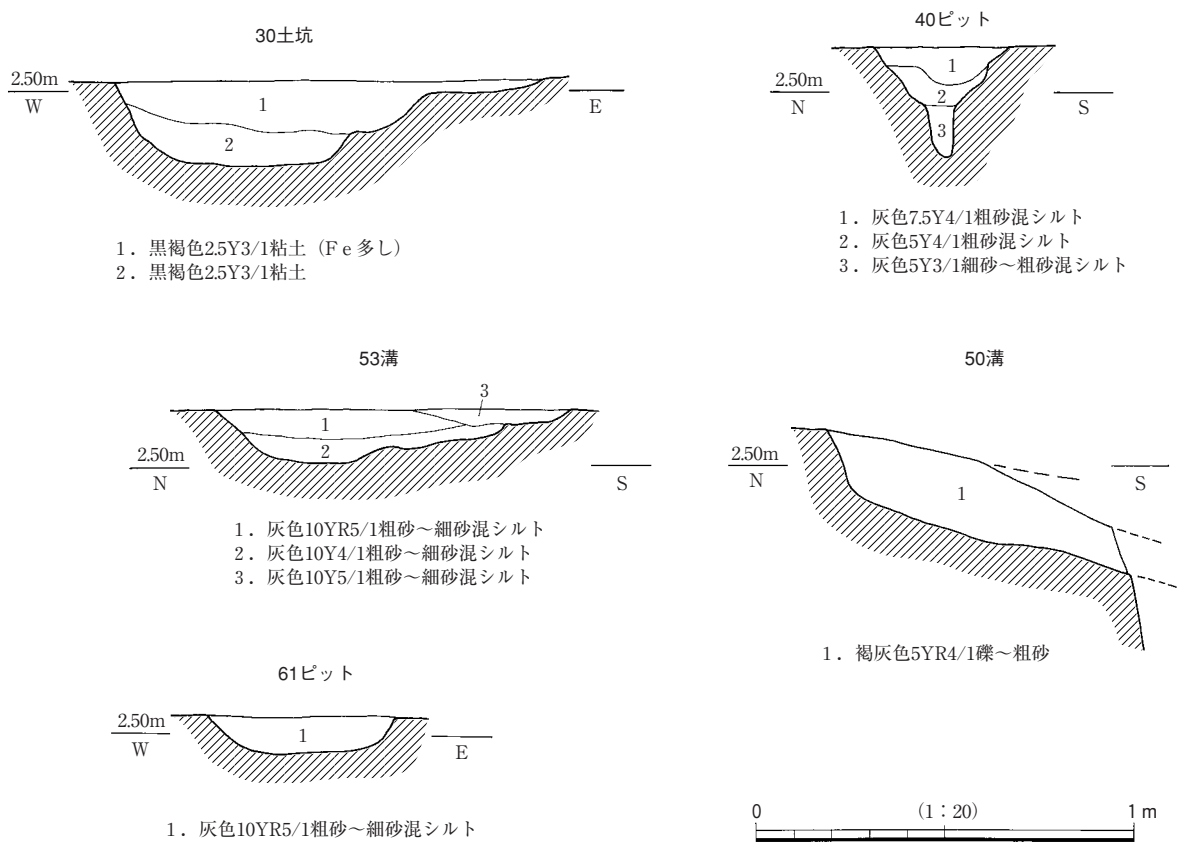


第27図 20土坑出土土師器皿

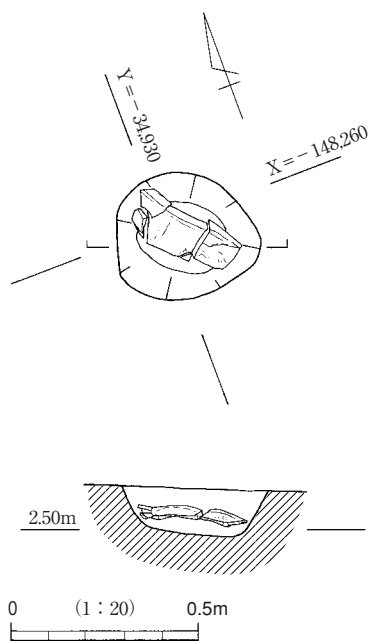
砂混シルトが入る。図化した瓦器碗97が出土している。

37ピット (第29図)

調査区西北端に位置する。直径0.40m、深さ0.12m、深さ0.12mを測る。埋土にはオリーブ黒色10Y 3/1砂混シルトが入る。柱の根石のかわりに常滑焼甕の体部の細片が使用されていた。



第28図 06-1-1 調査区第4面検出遺構



第29図 37ピット平・断面図

40ピット (第28図)

調査区西北部に位置する。直径0.45m、深さ0.29mを測る。ロート状の形態をとる。埋土には灰色5Y4/1粗砂混シルトなどが入る。遺物は出土していない。39、34、32の3基のピットと直線で並ぶが、掘立柱建物跡や柵列であるかは確定しがたい。

53溝 (第28図)

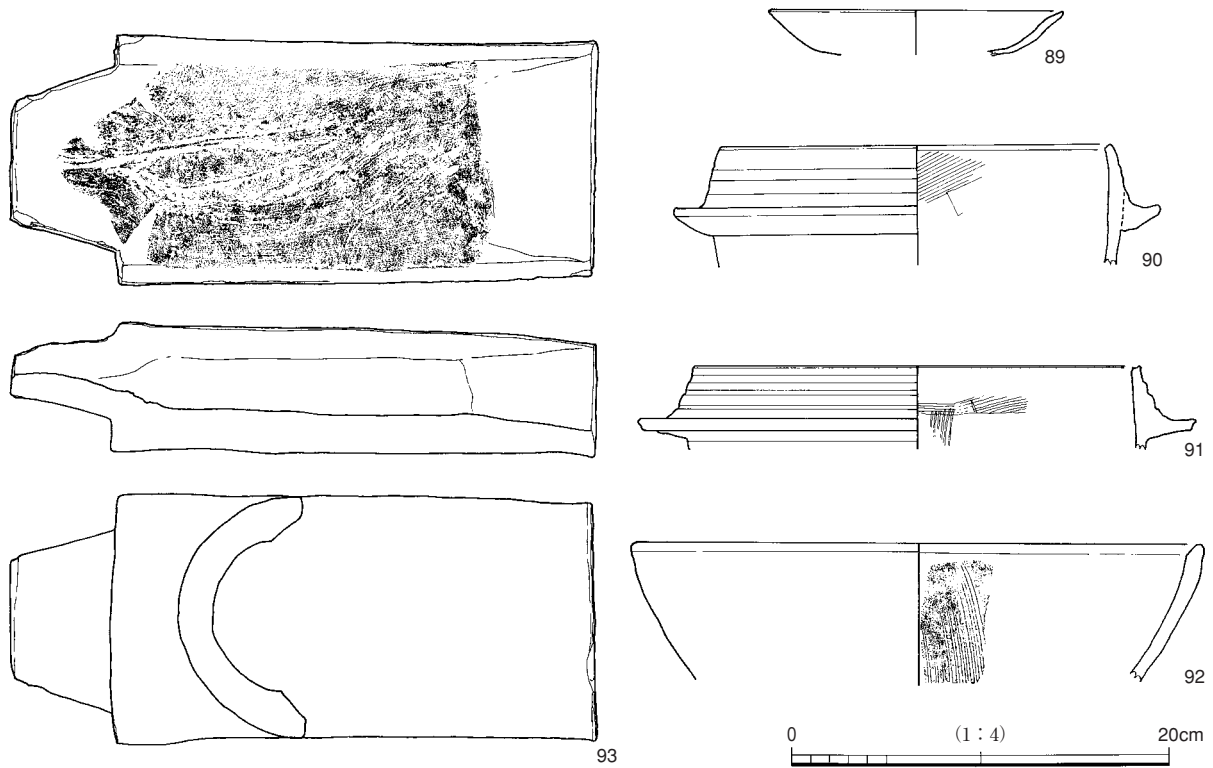
調査区西南部に位置する。長さ3.10m、幅0.90m、深さ0.40mを測る。埋土には灰色7.5Y4/1粗砂混シルトが入る。60溝を切る形で位置する。遺物は出土していない。

61ピット (第28図)

調査区東端に位置する。直径0.45m、深さ0.10mを測る。埋土には灰色7.5Y4/1粗砂混シルトが入る。このような規模のピットがこの近辺に集中する。遺物は土師器皿数片が出土している。

6. 第1調査区 第4-2面 (第32図 図版7)

東端部分で5面に至るまでにもう1面、第4-2面を検出した。T.P.2.4m前後を測る。この面にはピットが多く見られ、88、89ピットなど柱根を残すものもあった。また、87土坑というやや異質な遺構



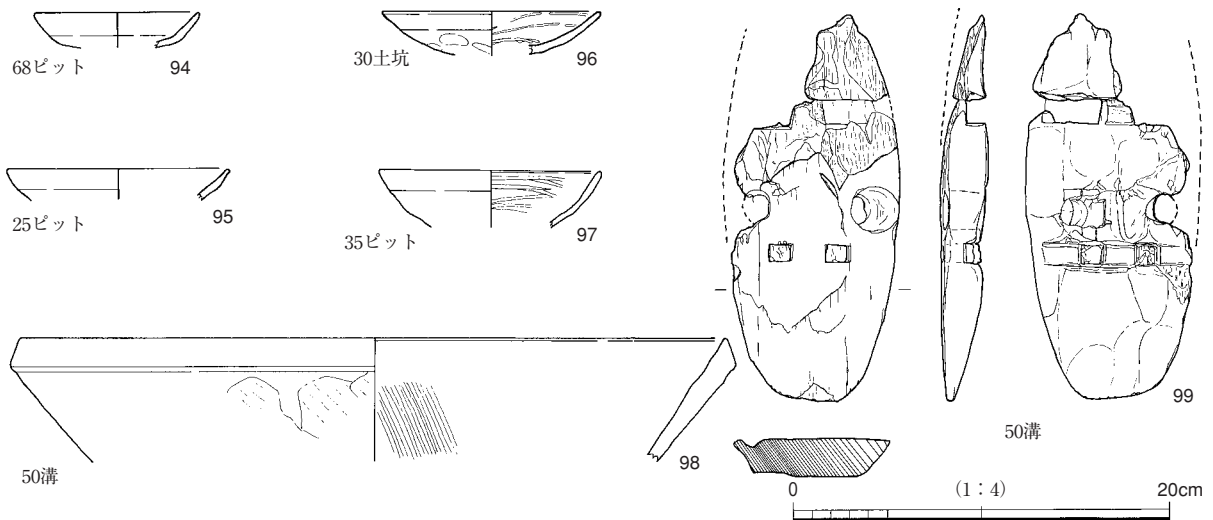
第30図 14溝〈下層〉出土遺物

が見つかっている。なお、当面の下層は第4 - 2層であるが、瓦類が出土している。

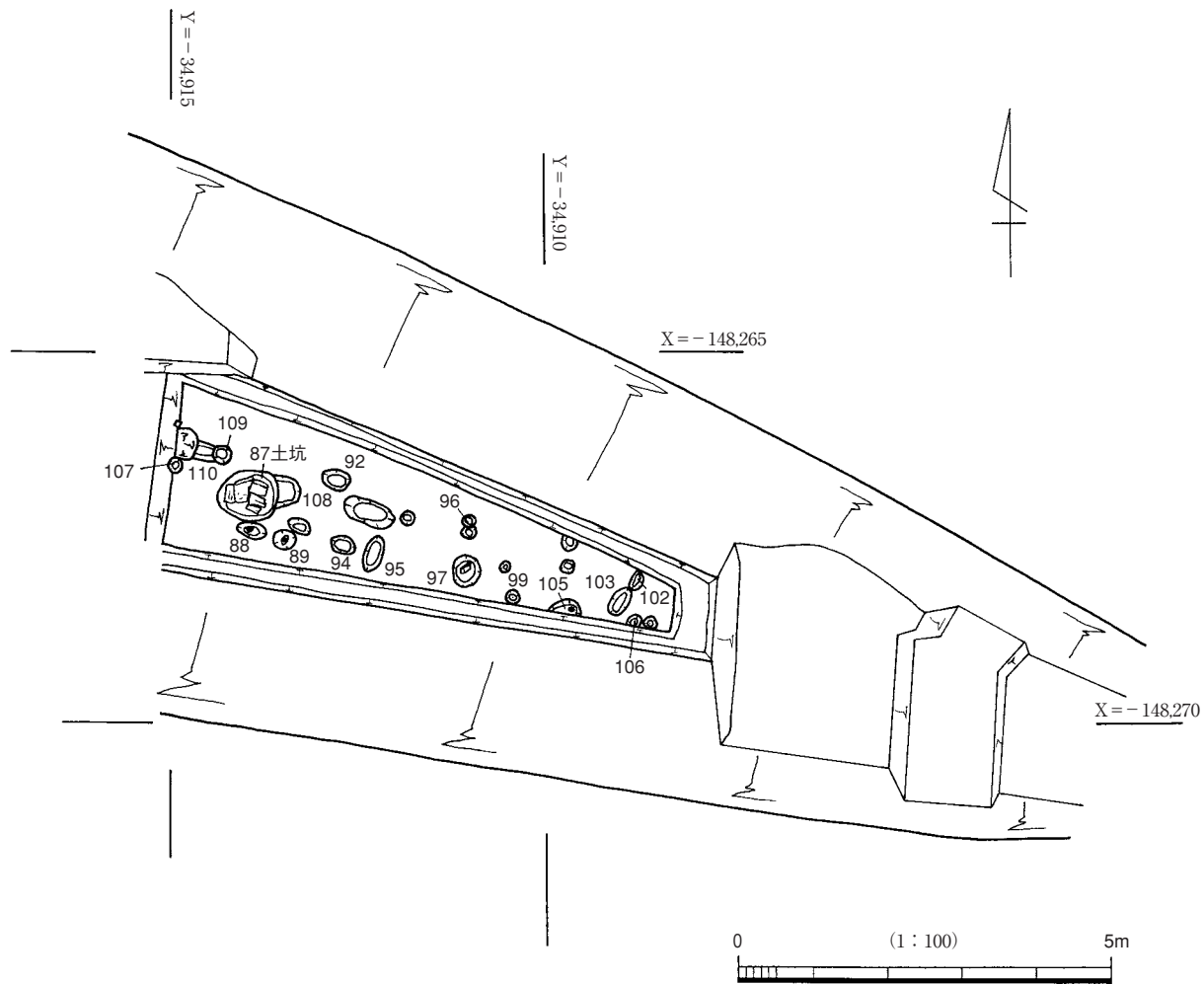
87土坑（第34・35図 図版7・20）

上面の20土坑の東に接する位置に当たる。隅丸方形の遺構である。柱穴と考えられるが、以下に記す特異性を持つので、土坑とした。長軸0.74m、短軸0.54m、深さ0.18mを測る。埋土には黒褐色7.5Y4/1炭、焼土を含む砂混シルトが入る。108ピットを切る。四角い礎石の上にさらに礎板が使用されていた。この板は4枚（115～119）に分かれているが、もとは1枚のコウヤマキの板である。その上に柱材を据えたであろう、やや異質な遺構である。土師器皿、瓦器碗、瓦質羽釜片が出土している。

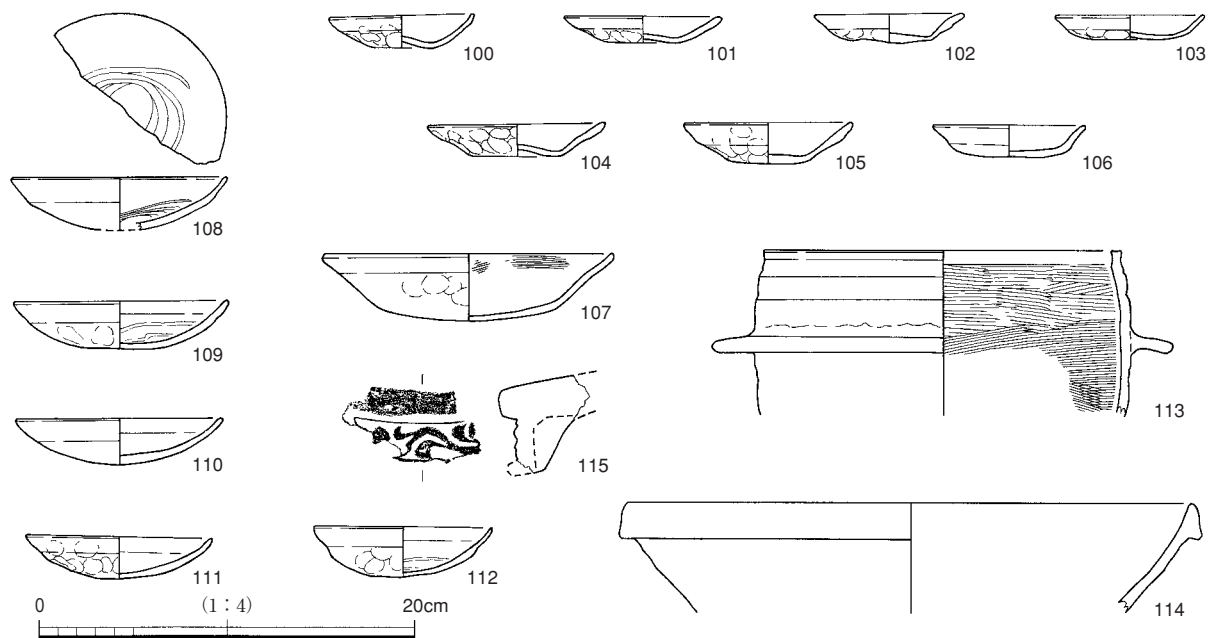
上部の遺構である20土坑の下近くにて検出していることや、特異な構造を持つことから考え、この遺構も宗教行為に関する施設の跡であるのかもしれない。



第31図 06-1-1 調査区第4面検出遺構出土遺物



第32図 06-1-1 調査区第4-2面全体図



第33図 06-1-1 調査区第4層出土遺物

7. 第1調査区 第4層と第5面

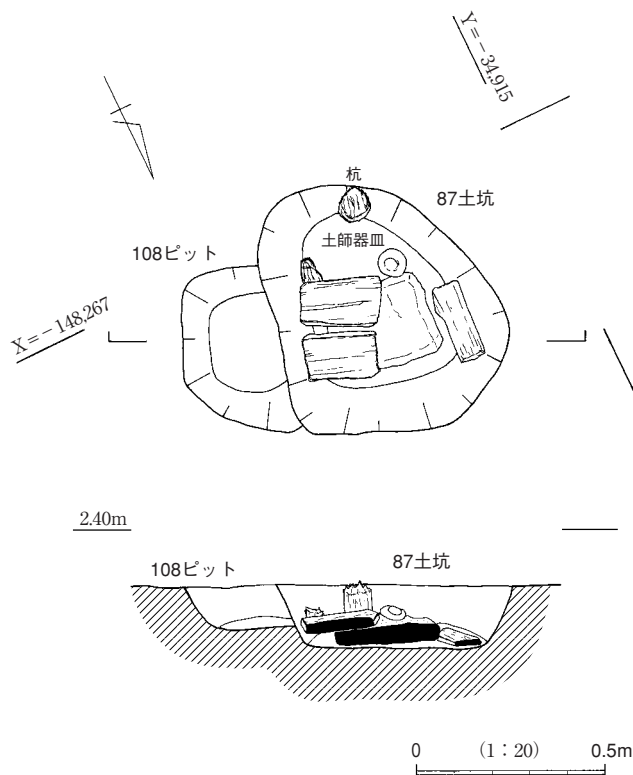
(第33・36図 図版8・13)

第5面はT.P.2.2m~2.4m程度を測る。調査区の西端が高く、東へ低くなる。土坑と溝、柱穴、杭等を検出した。特に調査区の南側に位置する80溝は第5面の調査範囲の内、半分以上を占めている。

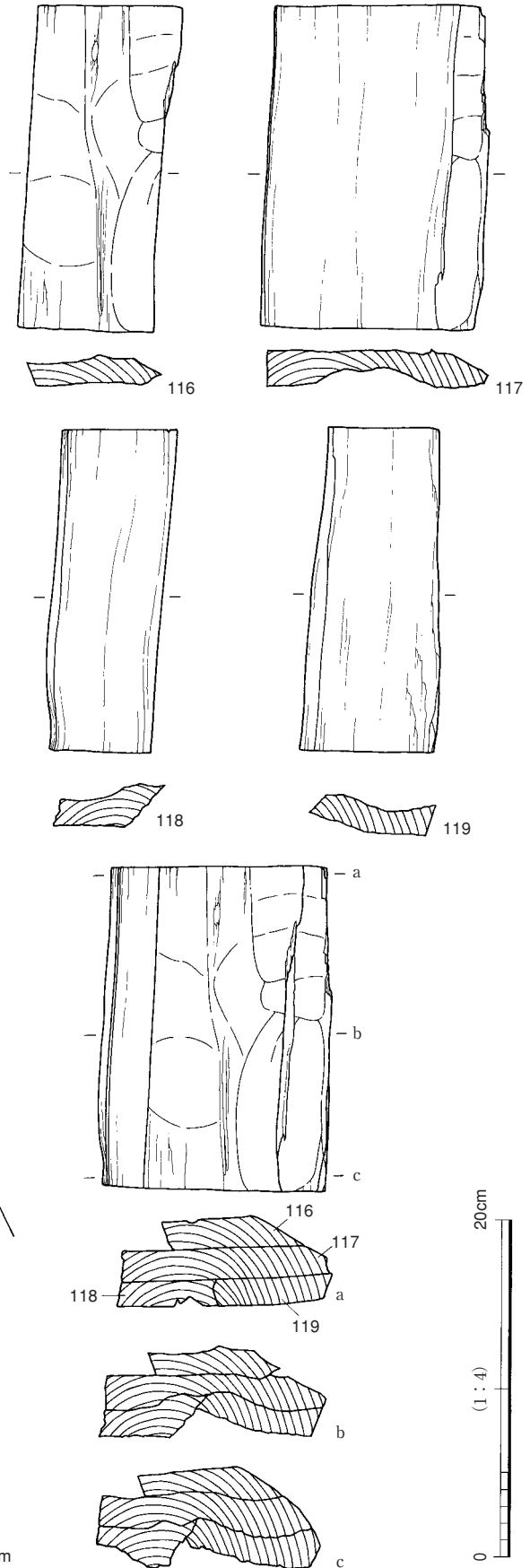
第4層および第5面直上の遺物は、その大半が中世の遺物で占められる。主な遺物として、土師器皿や瓦器椀、瓦質羽釜、瓦質鉢、常滑焼甕、備前焼甕、東播系須恵器練鉢、瓦などが出土している。瓦器には108~112の和泉型IV-3~5、107のように京都産模倣したと思われる土師器皿、113のように口縁部の直立する瓦質羽釜、114のような東播系須恵器練鉢がある。14世紀~15世紀前半頃の遺物が多い。

80溝 (第37~47図 図版9・13~21)

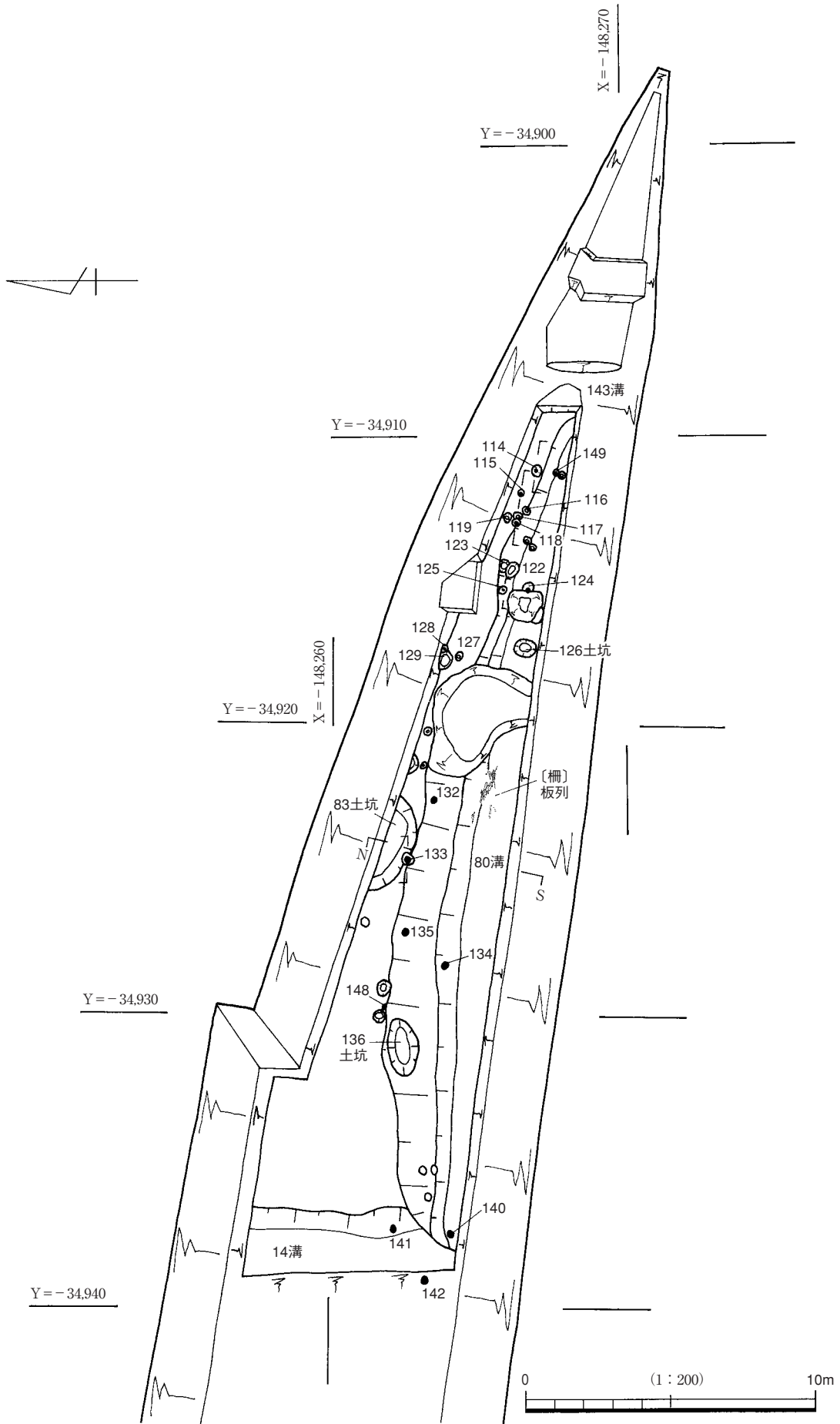
長さ29.0m以上、幅3.6m以上、深さ0.78mの大きな溝である。東西方向に走る。南側の溝



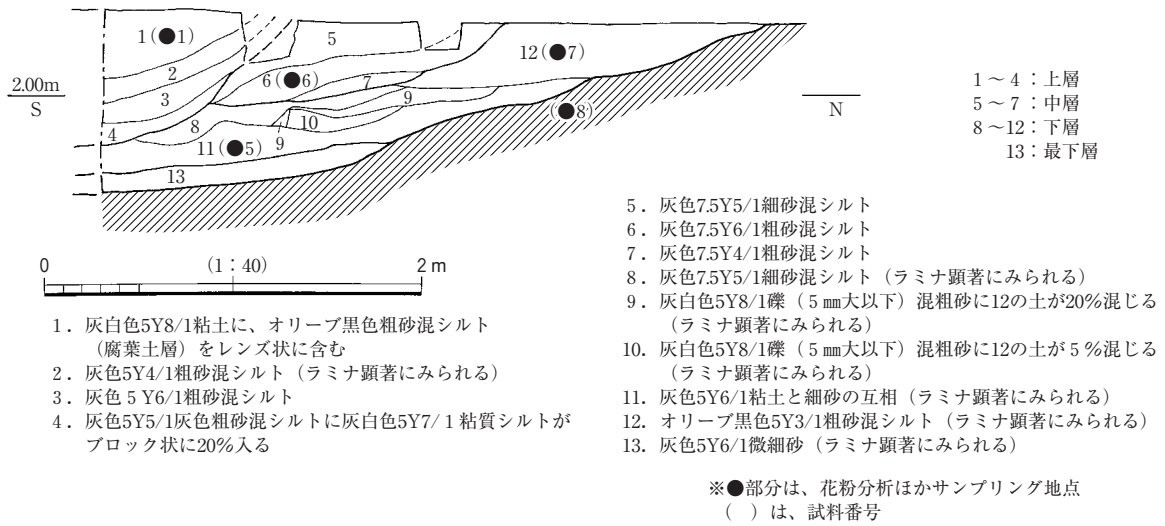
第34図 87土坑、108ピット平・立面図



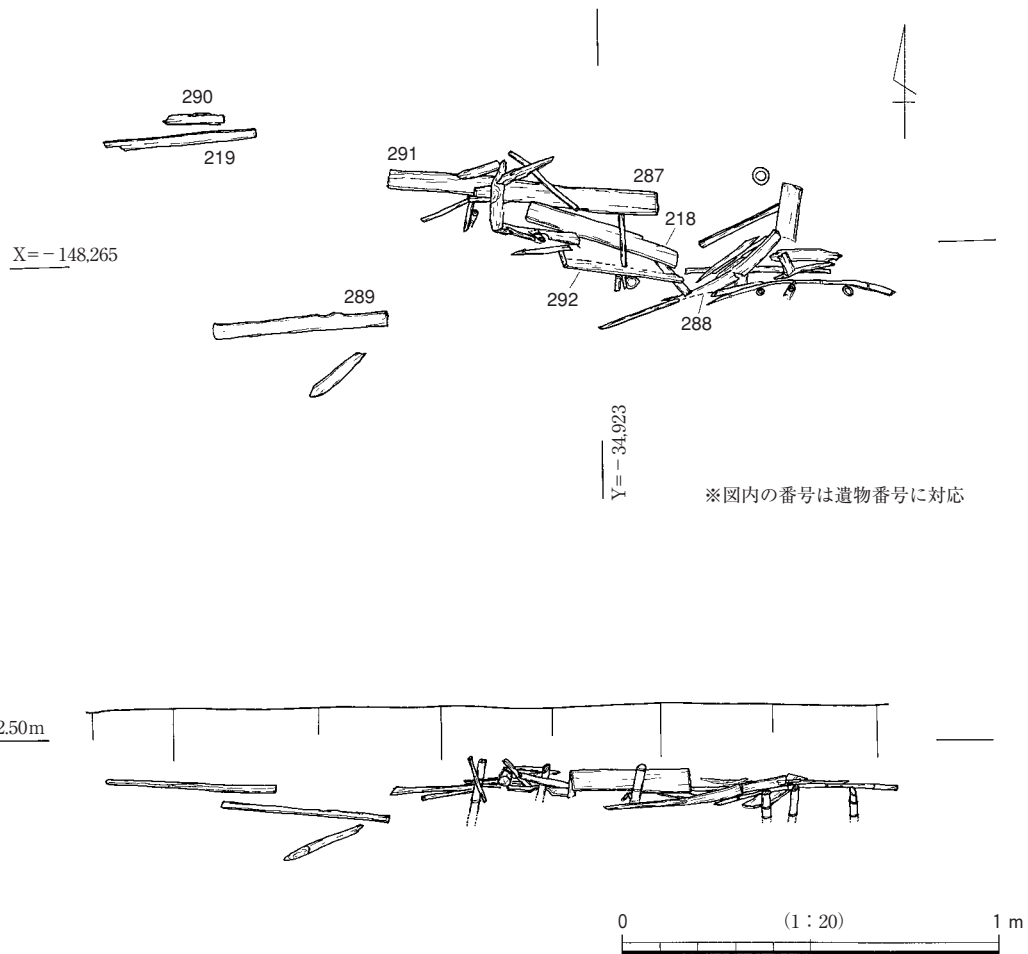
第35図 87土坑出土板材



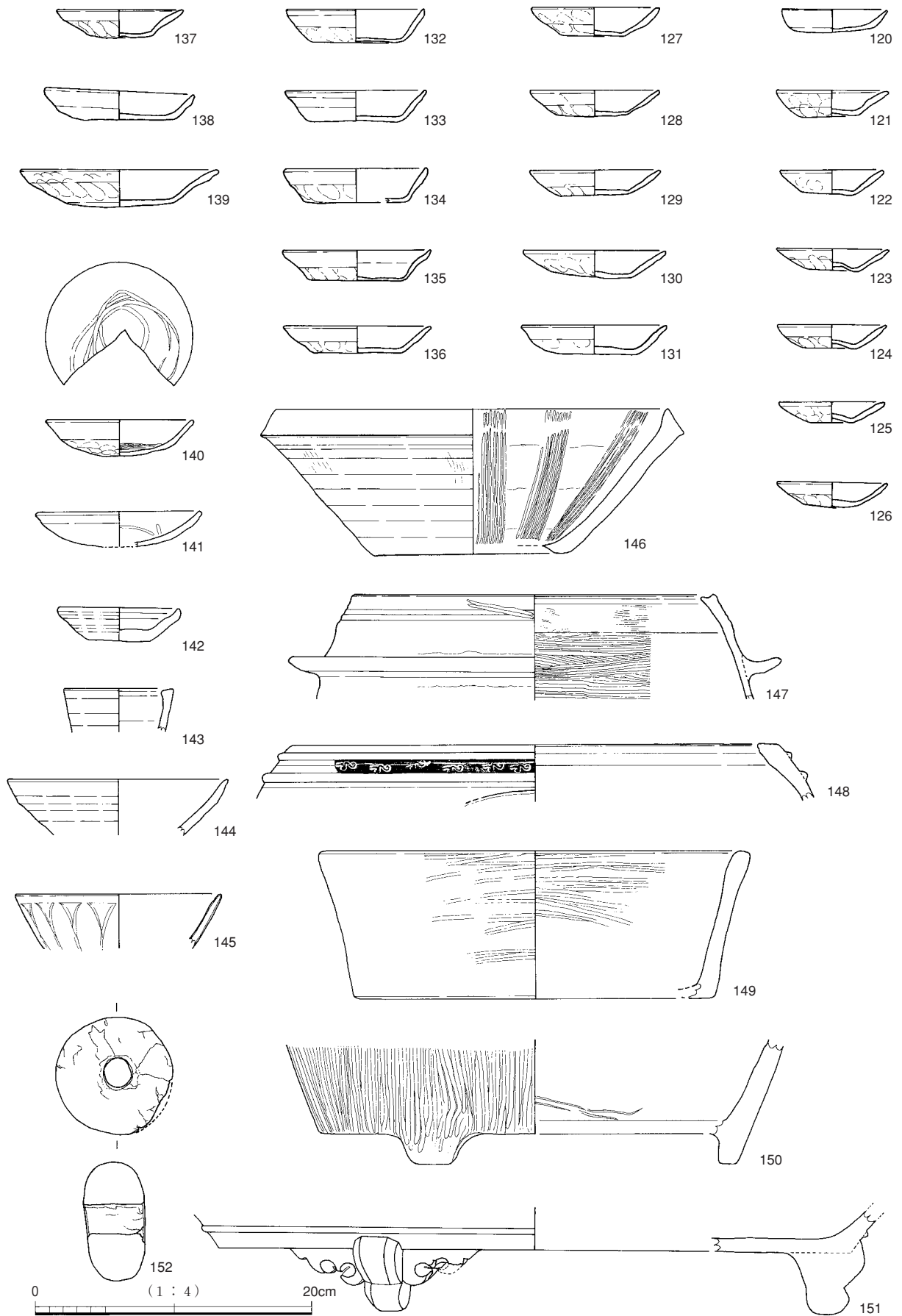
第36图 06-1-1 調査区第5面全体图



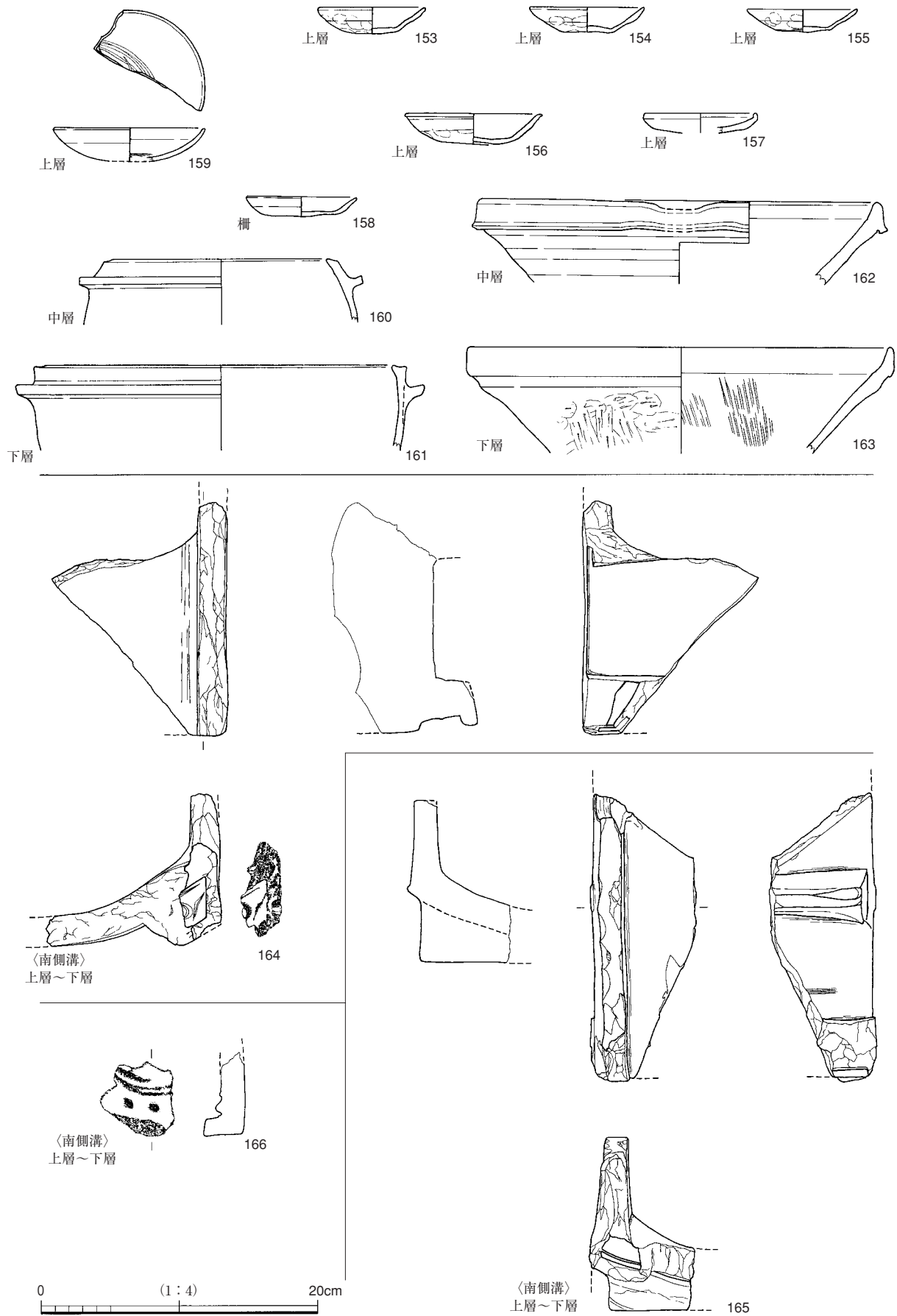
第37図 80溝断面図



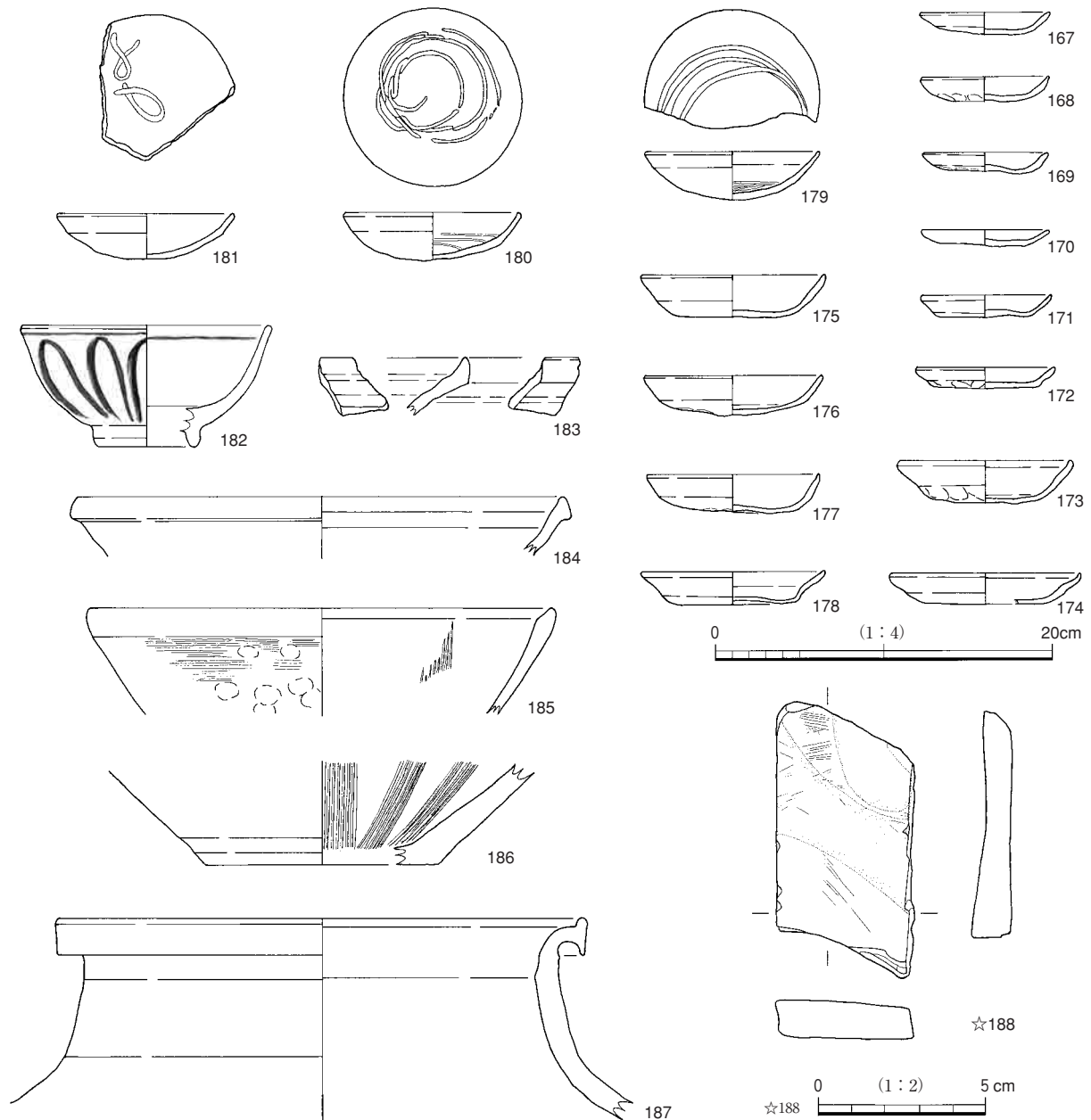
第38図 80溝〔柵〕板列平・立面図



第39図 80溝出土遺物①



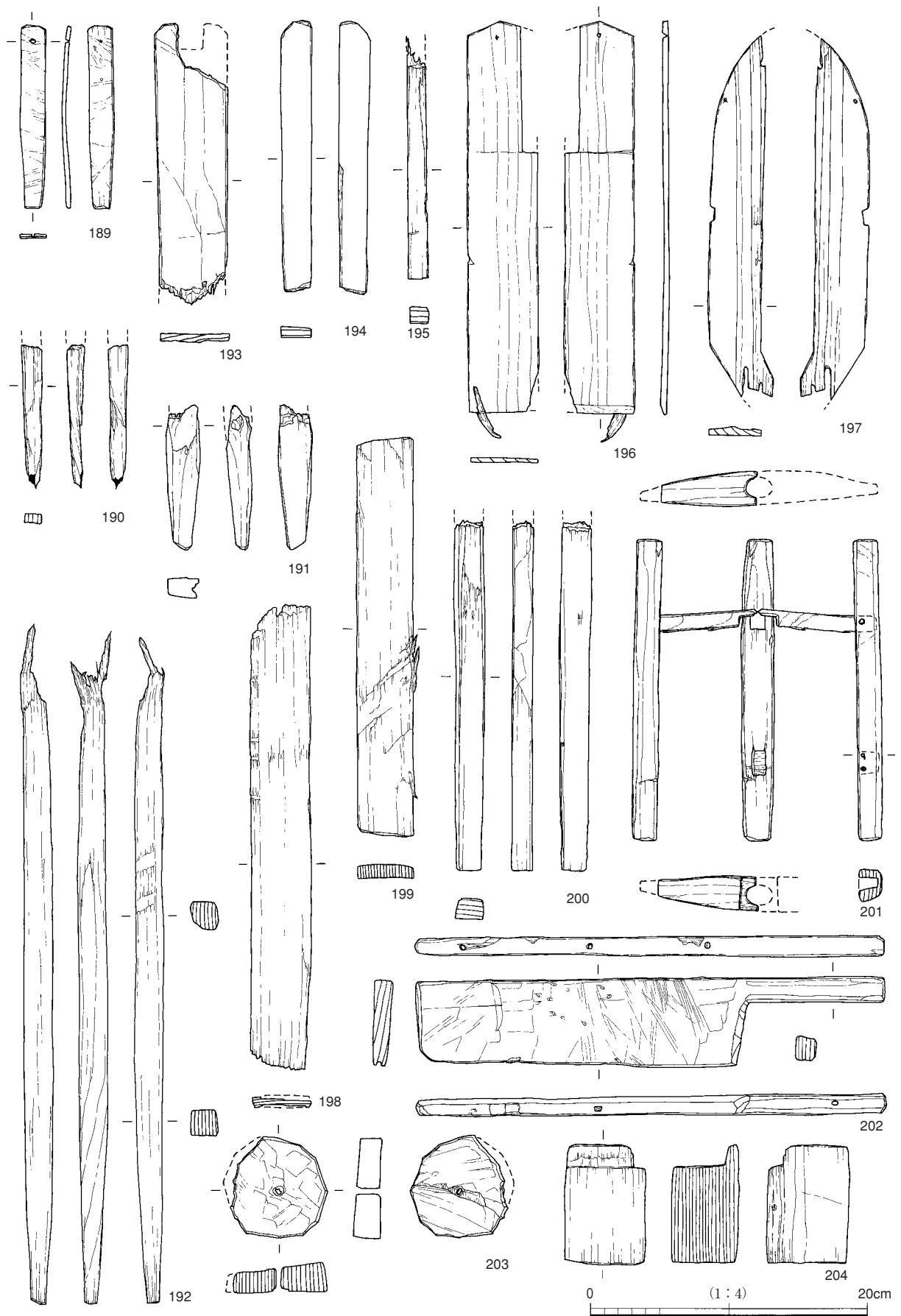
第40図 80溝出土遺物② 〈上層~下層〉



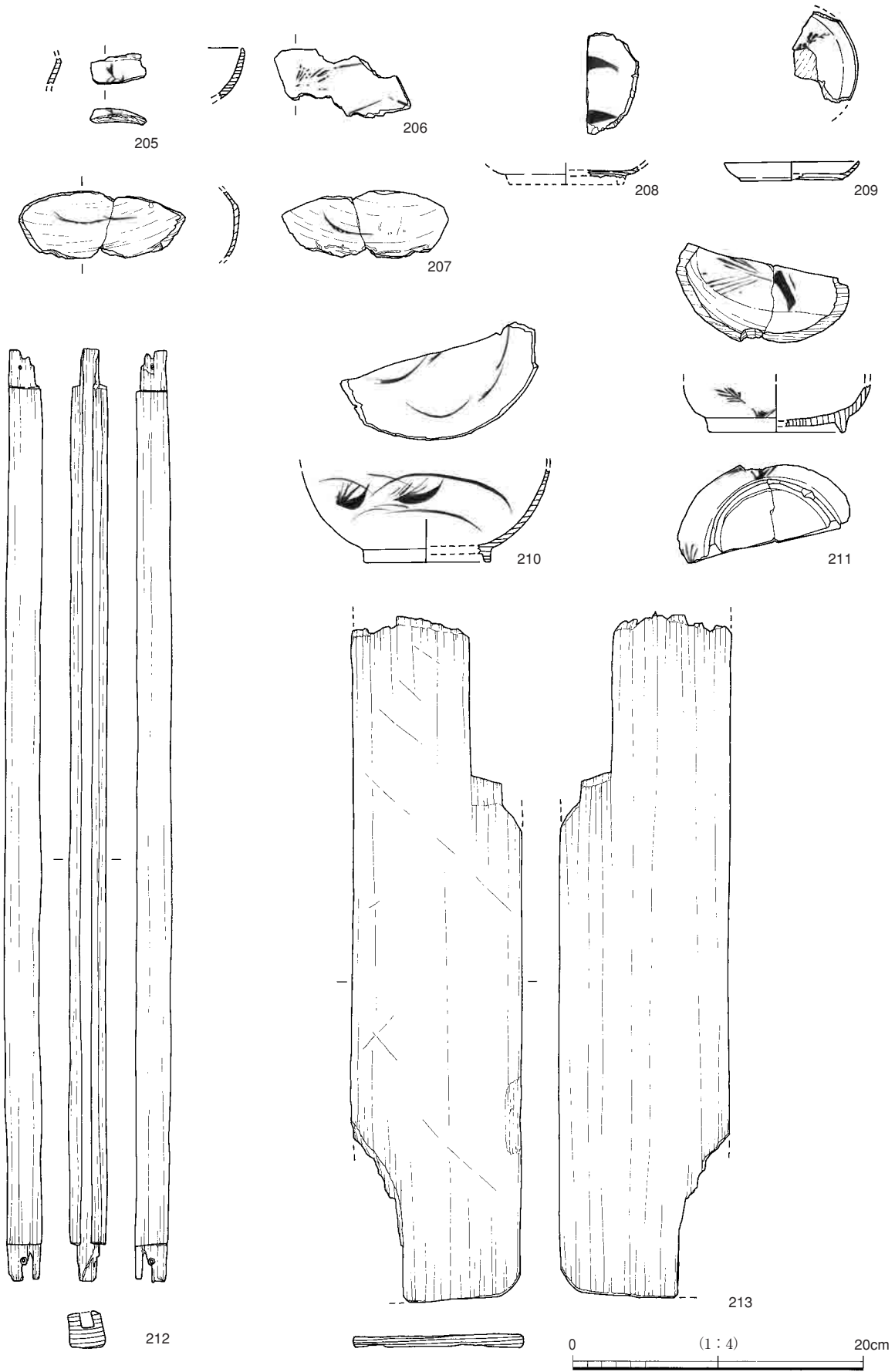
第41図 80溝出土遺物③〈最下層〉

の肩は調査区外となる。西端は攪乱を受けているが、14溝に取り次ぎ、溝全体の平面形としては、「L」字を呈するものと思われる。埋土は溝の中央部分が最も深い。この深部を中心に、なだらかに東西に傾斜している。中層以下は細かいラミナが認められた。下層では、植物遺体も顕著に見られた。最下層は微細砂層で湧水が激しかった。滞水していたか、弱い流れがあったのであろう。

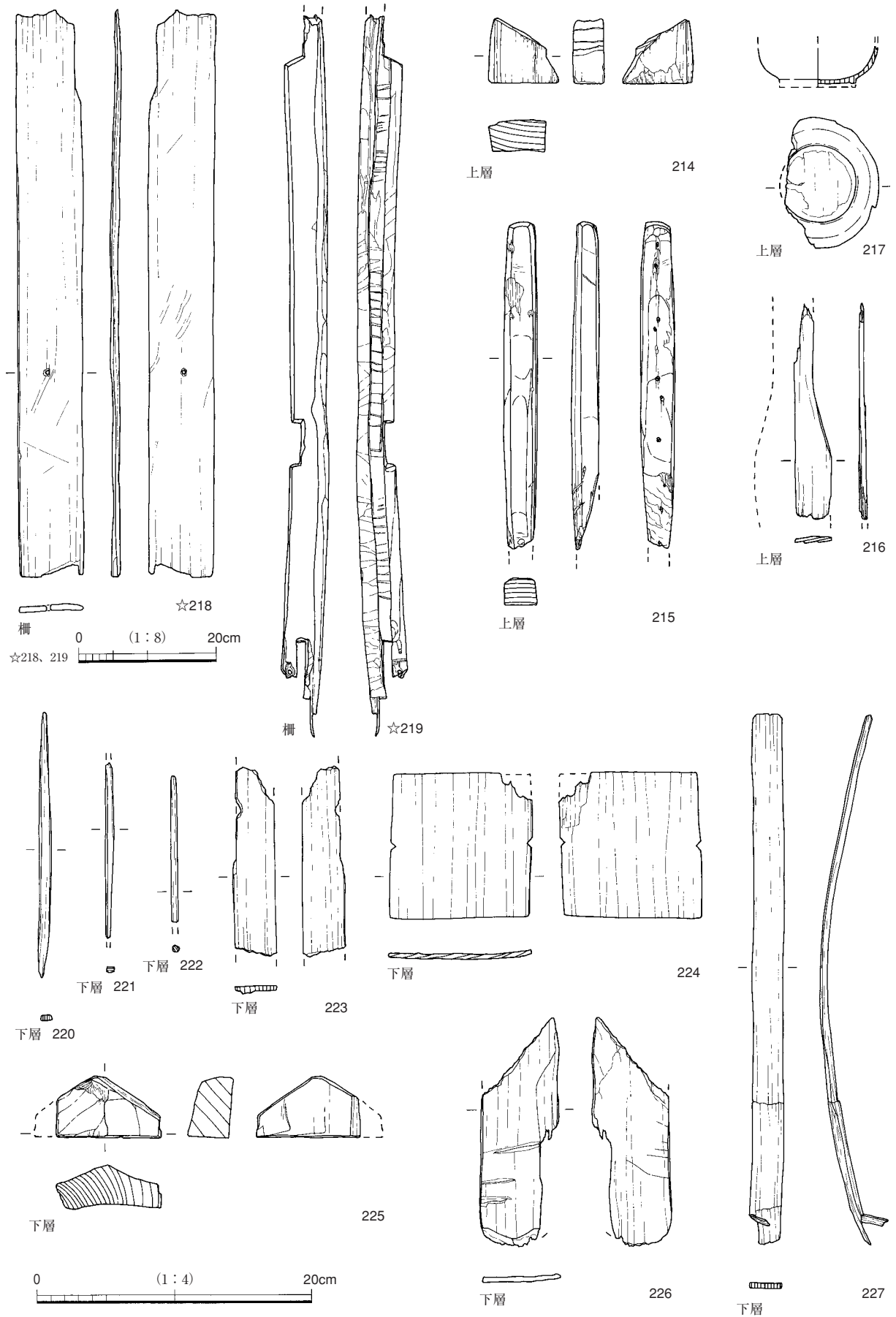
第5面で検出した遺構に含まれる遺物も大半はこの80溝から出土している。中世の土師器皿・羽釜、瓦器椀、瓦質甕・羽釜、備前焼播鉢、常滑焼甕・鉢、東播系須恵器練鉢、中国製青磁椀など13世紀後半から14世紀末頃の遺物が出土している。このような多くの土器、陶磁器と共に木製品の出土量も少なくない。残念ながら、その多くは、部分的な部材のみで、本来の用途を推察するに難しいものもある。しかし、201の糸巻きなどの織機部材、草履254、下駄255などの履物、漆器椀など用途の判るものもある。ぎっちょよう まり 毬杖の毬266も見つかった。特に目を引くのが、木簡が2点出土していることである。「西方源三上」と



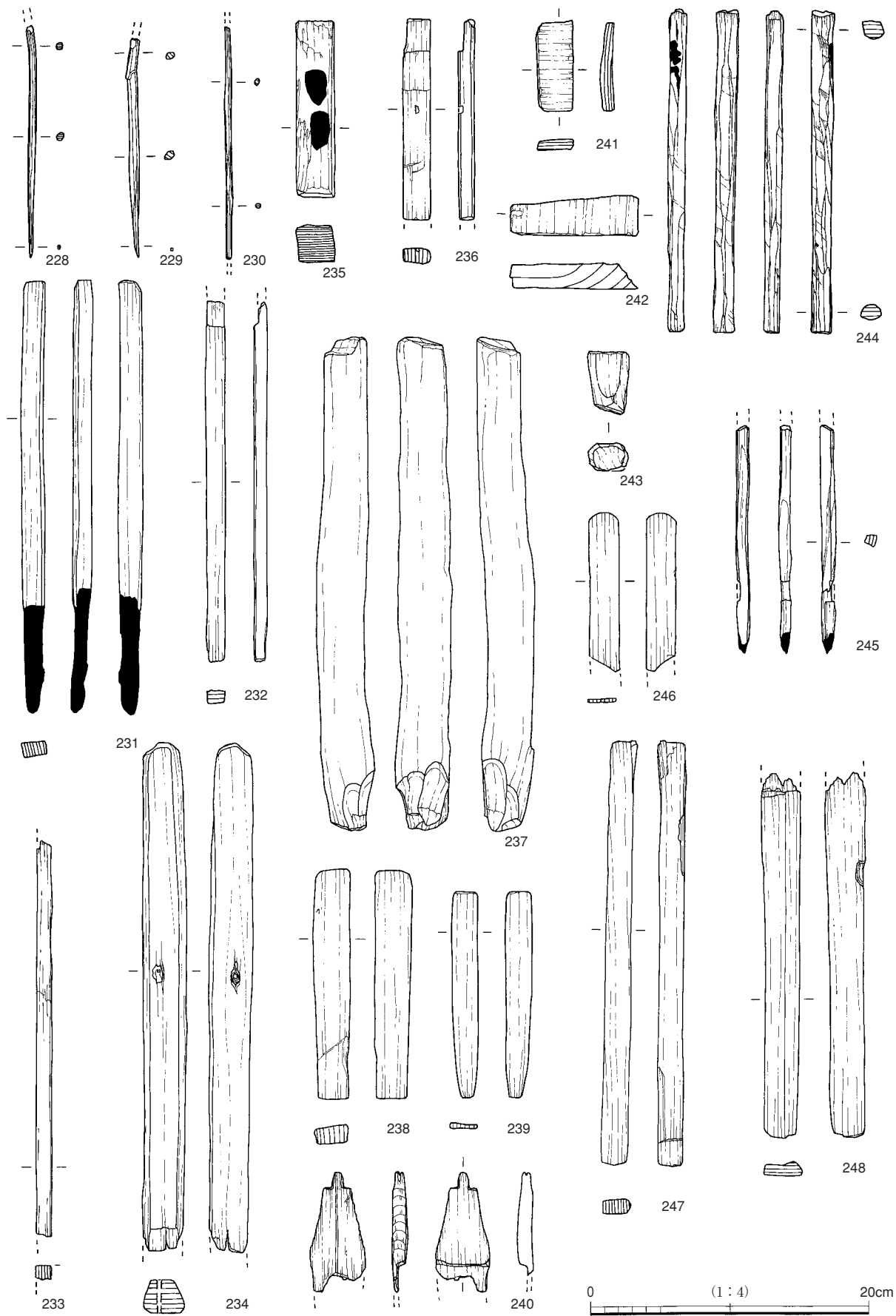
第42図 80溝出土木製品①



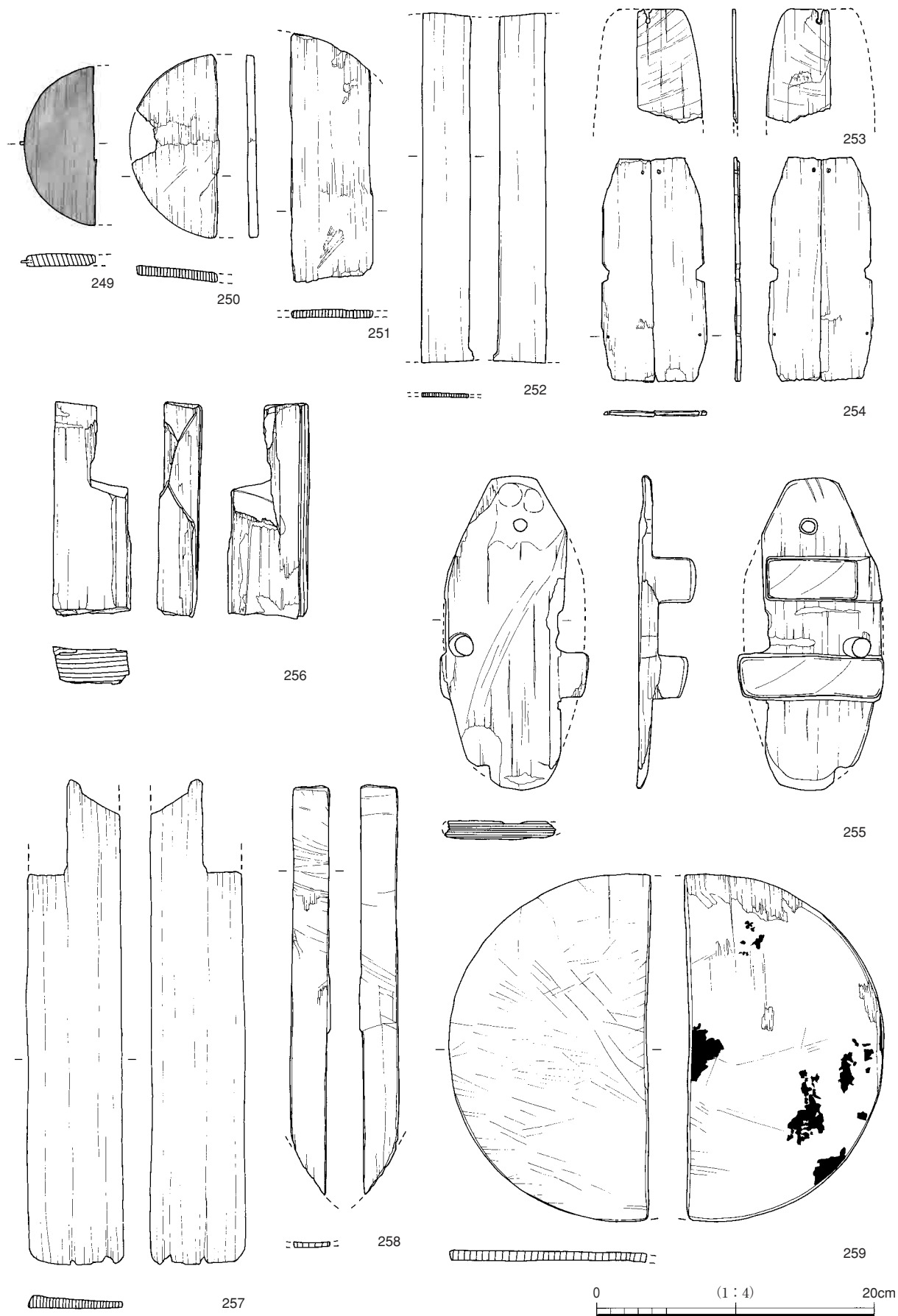
第43図 80溝出土木製品②



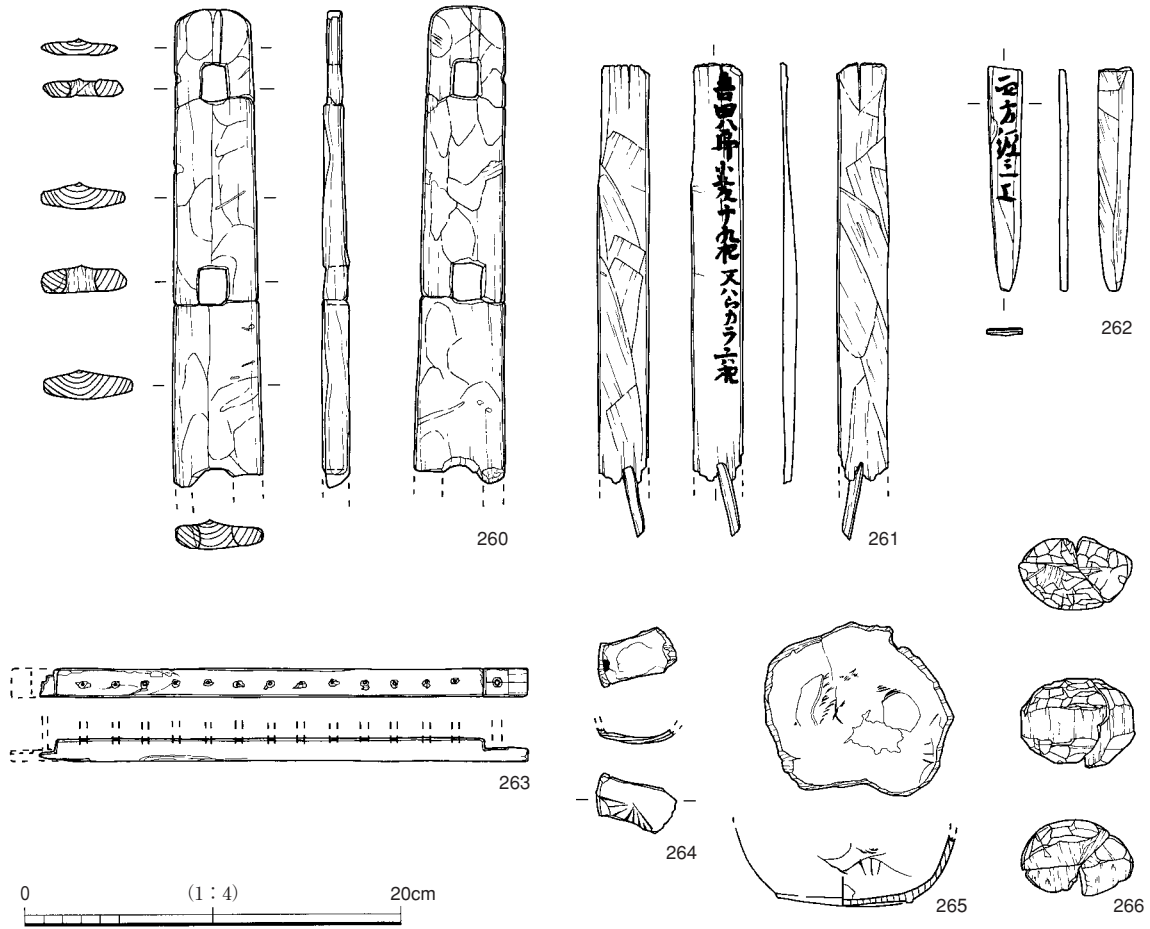
第44図 80溝出土木製品③〈上層～下層〉



第45図 80溝出土木製品④〈最下層〉



第46図 80溝出土木製品⑤〈最下層〉



第47図 80溝出土木製品⑥〈最下層〉

墨書された付札と「□田八郎小麦十九把 又ハ□（苧カ）カラ六把」と墨書された借用に関する札と思われる木簡である。

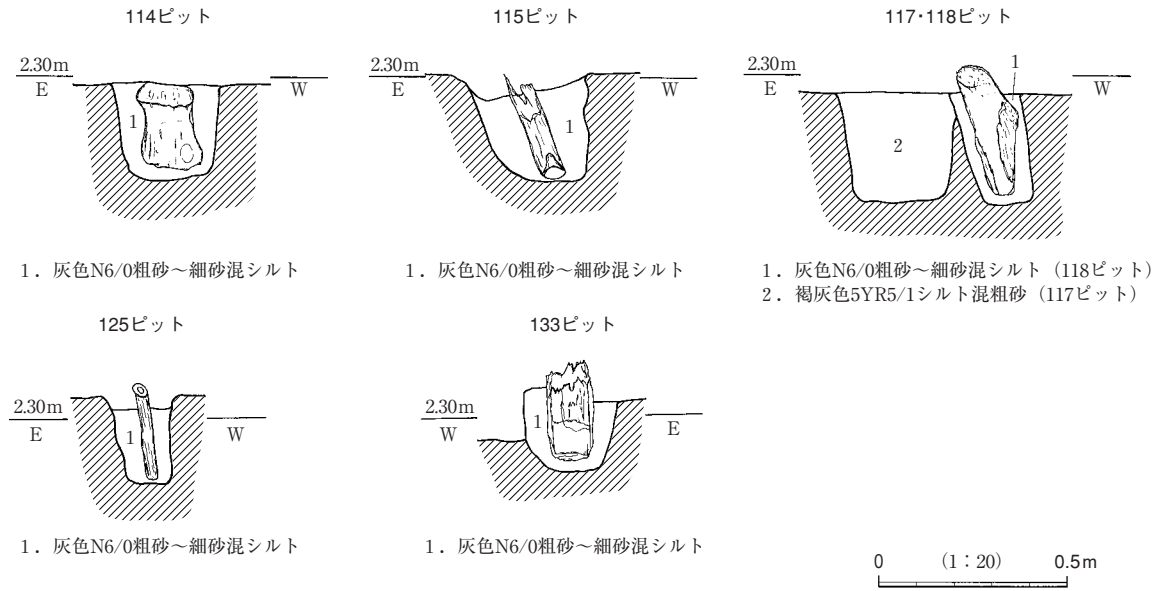
溝の中央近くの深部（第37図の断面を図示したあたり）近辺のみではあるが、遺物を上層、中層、下層、最下層と掘り分けることができた。特に下層、最下層から出土した遺物が多く、特に、主要な土師器皿の形については、最下層出土の資料とそれ以外の資料との間で差異が認められた。

上層部出土の土師器皿は、d類（153～156）が目につく。

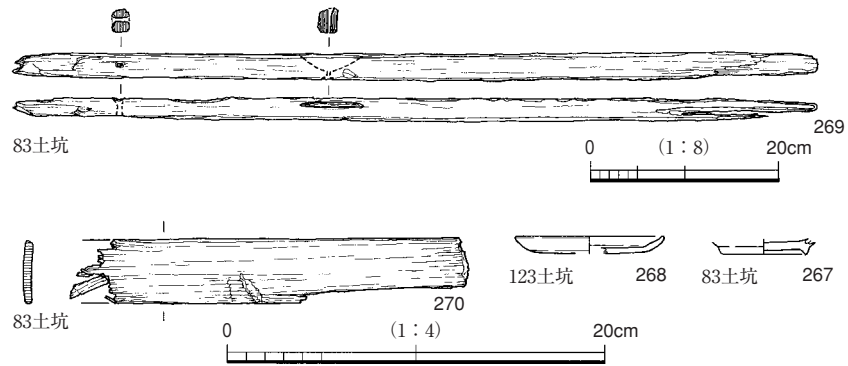
最下層に見られる土師器皿は、小型のe類（167～172）と大型のE類（173～177）とに分けたが、いずれも、底部が広く平たく、内弯ぎみに立ち上がる。口縁部はつまみあがり、尖り気味におさまる。また、F類は、底部が広く平たく、体部との境が明瞭であり、体部が斜めまっすぐに立ち上がるが、口縁端部は上方に延び、尖がり気味におさまる。E類、F類共に口径10.5cm前後、器高2.3cm前後を測る。e類、E類は体部が内弯気味となるものが多いが、外反する器種もある。土師器皿以外では185の瓦質播鉢や179～181の瓦器碗のように上層にても最下層にてもあまり形態に変化のない器種も認められる。

調査時において、うまく取り分けることはできなかったが、80溝には上層の第4面や60溝にもみられるD-1類（127～130）やF類（132～136、178）も上層から下層を中心に出土している。特にF類は80溝の各層から出土するようである。

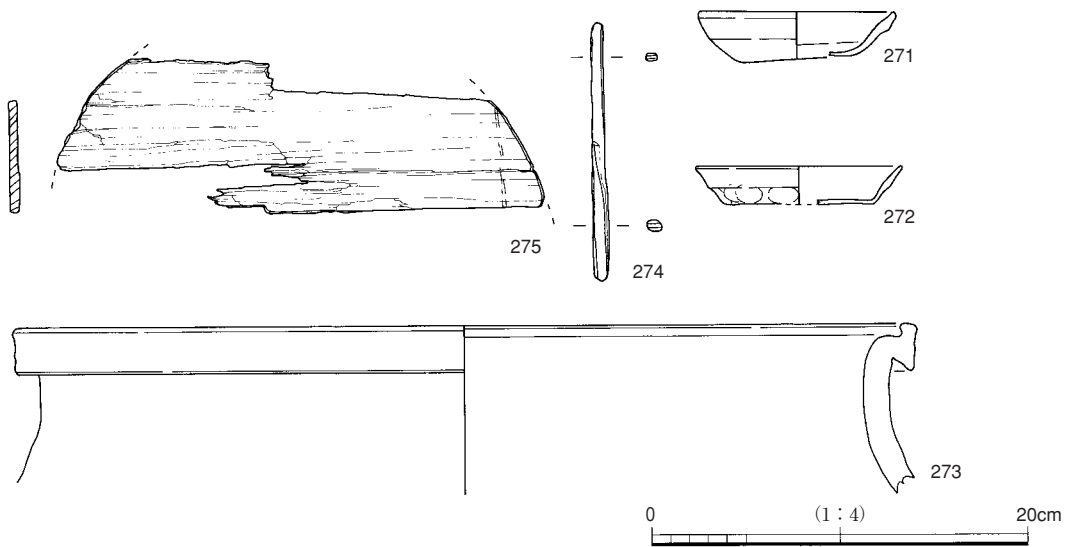
なお、80溝は、第5面の遺構としてとらえてはいるが、第4面の初期段階まで存在していたと考える方がよいと思われる。



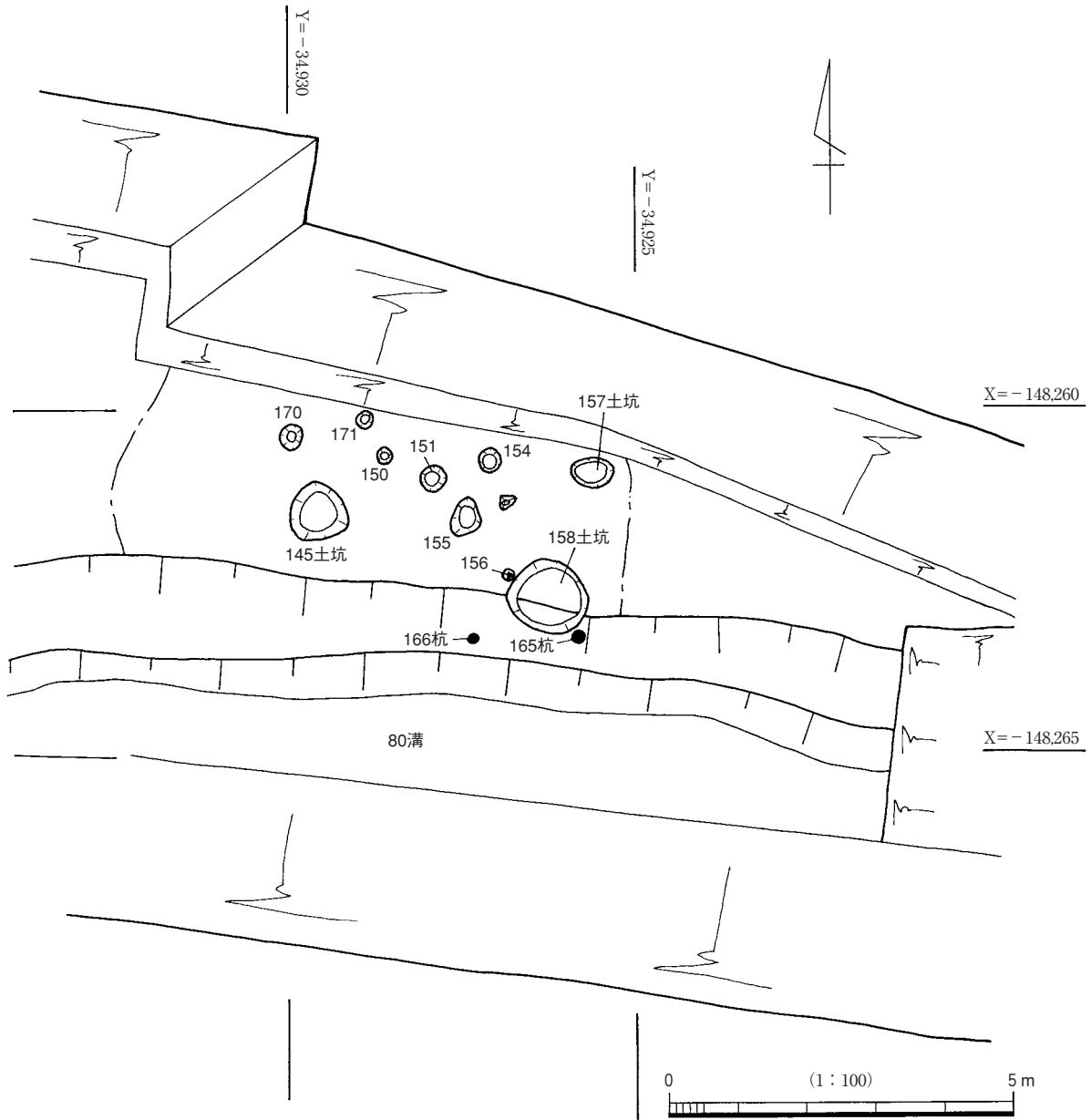
第48図 06-1-1 調査区第5面検出柱の残る柱穴



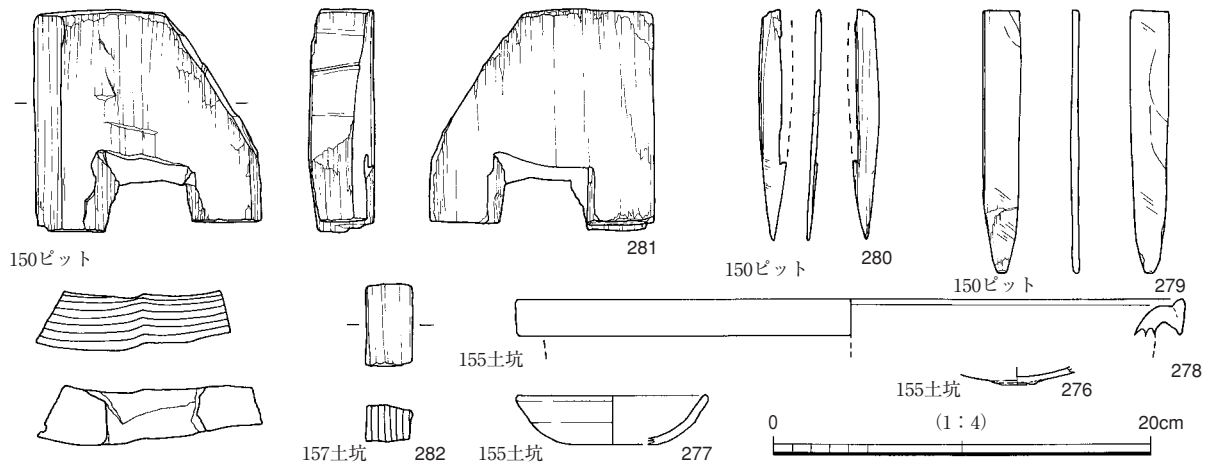
第49図 06-1-1 調査区第5面検出遺構出土遺物



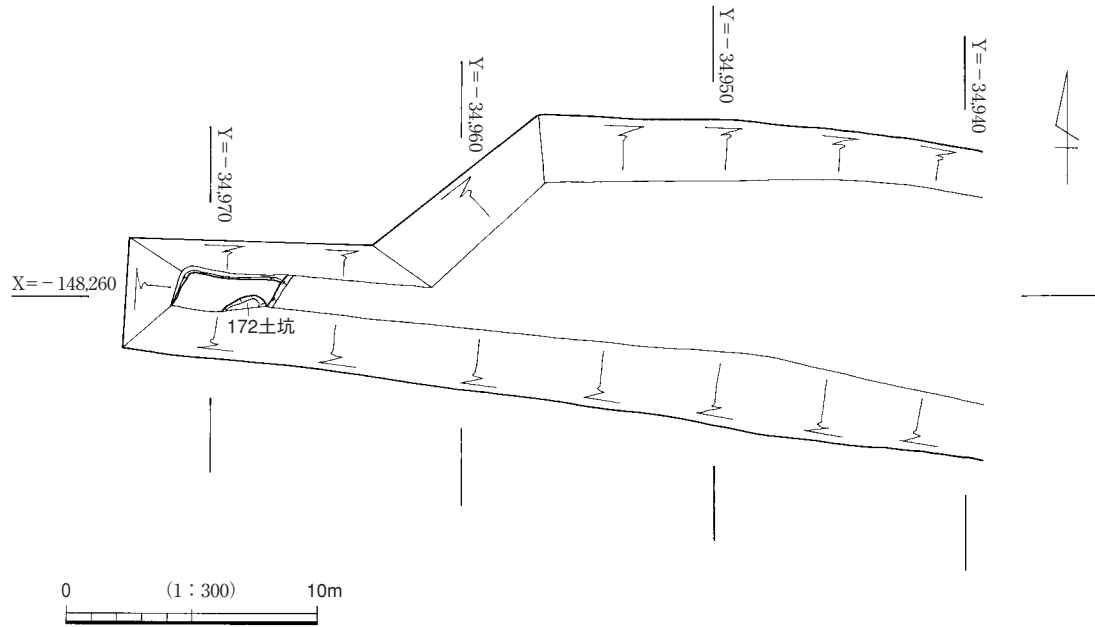
第50図 06-1-1 調査区第5層検出遺物



第51図 06-1-1 調査区第5-2面全体図



第52図 06-1-1 調査区第5-2面検出遺構出土遺物



第53図 06-1-2 調査区全体図

理由としては、第4面の遺構である60溝に80溝は切られてはいるが、同一面にて検出していること、断面を観察すると、第4面の段階で80溝が掘り込まれていることがわかるからである。

ただし、60溝〔導水施設〕、19埋桶〔貯水施設〕は80溝の範囲にすっぽり入るので、明らかに80溝が埋没した後に構築されたことは明白である。

80溝〔柵〕(第38図 図版9・21)

80溝の岸面は中心部に向かう途中で斜面に弱い段部を持つ。この段差部分の一部で柵しがらみが見つかっている。検出時にはかなり崩壊していたが、柵は土留に利用されたと思われる横板と、これを止める立杭として構成されたものが検出されている。

立杭の多くはこの80溝内に打ち込まれた形で検出している。護岸の様な施設があったかもしれない。

杭は竹製が多い。横板は、釘孔のあるもの218、292や、鋭く切断されているもの287、289、臍溝のあるもの219もあり、本来は、壁板など建築部材であったものの転用品と思われる。

14溝〈最下層〉(第13図)

14溝は先述のように、上面の第4面に続き、第3面で窪地となり、その役目を終えるが、溝もしくは流路としての機能は少なくともこの頃に有していた。当溝は、第4面の時よりさらに西に拡張していたか、もしくは西側によっていたと土層断面より観察できる。しかし、西端は近現代の攪乱により削平を受けており、本来どのような形状であったかは不明である。埋土は細かいラミナが顕著にみられる灰色5Y5/1シルト混粗砂ほかで構成されており、砂がやや多く、流れは第4面の溝よりは速かったものと思われる。遺物にはやはり、中世の遺物が出土するが、細片が多い。

83土坑(第49図)

調査区中央部北側に位置する。80溝と接している。北半分は調査区外である。円形の平面形であるとすれば、直径3.40m、深さ0.28mを測る。埋土には炭を多く含む灰オリーブ色5Y5/2シルト混粗砂が入る。遺物は瓦器細片と棒状木製品269が出土している。炭も、取り上げることはできなかったが、藁のような繊維質の炭化物と考えられた。

第5面検出のピットと杭（第48図 図版10・22）

ピットは調査区の東端部や西北部に多く見られた。大きさは直径0.20m前後のものが多く、この内いくつかに柱が残存していた。ただし、当調査区が狭いこともあり、掘立柱建物を復元するには至っていない。中には125ピットのように竹が検出された遺構もある。

また、80溝内を中心に杭が検出されている。これらの多くは直接地面に打ち込まれたようで、掘方をもたない。本書ではいくつかの断面を図化（第48図）した。

123ピット（第49図）

調査区の東端に位置する。122ピットに切られる。直径0.40m、深さ0.24mを測る。埋土に灰色N6/0砂混シルトが入る。遺物には図化した土師器皿268が出土している。

8. 第1調査区 第5'層と第5-2面（第50・51図 図版9・15）

調査区の西北部には、この部分だけ、直下にもう一面存在した。調査時には第5-2面と呼称し、その上位にある遺物を第5層中の遺物として取り上げたが、基本的に第5面以下の層は無遺物層であることから煩雑であるので、この部分的な層を「第5'層」と本報告では記述することにした。

第5-2面にも柱穴が多く見られた。T.P.2.3m前後を測る。第5'層と第5-2面検出の遺構の遺物ともに268がE類、271がE類、272がF類と80溝最下層と類似する遺物が多いようである。

また、当面検出の158土坑は80溝によって切られている。よって、これらの遺構は80溝の掘削より先行するか、もしくは80溝の拡張に伴い、当面のいくつかの遺構が削平を受けた可能性がある。

150ピット（第52図 図版19）

直径0.25m、深さ0.03mを測る。埋土に褐灰色7.5Y R5/1シルト混砂が入る。瓦器、土師器皿が出土している。

155土坑（第52図）

長さ0.60m、幅0.40m、深さ0.30mを測る。埋土に褐灰色7.5Y R5/1シルト混砂が入る。遺物には図化した土師器皿277や瓦器片が出土している。

9. 第2調査区 遺構面（第53図 図版10）

第2調査区はその大半が、近現代の攪乱で削平されていた。自然な堆積が観察されたのは西端の張り出した部分だけで、わずかに4m程度である。

当箇所はT.P.2.5m前後まで重機にて掘削し、盛土、攪乱を除去した。なお、東側の近世包含層と対応する第1層から第3層の一部も重機にて除去している。自然堆積土は7.5GY5/1緑灰色粗砂混シルト他で形成され、細かいラミナが見られる。0.2m程の厚みを持つ。東側の第1調査区の第4層に対応すると思われる。埋土中から土師器小皿片が若干出土した。遺構面は第1調査区の第5面と対応すると思われる。面はT.P.2.2m程度でやや低い。これより下層は5GY5/1オリーブ灰色シルト混粗砂・礫層へと変わる。

172土坑（第53図 図版10）

調査区南端に位置する。第2調査区で検出された唯一の遺構である。調査区外へ続く。半楕円形を呈する。長さ1.85m、幅0.50m以上、深さ0.65mを測る。埋土には灰色N6/0粗砂混シルトが入る。遺物は出土していない。

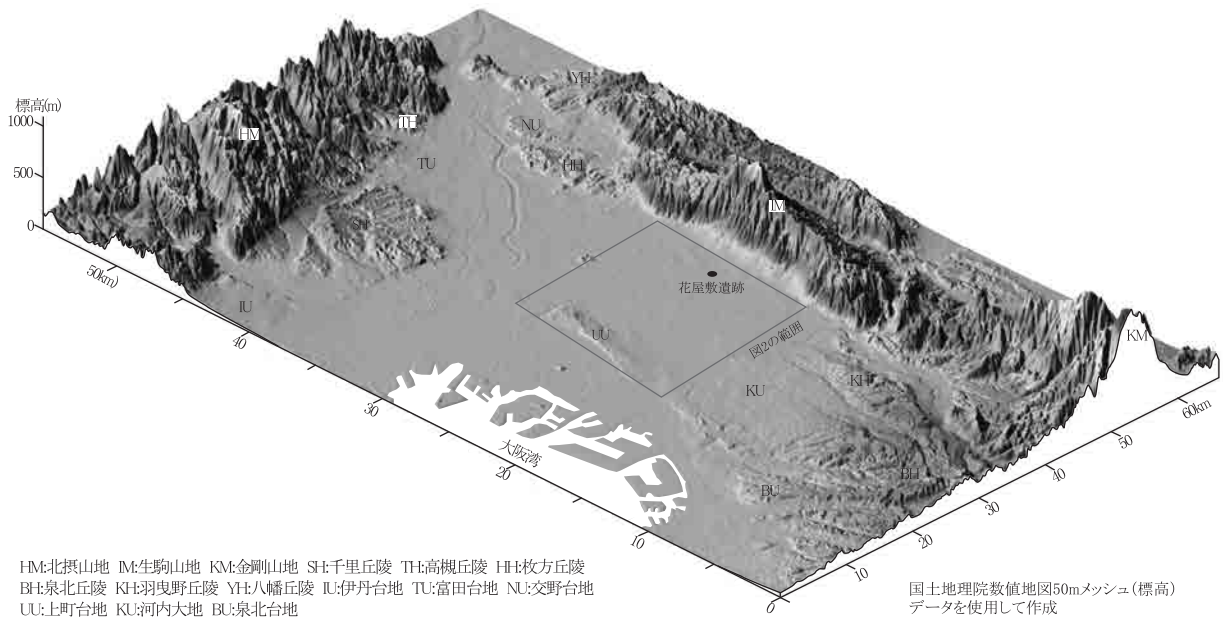
第4章 花屋敷遺跡06-1発掘調査における花粉・珪藻・植物珪酸体分析

はじめに

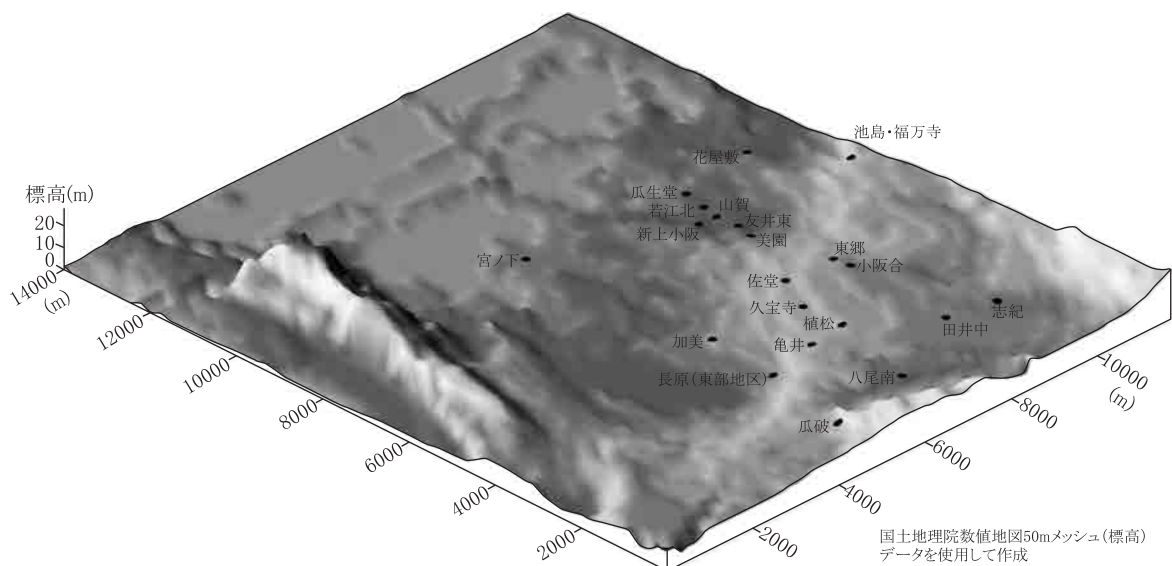
花屋敷遺跡は、玉串川が形成した沖積リッジ上に立地する（第54図～第56図）。

遺跡周辺では、おもに古墳時代以降の流路形成に伴い発達した帯状をなす微高地である沖積リッジとして認識される小阪合分流路、そこから分岐した萱振、若江分流路跡と、それらに挟まれた排水不良がちな後背湿地からなる地形配列が認められる（別所,1999）。

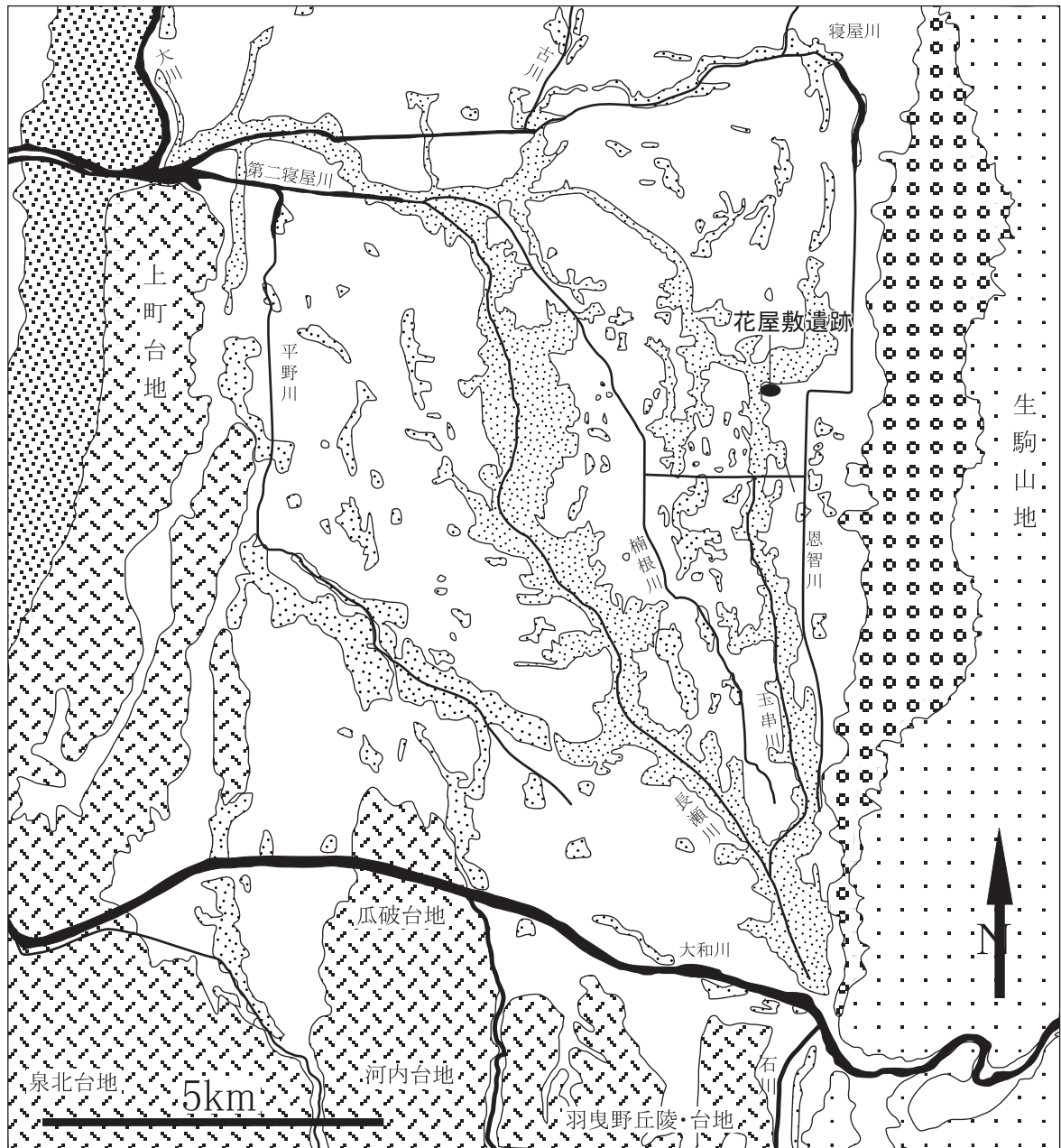
今回の分析では、14世紀代の屋敷区画溝（80溝）を埋積した堆積物について珪藻分析、花粉分析、植



第54図 花屋敷遺跡の位置



第55図 花屋敷遺跡の周辺の地形起伏と考古遺跡



凡例



第56図 河内平野とその周辺の地形（地形区分は、松田2001より作成）

物珪酸体分析を実施し、調査区およびその周辺の古環境復元を行うことが目的とされた。

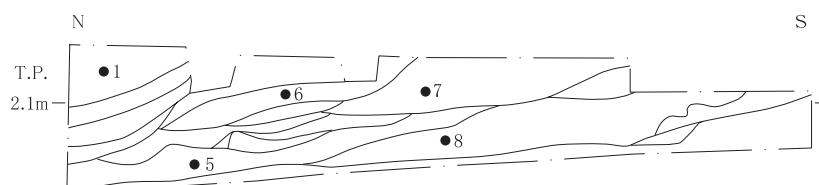
第1節 試料

試料は80溝の断面から採取された試料のうち、5点（試料番号1、5～8）である。第57図に試料採取断面図を示す。

第2節 分析方法

1. 珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、



第57図 80溝分析試料採取位置 ※詳細は第37図参照のこと

珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリユラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する（化石の少ない試料は、プレパラート2枚を限度に検鏡する）。種の同定は、原口ほか（1998）、Krammer（1992）、Krammer & Lange-Bertalot（1986,1988,1991a,1991b）、渡辺（2005）、Witkowski et al.（2000）などを参照し、分類体系はRound, Crawford & Mann（1990）に従った。

同定結果は、中心類（Centric diatoms）と羽状類（Pennate diatoms）に分け、羽状類は無縦溝羽状珪藻類（Araphid pennate diatoms）と有縦溝羽状珪藻類（Raphid pennate diatoms）に分けた。また、有縦溝類は、単縦溝類、双縦溝類、管縦溝類、翼管縦溝類、短縦溝類に細分した。

各種類の塩分濃度に対する区分はLowe（1974）に従い、真塩性種（海水生種）、中塩性種（汽水生種）、貧塩性種（淡水生種）に分ける。貧塩性種は、さらに塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種はその内容を示す。そして、産出個体数100個体以上の試料は、産出率2.0%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境を解析するにあたって、真塩性種～中塩性種は小杉（1988）、貧塩性種は安藤（1990）、陸生珪藻は伊藤・堀内（1991）、汚濁耐性は、Asai & Watanabe（1995）、渡辺（2005）の環境指標種をそれぞれ参考とする。珪藻化石の生態性区分や環境指標種群の説明を表1に示す。

2. 花粉分析

約10gについて、水酸化ナトリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9、濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

3. 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリユラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、

表1 珪藻化石の生態性区分および環境指標種群

塩分濃度に対する区分 Lowe(1974)による		
海水生種	強塩性種	塩分濃度40.0%以上の高濃度海水域に生育する種
	真塩性種(海水生種)	塩分濃度40.0~30.0%に生育する種
汽水生種	中塩性種(汽水生種)	塩分濃度30.0~0.5%に生育する種
淡水生種	貧塩性種(淡水生種)	塩分濃度0.5%以下に生育する種
淡水生種の生態性区分		
塩分	貧塩好塩性種	少量の塩分がある方が良く生育する種
	貧塩不定性種	少量の塩分があってもこれに良く耐えることができる種
	貧塩嫌塩性種	少量の塩分にも耐えることができない種
	広域塩性種	淡水~汽水域まで広い範囲の塩分濃度に適応できる種
pH	真酸性種	pH7.0以下に生育し、特にpH5.5以下の酸性水域で最も良く生育する種
	好酸性種	pH7.0付近に生育し、pH7.0以下の水域で最も良く生育する種
	pH不定性種	pH7.0付近の中性水域で最も良く生育する種
	好アルカリ性種	pH7.0付近に生育し、pH7.0以上の水域で最も良く生育する種
	真アルカリ性種	pH7.0以上に生育し、特にpH8.5以上のアルカリ性水域で最も良く生育する種
流水	真止水性種	止水域にのみ生育する種
	好止水性種	止水域に特徴的であるが、流水域にも生育する種
	流水不定性種	止水域にも流水域にも普通に生育する種
	好流水性種	流水域に特徴的であるが、止水域にも生育する種
	真流水性種	流水域にのみ生育する種
主に海水域での指標種群(小杉,1988)による		
外洋指標種群(A)	塩分濃度が約35‰の外洋水中で浮遊生活するもの	
内湾指標種群(B)	塩分濃度35~26‰の内湾水中で浮遊生活することからそのような環境を指標することのできる種群	
海水藻場指標種群(C1)	塩分濃度35~12‰の海域で海藻(草)に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群	
汽水藻場指標種群(C2)	塩分濃度12~4‰の汽水域で海藻(草)に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群	
海水砂質干潟指標種群(D1)	塩分濃度35~26‰の砂底の砂に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群	
汽水砂質干潟指標種群(D2)	塩分濃度26~5‰の砂底の砂に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群	
海水泥質干潟指標種群(E1)	30~12‰の閉鎖性の高い塩性湿地など泥底の泥に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群	
汽水泥質干潟指標種群(E2)	塩分濃度12~2‰の汽水化した塩性湿地などの泥に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群	
淡水底生種群(F)	2‰以下の淡水域の底質の砂、泥、水生植物などに付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群	
淡水浮遊生種群(G)	塩分濃度2‰以下の湖沼などの淡水域で浮遊生活することからそのような環境を指標することのできる種群	
河口浮遊生種群(H)	塩分濃度20~2‰の河口域で浮遊生活、あるいは付着生活することからそのような環境を指標することのできる種群	
主に淡水域での指標種群(安藤,1990)による		
上流性河川指標種群(J)	河川上流部の峡谷部に集中して出現することから上流部の環境を指標する可能性の大きい種群	
中~下流性河川指標種群(K)	河川中~下流部や河川沿いの河岸段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地などに集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群	
最下流性河川指標種群(L)	最下流部の三角洲の部分に集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群	
湖沼浮遊性種群(M)	水深が約1.5m以上ある湖沼で浮遊生活する種群で湖沼環境を指標する可能性の大きい種群	
湖沼沼沢湿地指標種群(N)	湖沼における浮遊生種としても沼沢湿地の付着生種としても優勢に出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群	
沼沢湿地付着生種群(O)	沼よりも浅く水深が1m前後で一面に水生植物が繁茂している沼沢や更に水深の浅い湿地で優勢な出現の見られることからそのような環境を指標する可能性の大きい種群	
高層湿原指標種群(P)	ミスゴケを主体とした環境や泥炭が形成される環境に集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群	
陸域指標種群(Q)	水中でなく、多少の湿り気のある土壌表面、岩の表面、コケなど常に大気に曝された好気的環境(陸域)に集中して生育することからそのような環境を指標する可能性の大きい種群	
陸域での指標種群(伊藤・堀内,1991)による		
陸生珪藻A群(RA)	陸生珪藻の中でも、分布がほぼ陸域に限られる耐乾性の高い種群	
陸生珪藻B群(RB)	陸生珪藻A群に伴い、陸域にも水中にも生育する種群	
未区分陸生珪藻(RI)	陸生珪藻に相当すると考えられるが、乾湿に対する適応性の不明なもの	

近藤 (2004) の分類に基づいて同定・計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物 1 gあたりの植物珪酸体含量 (同定した数を堆積物 1 gあたりの個数に換算) を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。この際、数値を丸めて100単位とし、100個体以下については「<100」で表示する。また、各種類の植物珪酸体含量とその層位的変化から稲作の様態や古植生について検討するために、植物珪酸体含量の層位的変化を図示する。

第3節 結果

1. 珪藻分析

結果を表2、第58図に示す。何れの試料も珪藻化石が豊富に産出する。完形殻の出現率は、各試料とも約70%以上である。産出分類群数は、合計で42属117分類群である。本遺構は、珪藻化石群集の特徴

表 2 珪藻分析結果 (1)

種 類	生態性			環境 指標種	試料番号				
	塩分	pH	流水		1	5	6	7	8
Centric Diatoms (中心型珪藻類)									
<i>Aulacoseira ambigua</i> (Grun.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	N,U	1	-	-	-	-
<i>Aulacoseira granulata</i> (Ehr.)Simonsen var. <i>granulata</i>	Ogh-ind	al-il	l-bi	M,U	1	-	-	-	-
<i>Cyclotella atomus</i> Hustedt	Ogh-Meh	al-il	ind	S,U	-	-	-	-	1
<i>Cyclotella meneghiniana</i> Kuetzing	Ogh-Meh	al-il	l-ph	L,S	-	1	-	8	3
<i>Stephanodiscus hantzschii</i> (Grun.)Cleve	Ogh-ind	al-il	l-bi	M,U	-	-	-	4	4
<i>Stephanodiscus</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	2	-
Araphidineae(無縦溝類)									
<i>Ctenophora pulchella</i> (Ralfs ex Kuetz.)Williams & Round	Meh				1	-	-	-	-
<i>Fragilaria capitellata</i> (Grun.)J.B.Petersen	Ogh-ind	al-il	ind	T	1	-	-	-	-
<i>Fragilaria vaucheriae</i> (Kuetz.)Petersen var. <i>vaucheriae</i>	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	1	-	-	-	-
<i>Pseudostaurosira brevistriata</i> (Grun.)Williams & Round	Ogh-Meh	al-il	l-ph	U	1	-	1	-	-
<i>Punctastriata linearis</i> D.M.Williams et Round	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	1	-	-	-	-
<i>Staurosira construens</i> Ehrenberg var. <i>construens</i>	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	3	1	-	2	1
<i>Staurosira construens</i> var. <i>binodis</i> (Ehren.)Hamilton	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	-	-	-	-	1
<i>Staurosira construens</i> var. <i>venter</i> (Ehren.)Kawashima & Kob.	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	5	-	-	-	-
<i>Synedra ulna</i> (Nitzsch)Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	-	-	2	4
Monoraphid Pennate Diatoms(單縱溝羽狀珪藻類)									
<i>Achnanthes subhudsonis</i> Hustedt var. <i>subhudsonis</i>	Ogh-ind	ind	r-ph	T	1	-	-	-	-
<i>Lemnicola hungarica</i> (Grunow)Round & Basson	Ogh-ind	al-il	ind	U	2	154	120	120	100
<i>Planothidium delicatulum</i> (Kuetz.)Round et Bukhtiyarova	Meh			D1	2	-	-	-	-
<i>Planothidium lanceolatum</i> (Breb.)Round et Bukhtiyarova	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	4	11	22	8	4
<i>Planothidium rostratum</i> (Oestrup)Round et Bukhtiyarova	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	-	-	1
<i>Cocconeis euglypta</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	4	-	-	-	-
<i>Cocconeis lineata</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	1	-	-	-	-
Biraphid Pennate Diatoms(雙縱溝羽狀珪藻類)									
<i>Amphora copulata</i> (Kuetz.)Schoeman et R.E.M.Archibald	Ogh-ind	al-il	ind	U	2	-	-	1	4
<i>Amphora montana</i> Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	4	5	6	4	1
<i>Amphora pediculus</i> (Kuetz.)Grunow var. <i>pediculus</i>	Ogh-ind	al-bi	ind	T	1	-	-	-	-
<i>Anomooneis sphaerophora</i> (Kuetz.)Pfitzer	Ogh-Meh	al-bi	ind		-	-	-	-	1
<i>Cymbella affinis</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	T	1	-	-	-	1
<i>Cymbella perpusilla</i> A.Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-ph		1	-	-	-	-
<i>Cymbella tumida</i> (Breb.)Van Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	2	-	-	-	1
<i>Cymbella turgidula</i> Grunow var. <i>turgidula</i>	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	7	-	-	-	-
<i>Cymbella turgidula</i> var. <i>nipponica</i> Skvortzow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	8	-	-	-	-
<i>Cymbopleura naviculiformis</i> (Auerwald)Krammer	Ogh-ind	ind	ind	O,U	-	-	-	-	1
<i>Encyonema mesianum</i> (Kholnoky)D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	-	1	1
<i>Encyonema microcephala</i> (Grun.)Krammer	Ogh-ind	ac-bi	ind	T	1	-	-	-	-
<i>Encyonema silesiacum</i> (Bleisch)D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	T	6	1	-	-	-
<i>Placoneis elginensis</i> (Greg.)E.J.Cox var. <i>elginensis</i>	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	3	-	-	-	1
<i>Placoneis elginensis</i> var. <i>neglecta</i> (Krasske)H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	2	-	-	-	-
<i>Gomphonema acuminatum</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,U	-	-	-	-	1
<i>Gomphonema affine</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	-	-	-	-
<i>Gomphonema angustatum</i> (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	U	-	-	-	-	1
<i>Gomphonema gracile</i> Ehrenberg var. <i>gracile</i>	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,U	-	-	-	1	-
<i>Gomphonema helveticum</i> Brun	Ogh-ind	ind	r-ph	T	1	-	-	-	-
<i>Gomphonema inaequilongum</i> (H.Kobayasi)H.Kobayasi	Ogh-ind	ind	r-ph		1	-	-	-	-
<i>Gomphonema lagenula</i> Kuetzing	Ogh-ind	ind	r-ph	S	1	-	-	-	-
<i>Gomphonema parvulum</i> (Kuetz.)Kuetzing var. <i>parvulum</i>	Ogh-ind	ind	ind	U	5	5	10	7	18
<i>Gomphonema pumilum</i> (Grun.)Reichardt & Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind		1	-	-	-	-
<i>Gomphonema truncatum</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	-	1	-	-	2
<i>Reimeria sinuata</i> (W.Greg.)Kociolek et Stoermer	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	5	-	-	-	-
<i>Diploneis ovalis</i> (Hilse)Cleve var. <i>ovalis</i>	Ogh-ind	al-il	ind	T	1	-	-	-	-
<i>Geissleria decussis</i> (Oestrup)Lange-B. et Metzeltin	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	2	-	-	-	-
<i>Hippodonta capitata</i> (Ehr.)Lange-B.,Metzeltin et Witkowski	Ogh-Meh	al-il	l-ph	U	-	-	-	5	13
<i>Navicula</i> cf. <i>tanakae</i> Fukush.,Ts.Kobay. & Yoshit.	Ogh-Meh	unk	unk		-	24	16	22	4
<i>Navicula veneta</i> Kuetzing	Ogh-Meh	al-il	ind	U	-	1	3	2	1
<i>Navicula amphiceropsis</i> Lange-Bertalot et U.Rumrich	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	1	-	-	-	-
<i>Navicula cryptocephala</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	1
<i>Navicula kotschyi</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind		1	-	-	-	-
<i>Navicula pseudoacceptata</i> H.Kobayasi	Ogh-ind	ind	r-ph		1	-	-	-	-
<i>Navicula pusio</i> Cleve	Ogh-hob	ac-il	ind		1	-	-	-	-
<i>Navicula viridula</i> (Kuetz.)Ehrenberg var. <i>viridula</i>	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	1	-	-	-	-
<i>Navicula viridula</i> var. <i>rostrata</i> Skv.	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	2	-	-	-	-
<i>Gyrosigma procerum</i> Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	-	-	-	-
<i>Gyrosigma scalproides</i> (Rabh.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	6	-	1	-	-
<i>Craticula cuspidata</i> (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	S	1	-	-	-	2
<i>Stauroneis anceps</i> Ehrenberg var. <i>anceps</i>	Ogh-ind	ind	ind	T	1	-	-	-	-
<i>Stauroneis borrichii</i> (Pet.)Lund	Ogh-ind	ind	ind	RI	1	-	-	-	-
<i>Stauroneis obtusa</i> Lagerstedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	5	-	-	-	-
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O,U	-	1	1	-	-
<i>Frustulia vulgaris</i> (Thwait.)De Toni var. <i>vulgaris</i>	Ogh-ind	al-il	ind	U	3	1	1	-	-
<i>Diadesmis confervacea</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RB,S	5	-	-	1	-
<i>Diadesmis contenta</i> (Grun.ex Van Heurck)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	3	-	-	-	-
<i>Diadesmis contenta</i> var. <i>biceps</i> (Arnott ex Grunow)Hamilton	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	5	-	2	1	-
<i>Luticola goeppertiana</i> (Bleisch)D.G.Mann	Ogh-hil	al-il	ind	S	-	-	1	-	-
<i>Luticola cohnii</i> (Hilse)D.G.Mann	Ogh-ind	al-bi	ind	RI	1	-	-	-	-
<i>Luticola mutica</i> (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	25	2	4	2	3
<i>Luticola paramutica</i> (Bock)D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	RB	2	-	-	-	-

表2 珪藻分析結果(2)

種類	生態性			環境 指標種	試料番号				
	塩分	pH	流水		1	5	6	7	8
<i>Luticola ventricosa</i> (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	RI,U	1	-	-	-	-
<i>Neidium alpinum</i> Hustedt var. <i>alpinum</i>	Ogh-ind	ac-il	ind	RA	1	-	1	-	-
<i>Neidium ampliatum</i> (Ehr.)Krammer	Ogh-ind	ac-il	l-ph		1	-	-	-	-
<i>Caloneis lagerstedtii</i> (Lagerst.)Cholnoky	Ogh-ind	al-il	ind	S	2	-	-	-	-
<i>Caloneis leptosoma</i> Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	l-ph	RB	1	-	-	-	-
<i>Pinnularia acrosphaeria</i> W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	O	-	-	-	-	1
<i>Pinnularia appendiculata</i> (Ag.)Cleve	Ogh-hob	ind	ind	RB	2	-	-	-	-
<i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	1	-	-	-	-
<i>Pinnularia brevicostata</i> Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind		-	1	1	-	-
<i>Pinnularia gibba</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O,U	-	1	-	3	4
<i>Pinnularia nodosa</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	-	1	-	-	-
<i>Pinnularia obscura</i> Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	1	2	-
<i>Pinnularia rupestris</i> Hantzsch	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	-	-	1
<i>Pinnularia schoenfelderi</i> Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	3	2	3	3	1
<i>Pinnularia schroederii</i> (Hust.)Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	1	-	-	-	-
<i>Pinnularia silvatica</i> Petersen	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	2	-	1	1
<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	2	3	4	3	3
<i>Pinnularia subcapitata</i> var. <i>paucistriata</i> (Grun.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	O,U	1	2	-	1	1
<i>Sellaphora americana</i> (Ehr.)Mann	Ogh-ind	al-il	l-ph		-	-	-	1	-
<i>Sellaphora bacillum</i> (Ehr.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	-	-	-	-
<i>Sellaphora pupula</i> (Kuetz.)Mereschkowsky var. <i>pupula</i>	Ogh-ind	ind	ind	S	1	2	1	2	11
<i>Sellaphora pupula</i> var. <i>subcapitata</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	S	-	1	-	-	-
<i>Sellaphora seminulum</i> (Grun.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	S,RB	-	6	2	7	1
管縦溝類									
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	19	2	2	2	3
<i>Nitzschia brevissima</i> Grunow	Ogh-Meh	al-il	ind	RB,U	3	-	-	-	-
<i>Nitzschia palea</i> (Kuetz.)W.Smith	Ogh-Meh	ind	ind	S	1	6	1	3	-
<i>Nitzschia amphibia</i> Grunow var. <i>amphibia</i>	Ogh-ind	al-il	ind	S	-	1	2	-	-
<i>Nitzschia frustulum</i> (Kuetz.) Grunow var. <i>frustulum</i>	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	2	3	1	3
<i>Nitzschia heidenii</i> Meister	Ogh-ind	al-il	ind	T	2	-	-	-	-
<i>Nitzschia nana</i> Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RB,S	1	-	2	-	-
<i>Nitzschia perminuta</i> (Grun.)Peragallo	Ogh-ind	al-il	ind	RI,U	2	-	-	-	1
<i>Nitzschia terrestris</i> (Pet.)Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RI	1	-	-	-	-
<i>Tryblionella debilis</i> Arnott	Ogh-ind	al-il	ind	RB,U	-	-	1	-	-
<i>Epithemia adnata</i> (Kuetz.)Brebisson var. <i>adnata</i>	Ogh-ind	al-bi	ind	T	1	-	1	-	1
<i>Rhopalodia gibberula</i> (Ehr.)O.Muller	Ogh-Meh	al-il	ind	U	2	-	-	-	-
<i>Rhopalodia gibba</i> (Ehr.)O.Muller var. <i>gibba</i>	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	-	-	-	-
翼管縦溝類									
<i>Surirella angusta</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-bi	U	1	-	-	-	-
<i>Surirella minuta</i> Brebisson	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	1	-	-	-
短縦溝類									
<i>Eunotia bilunaris</i> (Ehr.)Mills var. <i>bilunaris</i>	Ogh-hob	ac-bi	ind	U	-	1	3	1	-
<i>Eunotia incisa</i> W.Smith ex Gregory	Ogh-hob	ac-il	ind	O,U	-	-	-	-	1
<i>Eunotia indica</i> Grunow	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	1
<i>Eunotia monodon</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	-	1	1	1	-
<i>Eunotia tschirchiana</i> Muell. var. <i>tschirchiana</i>	Ogh-ind	al-il	unk		-	1	1	-	-
海水生種					0	0	0	0	0
海水～汽水生種					0	0	0	0	0
汽水生種					3	0	0	0	0
淡水～汽水生種					7	32	21	40	23
淡水生種					194	212	197	184	187
珪藻化石総数					204	244	218	224	210

凡例

H.R.: 塩分濃度に対する適応性 pH: 水素イオン濃度に対する適応性 C.R.: 流水に対する適応性
Meh : 汽水生種 al-bi : 真アルカリ性種 l-bi : 真止水性種
Ogh-Meh : 淡水～汽水生種 al-il : 好アルカリ性種 l-ph : 好止水性種
Ogh-hil : 貧塩好塩性種 ind : pH不定性種 ind : 流水不定性種
Ogh-ind : 貧塩不定性種 ac-il : 好酸性種 r-ph : 好流水性種
Ogh-hob : 貧塩嫌塩性種 ac-bi : 真酸性種 r-bi : 真流水性種
Ogh-unk : 貧塩不明種 unk : pH不明種 unk : 流水不明種

環境指標種群

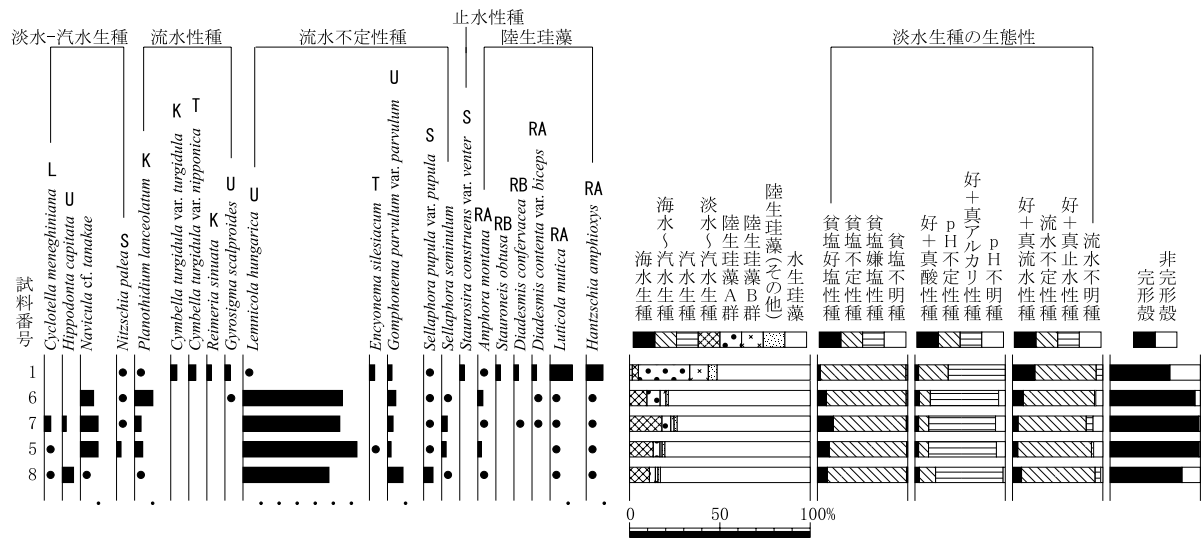
D1: 海水砂質干潟指標種(小杉, 1988)

K: 中～下流性河川指標種, L: 最下流性河川指標種, M: 湖沼浮遊性種,

N: 湖沼沼沢湿地指標種, O: 沼沢湿地付着生種(以上は安藤, 1990)

S: 好汚濁性種, U: 広域適応性種, T: 好清水性種(以上はAsai and Watanabe, 1995)

R: 陸生珪藻(RA:A群, RB:B群, RI:未区分、伊藤・堀内, 1991)



海水〜汽水〜淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は2%未満の産出を示す。種類名末尾の記号は下記の環境指標種群を示す。
 K:中〜下流性河川指標種, L:最下流性河川指標種(安藤, 1990)
 S:好汚濁性種, U:広域適応性種, T:好清水性種(Asai and Watanabe, 1995)
 R:陸生珪藻(RA:A群, RB:B群, RI:未区分, 伊藤・堀内, 1991)

第58図 主要珪藻化石群集の層位分布

から試料番号1と6を境として2区分される。

試料番号6〜8の4試料は、淡水域に生育する水生珪藻（以下、水生珪藻と言う）が全体の約80%を占める。これに次いで、淡水〜汽水生種が15%前後産出する。淡水性種の生態性（塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応能）の特徴は、貧塩不定性種、真+好アルカリ性種、流水不定性種が優占する。種類ごとにみると、流水不定性で好アルカリ性、汚濁耐性が広域適応性種の *Lemnicola hungarica* が優占する（本種は、*Achnanthes* 属であったが、Round & Basson (1997) では、*Lemnicola* 属に変更されている）。そのほか、塩分や塩類を含む水域に生育する淡水〜汽水生種の *Navicula cf. tanakae*、流水性で中〜下流性河川指標種群の *Planothidium lanceolatum*、流水不定性で広域適応性種の *Gomphonema parvulum var. parvulum*、流水不定性で好汚濁性種の *Sellaphora pupula var. pupula*、*Sellaphora seminulum* などがみられる。このうち、*Navicula cf. tanakae* は、磯部温泉、雀の湯、余水排出口礫に大量に付着することが観察された種である（福島・小林・吉武, 2002）。また、下位の試料番号8、7、5では最下流性河川指標種群の *Cyclotella meneghiniana*、塩類の豊富な水域に生育する *Hippodonta capitata* なども産出する。

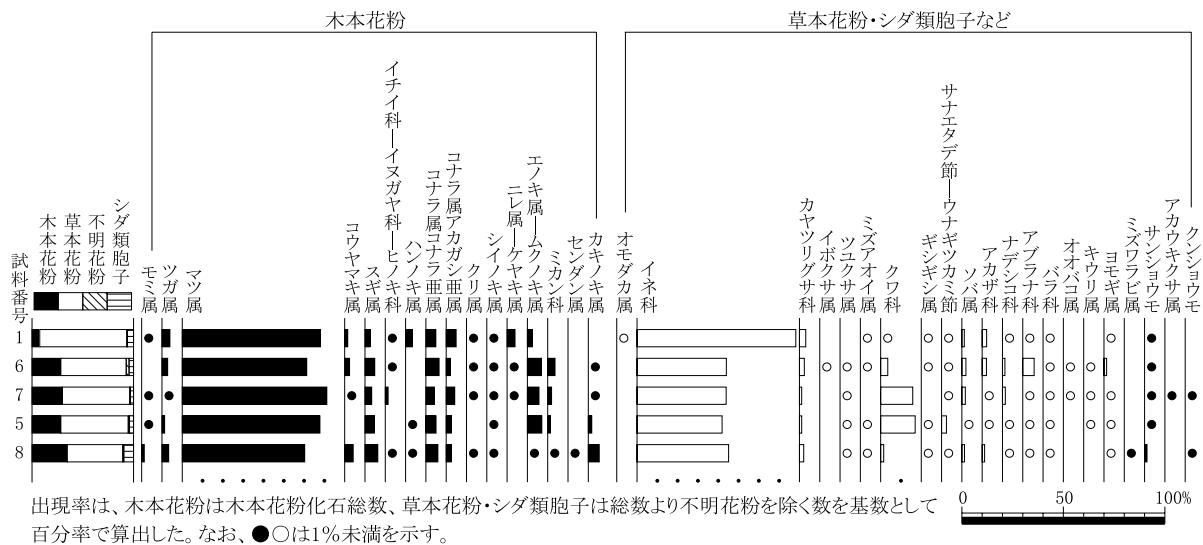
試料番号1は、陸生珪藻が増加し、全体のほぼ半数を占める。産出種は、陸生珪藻の中でも耐乾性の高い陸生珪藻A群の *Luticola mutica*、*Hantzschia amphioxys* が約10%産出し、好流水性の *Cymbella turgidula var. nipponica*、*Gyrosigma scalproides*、流水性で中〜下流性河川指標種群の *Cymbella turgidula*、*Reimeria sinuata*、流水不定性の *Gomphonema parvulum var. parvulum*、流水不定性で好清水性種の *Encyonema silesiacum* などを伴う。

2. 花粉分析

結果を表3、第59図に示す。全体の構成比は、木本花粉に比べ、草本花粉の割合が高い。木本花粉は、マツ属（特に複維管束亜属）の割合が高く、木本花粉全体の60〜70%を占める。その他、スギ属、コナラ属、アカガシ亜属、エノキ属〜ムクノキ属などが少量検出される。一方草本花粉は、イネ科の割合が高く、アブラナ科やクワ科などもみられる。割合は少ないが、オモダカ属、ミズアオイ属、サンショウ

表3 花粉分析結果

種 類	試料番号				
	1	6	7	5	8
木本花粉					
マキ属	-	1	-	-	-
モミ属	2	-	1	1	3
ツガ属	8	7	1	3	8
トウヒ属	1	-	-	2	1
マツ属単維管束亜属	-	-	-	-	1
マツ属複維管束亜属	112	107	121	131	112
マツ属(亜属不明)	27	45	30	31	31
コウヤマキ属	3	6	1	-	10
スギ属	5	12	7	11	15
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	1	2	3	-	1
ヤナギ属	-	1	-	2	1
ヤマモモ属	-	-	1	-	3
クルミ属	-	1	1	-	2
クマシデ属-アサダ属	-	3	3	7	5
カバノキ属	-	1	-	3	2
ハンノキ属	7	-	-	1	2
ブナ属	1	2	2	1	-
コナラ属コナラ亜属	10	16	9	12	14
コナラ属アカガシ亜属	10	5	9	6	6
クリ属	1	1	1	-	1
シイノキ属	1	1	1	2	1
ニレ属-ケヤキ属	8	1	1	-	-
エノキ属-ムクノキ属	5	17	12	17	2
ミカン科	-	9	4	3	1
センダン属	-	-	-	-	1
アカメガシワ属	-	1	-	-	-
ツタ属	-	2	1	-	-
ノブドウ属	1	1	-	-	-
シナノキ属	-	1	-	-	-
ウコギ科	-	2	2	-	-
ミズキ属	-	1	-	-	-
ツツジ科	1	-	-	-	1
カキノキ属	-	1	1	4	13
エゴノキ属	-	-	-	1	-
スイカズラ属	-	1	-	1	2
草本花粉					
オモダカ属	1	-	-	-	-
イネ科	2089	374	309	347	307
カヤツリグサ科	82	20	8	9	14
イボクサ属	-	1	-	-	-
ツユクサ属	-	4	1	1	2
ミズアオイ属	3	4	-	2	3
クワ科	2	30	111	141	10
ギシギシ属	1	7	-	2	1
サナエタデ節-ウナギツカミ節	2	1	2	20	1
タデ属	2	2	-	-	-
ソバ属	31	17	12	7	9
アカザ科	60	18	6	7	8
ナデシコ科	6	10	10	8	4
キンボウゲ科	-	1	1	2	-
アブラナ科	3	48	3	2	5
バラ科	1	1	1	1	3
ソラマメ属	1	-	-	-	-
マメ科	-	5	-	-	-
フヨウ属	-	-	1	-	-
キカンクサ属	1	-	-	-	-
アリノトウグサ属	-	-	1	1	-
セリ科	-	2	-	-	-
オオバコ属	-	1	1	-	-
ゴキツル属	-	-	1	-	1
キウリ属	-	1	1	3	-
スズメウリ属	-	2	-	-	-
ヨモギ属	8	11	1	2	4
オナモミ属	-	2	-	-	-
キク亜科	11	2	-	1	1
タンポポ科	1	-	-	-	2
不明花粉	17	25	3	10	7
シダ類孢子					
ヒカゲノカズラ属	1	1	-	-	-
ゼンマイ属	8	1	1	1	3
イノモトソウ属	2	-	-	-	-
ミズワラビ属	-	-	-	-	1
サンショウモ	5	4	2	7	8
アカウキクサ属	-	-	1	-	-
他のシダ類孢子	147	32	18	26	54
その他の微化石					
シャジクモ科	-	-	-	-	1
クンショウモ	-	-	1	-	1
合 計					
木本花粉	204	248	212	239	239
草本花粉	2305	564	470	556	375
不明花粉	17	25	3	10	7
シダ類孢子	163	38	22	34	66
総計(不明を除く)	2672	850	704	829	680



第59図 花粉化石群集の層位分布

モ等の水生植物や、ソバ属、キュウリ属といった栽培植物もみられる。なお、試料番号1では、他の試料に比べイネ科の割合が高い。

3. 植物珪酸体分析

結果を表4、第60図に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。最下位にあたる試料番号8ではタケ亜科やイネ属などがわずかに認められるに過ぎない。この上位の試料番号1～5では、植物珪酸体含量が5,000-20,000個/gの間で推移するが、各種類の産出状況は類似する。すなわち、イネ属の産出が目立ち、ネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属あるいはススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが認められる。

第4節 考察

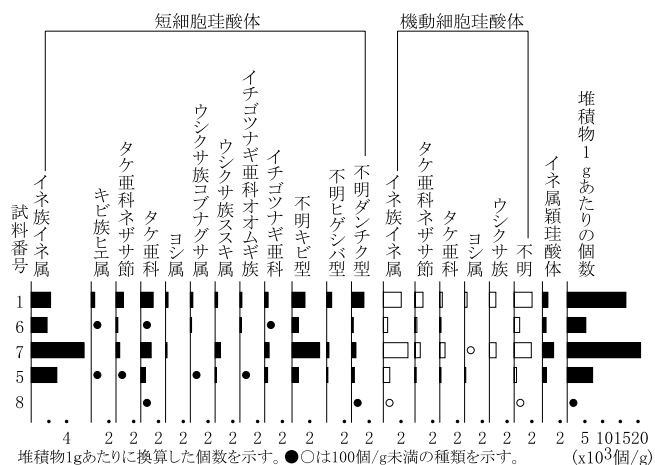
1. 珪藻化石群集からみた古水文環境

珪藻分析の結果、珪藻化石群集は表層に近い試料番号1と、試料番号6より下位とで異なることが明らかとなった。試料番号6～8では *Lemnicola hungarica* が優占するが、この種類は、池や流れの弱い川などで浮葉植物の葉に附着して生育するのが一般的とされる。よって、溝内は、水生植物が生育するような、富栄養で

表4 植物珪酸体含量

種類	試料番号				
	1	5	6	7	8
イネ科葉部短細胞珪酸体					
イネ族イネ属	2,200	2,900	1,800	6,000	-
キビ族ヒエ属	400	<100	<100	-	-
タケ亜科ネザサ節	800	<100	200	400	-
タケ亜科	1,400	500	<100	1,200	<100
ヨシ属	300	-	-	200	-
ウシクサ族コブナグサ属	300	<100	100	-	-
ウシクサ族ススキ属	300	100	-	600	-
イチゴツナギ亜科オオムギ族	200	<100	100	-	-
イチゴツナギ亜科	400	300	<100	500	-
不明キビ型	1,500	700	700	3,100	-
不明ヒゲシバ型	600	100	-	300	-
不明ダンチク型	1,400	300	200	500	<100
イネ科葉身機動細胞珪酸体					
イネ族イネ属	2,000	700	500	2,800	<100
タケ亜科ネザサ節	900	100	200	600	-
タケ亜科	300	100	100	600	-
ヨシ属	300	100	-	<100	-
ウシクサ族	700	-	-	800	-
不明	2,000	300	600	1,900	<100
珪化組織片					
イネ属珪酸体	600	500	400	1,300	-
合計					
イネ科葉部短細胞珪酸体	9,700	5,300	3,400	12,700	100
イネ科葉身機動細胞珪酸体	6,200	1,400	1,500	6,700	100
珪化組織片	600	500	400	1,300	0
総計	16,600	7,200	5,300	20,700	200

含量は、100単位で丸める。<100は100個体未満の含量を示す



第60図 植物珪酸体含量の層位分布

浅く（水深にして数十センチ以下）淀んだ水域であったと考えられる。花粉化石から、オモダカ属、ミズアオイ属、サンショウモ等の水生植物が生育していたと推定されるが、これらの生態性からみた水域環境とも調和的である。この傾向は、中世とされる瓜生堂遺跡47-2次調査の大溝1の珪藻化石群集（パリノ・サーヴェイ,2002）とも近似している。検出された溝の規模から上記のような環境は調和的ともいえるが、溝が集落内にあることから、富栄養化の原因の一つとして人為的な影響も示唆される。

一方、試料番号1をみると、水生珪藻（淡水生種の中から陸生珪藻をのぞいた種類）で多産する種類は認められない。一方、陸生珪藻も全体の半数近くを占めるが、個々の種において多産するものはない。このような群集は、「混合群集」と定義され、河川の氾濫などによって短期間に堆積した一過性の堆積物中に認められることが多い（堀内ほか,1996）。よって、試料番号1は、氾濫の影響で埋積したと思われる。

2. 調査区およびその周辺の古植生

分析の結果、木本花粉ではマツ属の割合が顕著であった。また、草本花粉が全体に占める割合が高く、特にイネ科が多産する。このような傾向は、瓜生堂遺跡47-2次調査区の中世の大溝1の成果（パリノ・サーヴェイ株式会社,2002）とも近似している。草本類の花粉化石が多産することから、調査区周辺は、基本的にはイネ科、カヤツリグサ科、アカザ科、ヨモギ属などの草地であったと思われる。特にイネ科については、植物珪酸体の結果から、ネザサ節、ヨシ属、コブナグサ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科などが含まれていたと思われる。比較的多かったアブラナ科には、アブラナをはじめ葉菜類、根菜類などの栽培種が多く存在し、クワ科の中には、アサ、クワなどの栽培種を含む。ただし、これらの分類群には人里や田畑に生育する雑草類（たとえばアブラナ科のナズナ、クワ科のクワクサやカナムグラ）も多数存在するため、一概に栽培由来とはいえない。アブラナ科やクワ科の栽培種を推定するためには、種実の検出が必要となる。花粉化石で、栽培植物由来と思われるものは、ソバ属とキュウリ属であり、植物珪酸体ではイネ属である。当該期の遺跡およびその周辺の発掘結果をふまえると、これらは周辺の耕作地に由来するとみられる。なお、イネは稲藁や籾殻も資材としては燃料材や住居構築材に利用される場合がある。そのため、イネ属の植物珪酸体は耕作地だけでなく、住居跡や集落内の遺構（溝や井戸など）にも含まれる。今回産出した珪酸体も、屋敷周辺に持ち込まれた稲藁や籾殻が溝の埋積する過程で混入した可能性が考えられる。

遺跡をとりまく山地斜面などの植生は、基本的にはマツの二次林もしくは草地であったことが花粉分析結果から推定される。当該期における河内平野やその周辺地域のこれまでの花粉分析結果をふまえると、中世においても自然状態に近い森林は少なく、低地は耕作地などを中心とした草地が卓越し、山地や丘陵斜面は二次林や草地が広がる植生景観であったと推測される。

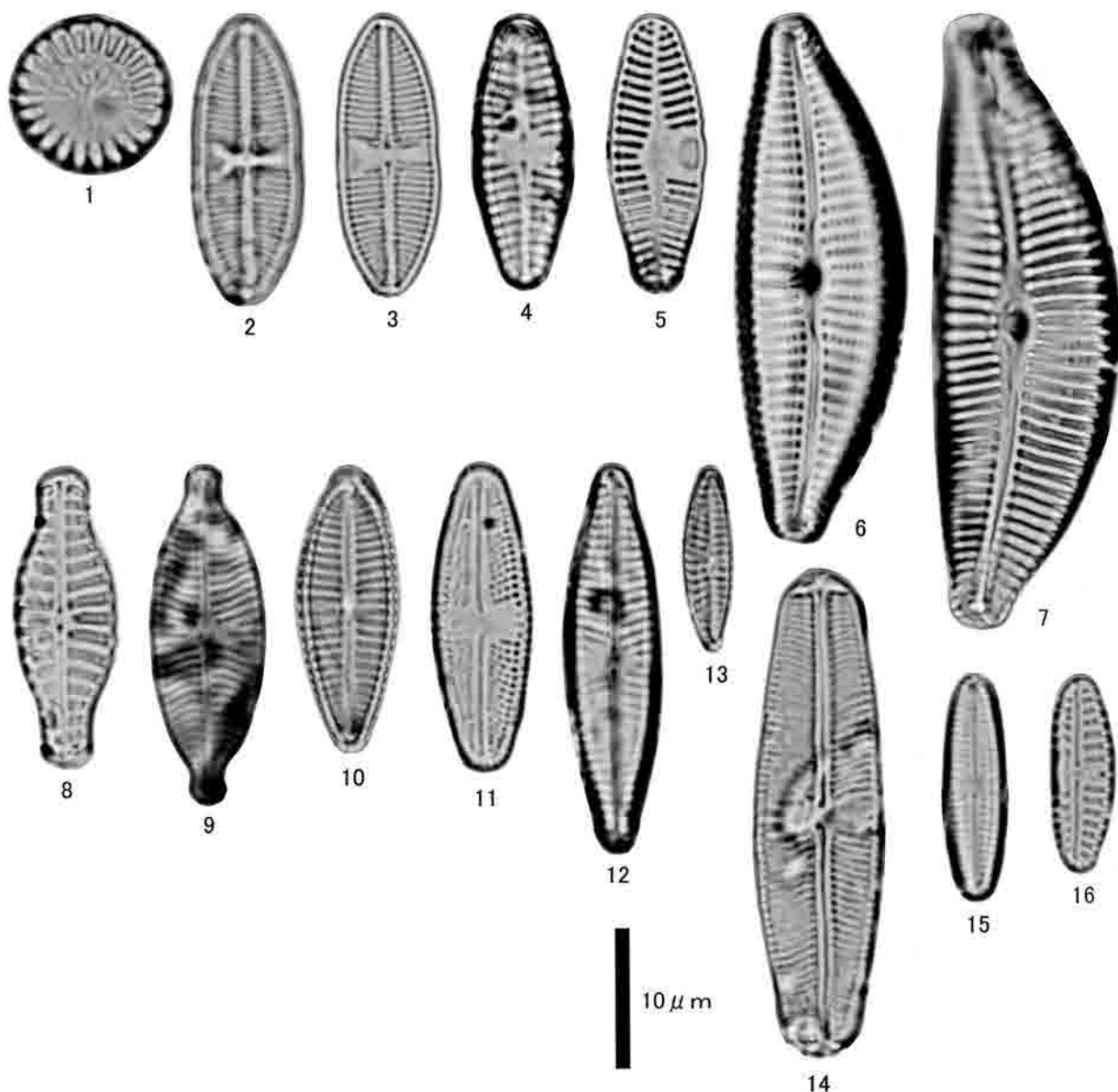
引用文献

安藤 一男,1990,淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用.東北地理, 42, 73-88.

Asai, K. & Watanabe, T., 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophylic and saproxenous taxa. *Diatom*,10, 35-47.

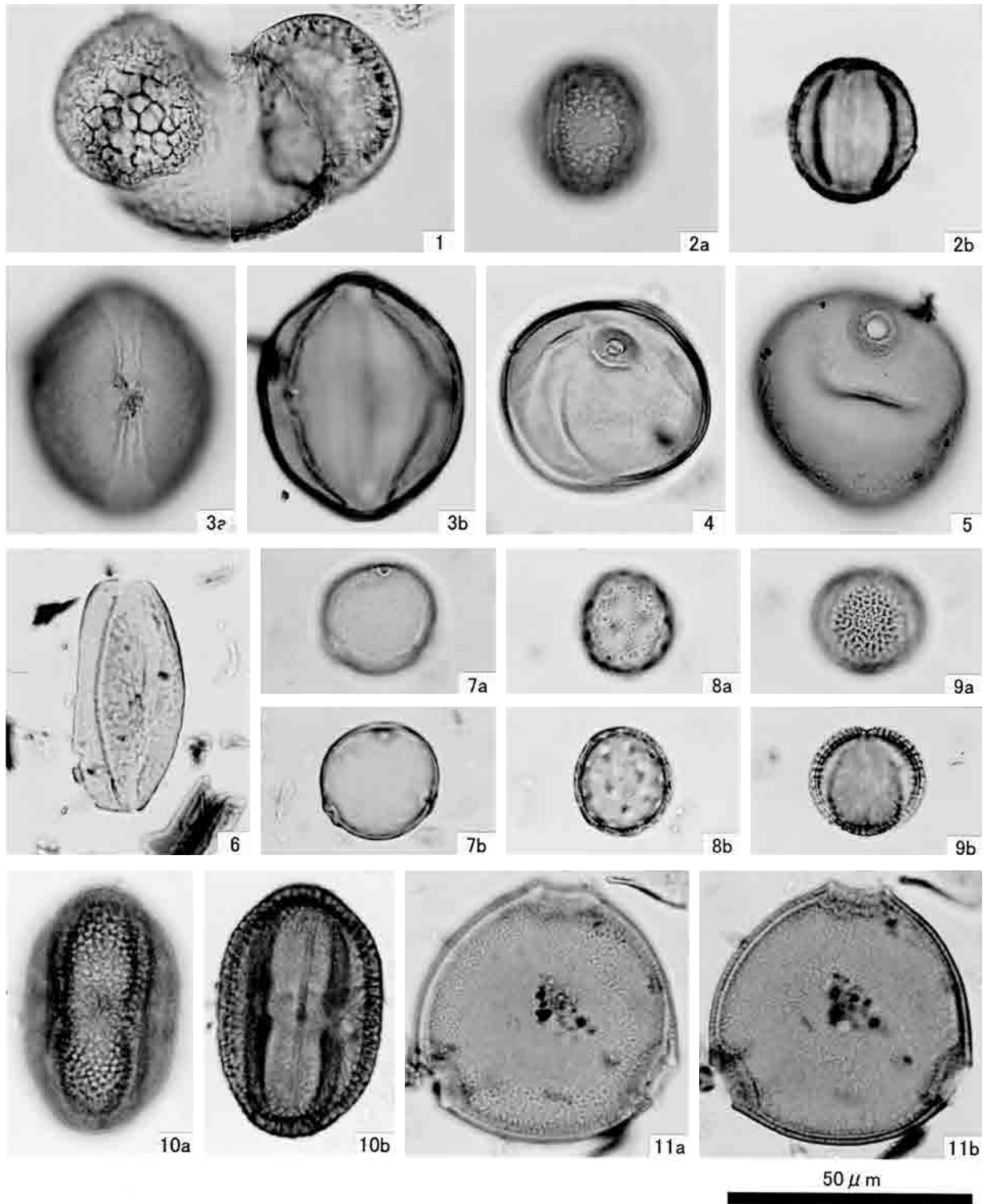
別所 秀高, 1999, 瓜生堂遺跡第45次調査地点でみられた堆積環境変遷過程と人間活動の履歴.瓜生堂遺跡第45次発掘調査概要報告書, (財) 東大阪市文化財協会, 225-232.

- 原口 和夫・三友 清史・小林 弘, 1998, 埼玉の藻類 珪藻類. 埼玉県植物誌, 埼玉県教育委員会, 527-600.
- 福島 博・小林 艶子・吉武 佐紀子, 2002, 温泉産新種珪藻, *Navicula tanakae* Fukush., Ts. Kobay. & Yoshit. nov. sp. について. 珪藻学会誌, 18, 13-21.
- 堀内 誠示・高橋 敦・橋本 真紀夫, 1996, 珪藻化石群集による低地堆積物の古環境推定について. - 混合群集の認定と堆積環境の解釈 -, 日本文化財科学会, 第13回大会研究発表要旨集, 62-63.
- Hustedt, F., 1937-1939, Systematische und ökologische Untersuchungen über die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. Archiv für Hydrobiologie, Supplement, 15:131-177, 15:187-295, 15:393-506, 15:638-790, 16:1-155, 16:274-394.
- 伊藤 良永・堀内 誠示, 1991, 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6, 23-45.
- 小杉 正人, 1988, 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27, 1-20.
- 近藤 鍊三, 2004, 植物ケイ酸体研究. ペドロジスト, 48, 46-64.
- Krammer, K., 1992, PINNULARIA. eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND 26. J. CRAMER, 353p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1986, Bacillariophyceae. 1. Teil: Naviculaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band 2/1. Gustav Fischer Verlag, 876p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1988, Bacillariophyceae. 2. Teil: Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band 2/2. Gustav Fischer Verlag, 536p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1991a, Bacillariophyceae. 3. Teil: Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band 2/3. Gustav Fischer Verlag, 230p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1991b, Bacillariophyceae. 4. Teil: Achnantheaceae, Kritische Ergänzungen zu *Navicula* (Lineolatae) und *Gomphonema*. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band 2/4. Gustav Fischer Verlag, 248p.
- Lowe, R. L., 1974, Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms. 334p. In Environmental Monitoring Ser. EPA Report 670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U.S. Environ. Protect. Agency, Cincinnati.
- 松田 順一郎, 2001, 河内平野沖積低地南部における完新世後半の旧大和川分流路発達と人間活動. 第50回埋蔵文化財研究集会 環境と人間社会 - 適応, 開発から共生へ - 発表要旨集, 39-51.
- パリノ・サーヴェイ, 2002, 瓜生堂遺跡47-2次調査に伴う自然科学分析. 瓜生堂遺跡46. 47-1・2次発掘調査報告書, 東大阪市教育委員会, 265-282.
- Round, F. E. & Basson, P. W., 1997, A new monoraphid diatom genus (*Pogoneis*) from Bahrain and transfer of previously described species *A. hungarica* and *A. taeniata* to new genera. Diatom Research 12, 71-81.
- Round, F. E., Crawford, R. M. & Mann, D. G. 1990, The diatoms. Biology & morphology of the genera. 747p. Cambridge University Press, Cambridge.
- 渡辺 仁治, 2005, 淡水珪藻生態図鑑 群集解析に基づく汚濁指数DAI_{po}, pH耐性能. 内田老鶴圃, 666p.



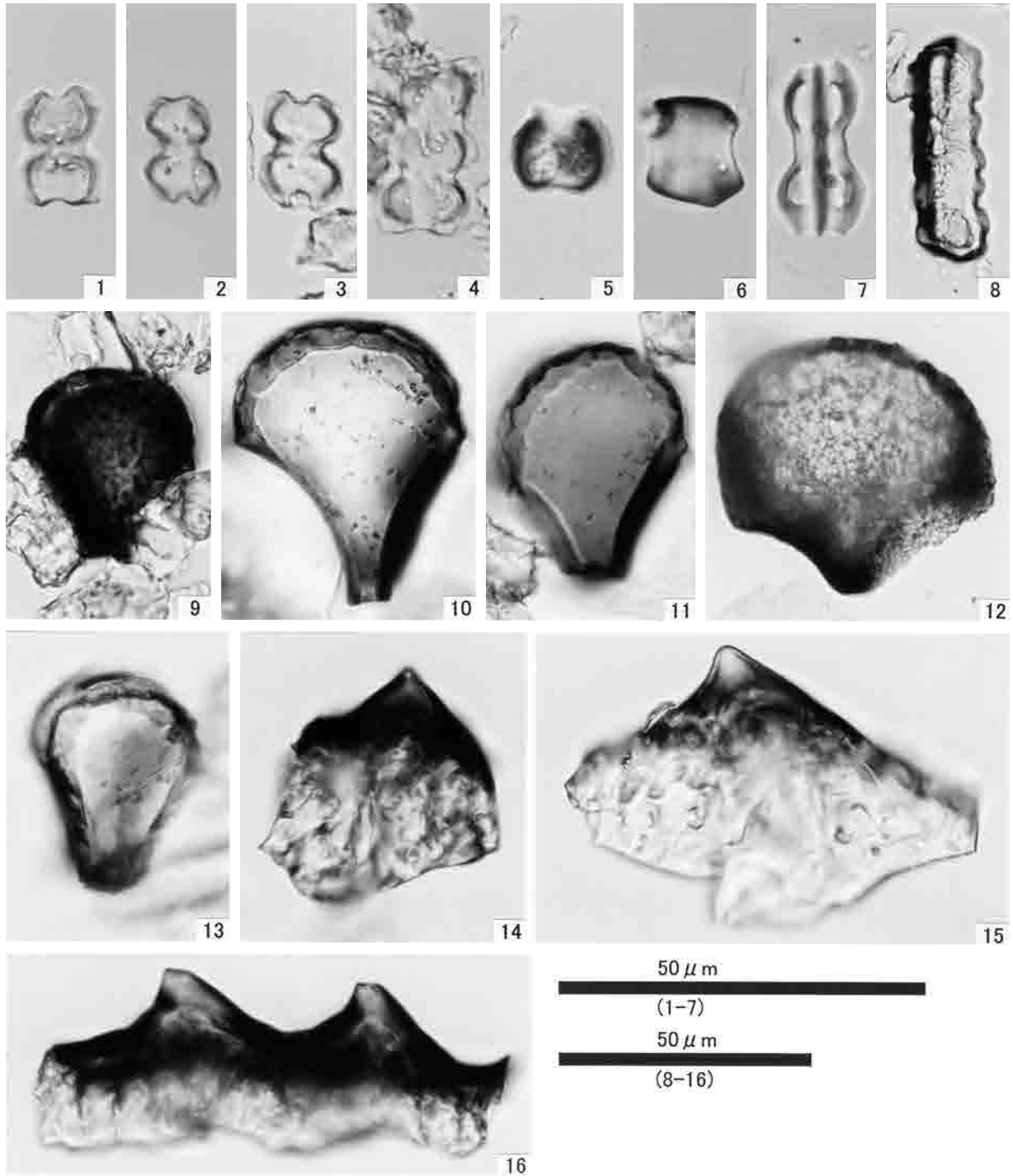
- 1 . *Cyclotella meneghiniana* Kuetzing(試料番号8)
- 2 . *Lemnicola hungarica* (Grunow)Round & Basson(試料番号8)
- 3 . *Lemnicola hungarica* (Grunow)Round & Basson(試料番号8)
- 4 . *Planothidium lanceolatum* (Breb.)Round et Bukhtiyarova(試料番号5)
- 5 . *Planothidium lanceolatum* (Breb.)Round et Bukhtiyarova(試料番号5)
- 6 . *Cymbella turgidula* Grunow(試料番号1)
- 7 . *Cymbella turgidula* var. *nipponica* Skvortzow(試料番号1)
- 8 . *Hippodonta capitata* (Ehren.)Lange-B.,Metzeltin et Witkowski(試料番号8)
- 9 . *Geissleria decussis* (Oestrup)Lange-B. Et Metzeltin(試料番号1)
- 10 . *Gomphonema parvulum* Kuetzing(試料番号8)
- 11 . *Luticola mutica* (Kuetz.)D.G.Mann(試料番号1)
- 12 . *Navicula veneta* Kuetzing(試料番号5)
- 13 . *Navicula* cf. *tanakae* Fukush.,Ts.Kobay. & Yoshit. (試料番号5)
- 14 . *Sellaphora pupula* (Kuetz.)Mereschkowsky(試料番号8)
- 15 . *Sellaphora seminulum* (Grun.)D.G.Mann(試料番号5)
- 16 . *Reimeria sinuata* (W.Greg.)Kocielek et Stoermer(試料番号1)

写真2 珪藻化石



- | | |
|---------------------|------------------|
| 1. マツ属複維管束亜属(試料番号6) | 2. コナラ亜属(試料番号8) |
| 3. カキノキ属(試料番号8) | 4. イネ科(試料番号1) |
| 5. イネ科(試料番号8) | 6. ミズアオイ属(試料番号6) |
| 7. クワ科(試料番号5) | 8. アカザ科(試料番号6) |
| 9. アブラナ科(試料番号6) | 10. ソバ属(試料番号5) |
| 11. キウリ属(試料番号5) | |

写真3 花粉化石



- | | |
|------------------------|-----------------------|
| 1. イネ属短細胞珪酸体(試料番号1) | 2. イネ属短細胞珪酸体(試料番号5) |
| 3. イネ属短細胞珪酸体(試料番号7) | 4. ヒエ属短細胞珪酸体(試料番号1) |
| 5. ヨシ属短細胞珪酸体(試料番号1) | 6. ネザサ節短細胞珪酸体(試料番号7) |
| 7. コブナグサ属短細胞珪酸体(試料番号1) | 8. オオムギ族短細胞珪酸体(試料番号1) |
| 9. イネ属機動細胞珪酸体(試料番号1) | 10. イネ属機動細胞珪酸体(試料番号7) |
| 11. イネ属機動細胞珪酸体(試料番号5) | 12. ヨシ属機動細胞珪酸体(試料番号1) |
| 13. ネザサ節機動細胞珪酸体(試料番号7) | 14. イネ属穎珪酸体(試料番号1) |
| 15. イネ属穎珪酸体(試料番号5) | 16. イネ属穎珪酸体(試料番号7) |

写真4 植物珪酸体

第5章 まとめ

第1節 遺構の変遷

今回、新たに見つかった花屋敷遺跡では主に中世の遺構、遺物を中心とする調査成果を得ることができた。以下に調査した層、遺構面の順に、その成果をまとめることにしたい。

調査した面は調査区域の一部だけに存在する面も含め、合計7面である。第1面および第2面は近世以降の耕作面であることがわかった。第3面では溝、井戸、窪地が検出された。3本の溝は東西方向に走り、窪地は南北に長い。これらの遺構の下面にも溝が存在し、ほぼ同じ位置、方向に溝が連続と踏襲されていたことがわかった。

これらの溝や窪地から出土する遺物は下位の層から発見されるものと同様のものが多い。これは遺構が砂で一挙に埋まった形跡が認められることから、洪水などにより周辺の下位の層や面を破壊し、古い遺物が混入したものと考えられる。よって当該期と思われる遺物は少なく、遺構の時期を明確にすることは難しいが、16世紀以降に耕作関係に使用された用水路として機能した溝群であろうと考えられる。

なお、井戸（16井戸）は出土した遺物から18世紀以降の遺構であることがわかり、当面検出のほかの遺構とは時期が異なり新しい。本来、もう少し上の面から切り込んで形成された遺構であろうが、耕作面を構築する際にこの面は削平され、第3面ほかの古い時期の遺構と共に検出されることになったのであろう。

このように、第1面から第3面までは耕作に使用された面であることから、その基盤となる層も、おのずと耕作面を形成するために構築された層と考えられる。

第4面以下はこれら上面の様相とはかなり異なる。中世の遺構面である。第4面では多くのピット、土坑を検出したが、当面で特筆すべきは、竹管を利用した導水施設（60溝）と、それに取り付け結桶を埋桶として使用した貯水施設（19埋桶）および土師器皿が集積して出土した長方形の土坑（20土坑）をあげることができる。

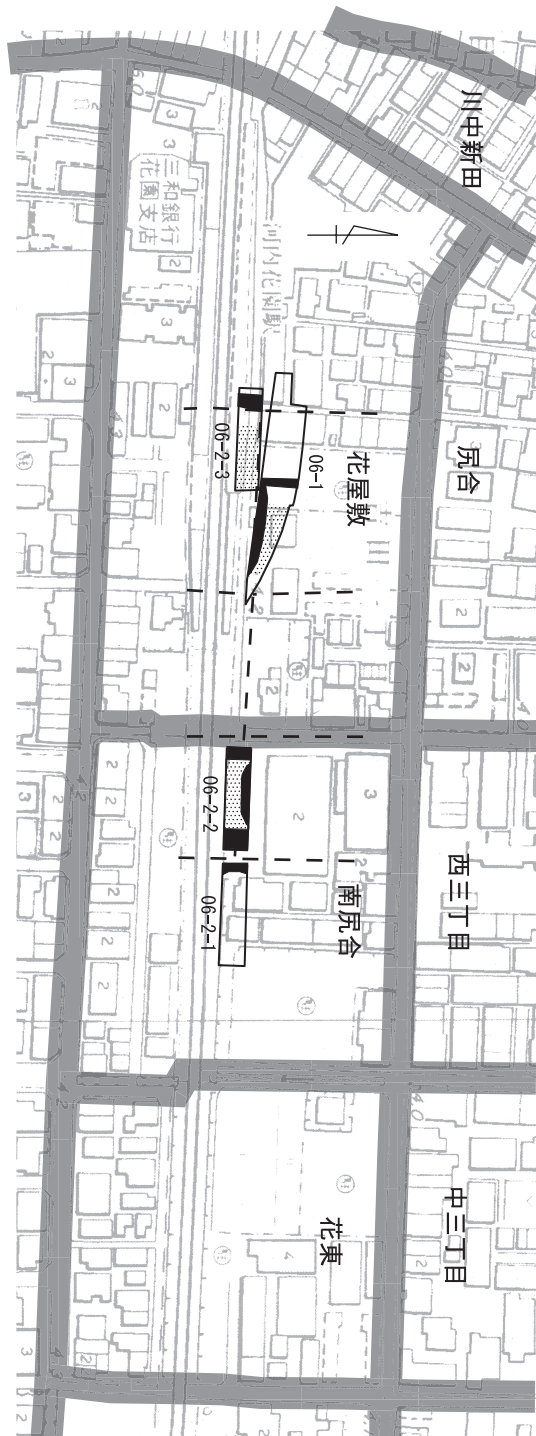
60溝は西端の14溝から水を引いていたと考えられ、東側にほぼ真直ぐ約18m延び、第1調査区東端近くにある水を貯水する桶（19埋桶）に取り付け。溝には竹筒が埋められており、これが、14溝の水を桶へ流し込む導水管となっていた。中世ではこのような結桶と竹管を使用した導水施設・貯水施設は珍しい。これらの施設が構築される前までは、いずれも同一方向に、開口した幅の広い溝（第3面の15溝、第4面、第5面の80溝）が存在した。

また、20土坑は19埋桶の東に接するように位置する。平面形が長方形の土坑内に土師器皿が集積し、周りを柱列が取り囲む施設である。19埋桶を15世紀前半代とすると、同時期か、やや後出の遺構であろうが、いずれも特異な遺構であると考えれば、同時期に存在した可能性の方が高いのではないかとも思える。祭祀・宗教的な施設であろうか。類例を求めたいところである。

ほかに、当面では多数のピットや残存する柱痕もいくつかあることから、掘立柱建物が存在したであろうと思われるが、なにぶん調査区が狭く、攪乱で削平を受ける箇所が多かったので、建物を復元することはできなかった。総じて第4面は15世紀代の遺構面ということができよう。

第4-2面は第1調査区の東端に部分的に存在するだけで、調査区外へ広がる。上面と同じく、多数

網目部は中世の遺構集中地、
黒塗部分は溝を表す。
破線部は区画想定ラインを表す。



(1 : 2500)

第61図 調査区周辺の字名と
主要遺構模式図

のピットや柱痕が存在するので、やはり、掘立柱建物の存在が想定できる。この内の87土坑は長軸0.74m、短軸0.54m、の隅丸方形の平面形を呈し、底に根石を敷き、その上に4枚に分かれたコウヤマキを用いた礎板がのり、その上に柱材を据えたであろう、やや特異な遺構である。上部の遺構である20土坑の下部近くにて検出している。以上のことから考え、この遺構も宗教行為に関する施設の跡であるのかもしれない。

第5面は今回の調査において中心となる遺構面である。第1調査区南側にある80溝が当面で検出した遺構から出土した遺物の大半を占める。第3面にて検出した15溝と重複するように80溝も東西方向に走る。南北方向に走る14溝と西端で取次ぎ「L」字状の平面形となるようであり、恐らくは、掘立柱建物を取り囲むものと思われる。中世の集落遺跡にてしばしば認められる居住空間（屋敷地）を区画する溝であろう。

また、80溝からは多量の木製品が出土した。織機、下駄、草履などの履物、漆器椀、馬骨などが出土しているが、特に目を引くものとしては、木筒が見つかったことであろう。「西方源三上」と墨書された付札と「□田八郎小麦十九把 又ハ□（苧カ）カラ六把」と墨書された札の2点である。いずれも物品の取引に関係する札であると思われる。

第5面においても、上述の理由により、やはり復元はできなかったが、掘立柱建物が存在したであろうと思われる。

第5-2面は第1調査区の中央やや西よりの地域だけに存在する。当面からもピットが多く検出している。

第2調査区の遺構面は西端に4㎡だけ存在するだけで、ほかの場所は攪乱により、2m以上の深さまで破壊されていた。遺構は、第1調査区の第5面相当の面にて土坑172が1基見つかっただけである。

第1調査区、第2調査区ともに、第5面（部

分的には第5 - 2面)相当以下の層には遺物はみられなかった。遺物よりみるに、当地に開発の手が下されたのは13世紀の後半から遅くとも14世紀初頭であろうが、古墳時代から古代にかけての遺物も散見されることから、周辺にはその当時の遺構があった可能性も考えられる。

第2節 出土した木簡と花屋敷

今回の調査では、多くの遺物の出土を見たが、2点の木簡が出土している。木簡はいずれも第1調査区の第5面の80溝から出土している。

261はヒノキ材、残長20.0cm、幅2.7cm、厚さ0.8cmを測る。上部は切断され、下部は欠損している。上端の一部が縦に裂けている。表裏ともに加工されている。積文と読下しは「だはちろう こむ認ゆうきゅうめい □田八郎小麦十九把 また 又ハウ (亭カ) からむし からろむ 幹六把」となろうか。文面から察するに、小麦もしくは苧に対し購入か借用することに関する木簡のようである。一字目は「悟」や「吾」もしくは「吉」とも読めそうであった。もし「吉」の字であれば人名に当地の字名が現れることになるが、板は縦に裂けており、文字は不明瞭である。「ウ」は「苧」の略字であると解した。

苧(からむし)はイラクサ科多年草の植物であり、茎(幹)は繊維の材料の一種となる。また、茎から製した繊維や布を指す場合がある。もしも、布の原材料として購入か借用されていたとなれば、同じく80溝から出土している織機類との関係を考えあわせ想像するに、屋敷の住人に布織関係に従事する者の存在を想起させる。

もう一点の262はスギ材、残長7.0cm、幅1.9cm、厚さ0.4cmを測り、下端部を尖り気味に加工する。上端部は切目をつけて折り取る。表裏面に加工痕がある。積文と読み下しは「にしかたげんぞう 西方源三上」である。上部は切り取られ、さらに語句は続いていた可能性も捨てきれないが、文章としては完結しているものと思われる。80溝の最下層の比較的上方、下層との境目付近で出土した。134の土師器皿が近接して出土している。

今谷明氏や弓倉弘年氏の研究によると西方氏は畠山氏の一族であり、嘉吉の変(1399年)以降に畠山氏に重用される。中でもよく知られるのは、西方国賢である。八尾立石という所の領主であったようである。河内国守護畠山持国に近侍し、河内国守護代に抜擢されるが、畠山氏の家督争いの渦中、享徳3(1454)年京都にて切腹して果てる。国賢の子孫には国信、国度と続いた。

さて、当地と西方氏は如何な関係があるのだろうか。残念ながら「源三」という名前は文献には現われず、どのような人物であったかは不明である。それでは、この木簡がどのような経緯で溝に埋まることになったのであろうか。もし、木簡が荷札などの付札としたなら、「西方源三」のもとへ、別の場所からもたらされてから廃棄されたものか、それとも、この地から「西方源三」方へもたらされるはずのものであったのか。上を奉と同義とするなら、「西方源三」へ差し上げた、と考えるのが妥当ではなかろうか。あくまで推測の域をでないが、先方から「西方源三」へ差し出された物品に付随していた付札が役目を終えた後に、送り届けられた先にて廃棄され、80溝に投棄されるにいたった。と考えてはどうであらうか。

以上のように出土した木簡の類推から、当地が河内畠山氏の一族である西方氏に関係のある集落とすれば、第1調査地第5面の区画された屋敷地が13世紀後半に始まって、同第4面が15世紀後半までには終わり、以降は耕作地へと転換していることは何を示すのであろうか。15世紀中頃といえば国賢が非業の死を遂げた時期であり、以後、守護代の地位も遊佐氏に譲ることになる。また、遺跡の西南1.6km辺

りに位置したであろう若江城も文明9（1477）年には畠山氏関係における守護所としての役割を終える。家臣である西方氏もその動きに合わせて当地を離れたのであろうか。ただし、畠山氏一族において西方氏を名乗るのが国賢からであるとなれば、それ以前の開発主体や当の「源三」は何者であろうか。

もっともこのような小さな木簡の一片にて当地の歴史を語るのは至難の技であり、文献資料をかい摘んであてはめ、決め付けることは、慎まねばならない。しかし、当地の歴史、文化の解明はまだ始まったばかりである。今後の課題の一つとして取り上げられ、歴史の事実を紐解く一助になれば幸いである。

さて、「花屋敷」という名で当地が呼び慣わされるようになったのは何時の時代であろうか。足利義満の幕府「花御所」、御所の「花御殿」など、古にて居宅に冠される「花」の文字は、時代に権勢を振るった人々の雅な住まいを指すことがある。今回の発掘の成果は、はからずしも、このような思いを想起させる。もっとも、「花屋敷」は字名として残るのみで、具体的に文献資料としてはあられせず、本考古資料においても、もっぱら確証を得ているわけではない。わずかに上述の「西方云々」の木簡が示唆してくれるかも知れぬ、という程度である。

この調査と同じく、隣接地にて「花屋敷遺跡06-2」の調査が行われた（第61図）が、字「花屋敷」にあたる当地の遺物の出土が群を抜いている。特に、100mほど東に離れた字名の異なる06-2-1調査区（字「南尻合」）では遺構や遺物の量は極端に減る。集落の東端となるようである。集落の中世の面にて出土する遺物の傾向をみると、圧倒的に土師器皿の出土が多いことがわかる。瓦器も多い。また陶磁器では常滑焼と備前焼、東播系練鉢の出土がめだつ。瓦質の火鉢・羽釜や瓦の出土も少なくない。先述の織機類や鋳滓の出土もある。当調査区周辺がこの集落の中心となる場所の一つといえるかもしれない。いずれにせよ、検出された中世集落跡が、「花屋敷」として結びつくかは、捨て置けぬ、かつ興味深い話ではあるが、今後も検討を要する。

それでは、集落の東端に対して西端はどこであろうか。当調査区の西側に当時、恐らく傍を玉串川が流れていたであろうことから、集落の西限をその近隣に求めることができるであろう。南北方向の境界は今後の調査にゆだねなければならないが、集落の東西の境がおぼろげながら見えるようである。

また、旧字名に反映される条里地割と比較すると、地割の境に06-2-2調査区の20溝が、南北のちょうど真中の位置に80溝、06-2-1調査区の14溝の位置と重なる。集落の区画が条里地割を意識し、活用もしくは規制されていることが窺える。

今回の調査では、当地において、近代以降の宅地が成立する以前、はるか昔の室町時代にも同様に居住地として使用され、生活が営まれていたことを知ることができた。

今後、この地は再び開発により生まれ変わり、未来に向けた、新しい雅な住まい、生活空間を構築していくことになろうが、まさに、時空の流れの中の栄枯盛衰の妙味を暗示してくれた今回の調査であった、と考えれば実に興味深く、奇縁を感じる次第である。

注）東大阪市遺跡保護調査会1973「吉田条里小字図」『池島町の条里遺構－調査概要－』をもとに作成した。

【参考文献】

- 日本大辞典刊行会1973『日本国語大辞典』小学館
- 今谷明1986『守護領国支配機構』法政大学出版局
- 弓倉弘年2006『中世後期畿内近国守護の研究』清文堂
- 小谷利明2003『畿内戦国期守護と地域社会』清文堂
- 東大阪市遺跡保護調査会1973『池島町の条里遺構－調査概要－』

遺物 觀察表

①土器・陶磁器・土製品類 図版の太字はカラー図版。()は復元。[]は残高・長。斜体は底(高台)径。U5は5%以下。

遺物番号	挿図	図版	器種	口径 [cm]	器高 [cm]	残存率 [%]	出土 遺構・層	調整・特徴	主な外面の色調	備考
2	11	11-1	ミニチュア 瓦質羽釜	(3.2)	(3.8)	20	第2層	内外面横方向のナデ。	灰白色5Y7/1	
3	11	11-1	土製鈴 鈴玉	3.0 0.90	2.35 0.75	99	第2層	ナデ。	灰白色10YR8/1	
4	11	11-1	須恵器杯身	(12.0)	(2.3)	U5	第2層	回転ナデ。	灰色N7/0	
5	11	2-1	青磁椀	(15.0)	(4.1)	U5	第2層	口縁～体部全面施釉。	明オリブ灰色2.5GY7/1	龍泉窯系D-II類
6	11	2-1	青磁椀	6.2	(2.2)	25	第2層	全面施釉。回転ヘラケズリ。削りだし高台。高台内部無釉。 畳付の釉は一部削り取る。 見込みに陰印刻草花文。外面に幅の細い編連弁を片削り。 見込み、高台部分を残すように周辺を打ち極く。	灰オリブ色10Y4/2	龍泉窯系D類か。
7	11	2-1	青花皿	(7.0)	(1.0)	5	第2層	回転ナデ。高台内部の一部無釉。外面腰部、 高台際に圈線、見込みに如意雲文を呉須で描く。	明オリブ灰色2.5GY8/1	
8	11	11-1	把手	—	(5.2)	U5	第2層	全体にナデ。	にぶい橙色7.5YR7/4	
10	11		土師器甕	(21.0)	(7.4)	5	第2層	内外面横ナデ後内面体部横ハケ(5本/cm)、 外面体部板状工具によるタタキ後、一部に縦方向の粗い指ナデ。	灰白色5Y8/1	
11	11	2-1	瀬戸焼 折縁小皿	(19.8)	(3.3)	U5	第2層	回転ナデ。外面体部には(淡黄色2.5Y8/3)を塗り、 鉄釉(にぶい赤褐色5YR5/3)を口縁部、体部上位に施釉。 内面使用による摩滅。	淡黄色2.5Y8/3	御皿か。
12	14		土師器皿	(7.0)	(1.9)	20	14窪地	口縁部のみ横ナデ。造りやや粗い。 ナデで仕上げるが、指圧痕が底部に残る。	灰黄色2.5Y6/2	
13	14	2-1	青磁椀	4.8	(4.8)	40	14窪地	全面施釉。回転ヘラケズリ。削りだし高台。高台内部無釉。 畳付は一部施釉。 外面に細描連弁文。見込みに陰印刻草花文を印刻。	灰オリブ色10Y5/2	龍泉窯系 B-III-a類
14	14		須恵器練鉢	30.6	(4.6)	U5	14窪地	回転ナデ。口縁部外面に自然釉かかる。	灰色N5/0	II-2
15	14		備前播鉢	(32.0)	(4.0)	U5	14窪地	回転ナデ。すり目(4本/cm)。 重ね焼部分(口縁端部と体部下位)窯変。	灰褐色5YR4/2	IV-A
18	15		土師器皿	8.4	2.0	100	15溝	内面底部ナデ。外面指押さえ後体～底部ナデ。 口縁～内面体部横ナデ。	灰黄色2.5Y7/2	d-3類
19	15		土師器皿	7.8	1.7	85	15溝	内面底部ナデ。外面指押さえ後体～底部ナデ。 口縁～内面体部横ナデ。体部の接合痕明瞭に残る。	にぶい橙色7.5YR7/4	d-3類
20	15		土師器皿	9.4	1.6	70	15溝	内面底部ナデ。外面指押さえ後体～底部ナデ。 口縁～内面体部横ナデ。造り粗い。	にぶい黄褐色10YR7/4	D-3類
21	15	11-2	土師器皿	(9.4)	2.2	40	15溝	内面底部ナデ。外面指押さえ後体～底部ナデ。 口縁～内面体部横ナデ。外面と内面に煤多量に付着。	灰黄褐色10Y6/2	D-1類か。
22	15	11-2	土師器皿	14.5	3.1	75	15溝	外面体～底部指押さえ後ナデ。口縁部横ナデ。 内面口縁部に細かいハケ。	灰白色5Y7/1	京都産模倣か。
23	15	2-1	青磁椀	(16.0)	(3.9)	U5	15溝	回転ナデ。口縁～体部全面施釉。	灰色10Y5/1	龍泉窯系D-I類
24	15		備前焼播鉢	(27.0)	(6.0)	U5	15溝	回転ナデ。内面横方向のナデ。すり目(3本/cm)。 内外面の一部に煤付着。	橙色2.5YR6/6	IV-A
25	15		瓦質播鉢	(40.0)	(4.5)	U5	15溝	横ナデ。外面体部ヘラケズリ。	灰色N6/0	
26	15		瓦質火鉢	(35.0)	(6.4)	U5	15溝	内面横方向のナデ。外面口縁端部面取り。 外面口縁～体部中央横方向のヘラミガキ。 中央部、縦方向のヘラミガキ。内外面に煤付着。	灰白色2.5Y8/1	浅鉢III
27	16		須恵器練鉢	(29.5)	(4.5)	U5	17溝	回転ナデ。口縁端部自然釉付着。	灰色N6/0	東播系III-2
28	17	11-4	青磁染付	(8.0)	(3.3)	15	16井戸	全面施釉。ヘラケズリ。削りだし高台。畳付の釉は削り取る。 外面青磁肌に腰部に呉須(青灰色10BG5/1)にて圈線を3条廻す。	明オリブ灰5GY7/1	
31	19	11-5	土師器皿	7.9	1.6	100	第3層	内外面底部ナデ。口縁～体部横ナデ。	灰黄色2.5Y7/2	a類か。
32	19		土師器皿	(7.9)	1.4	40	第3層	内面底部ナデ。外面底部指押さえ後ナデ。 口縁～体部横ナデ。	にぶい橙色7.5YR7/4	b類
33	19		土師器皿	7.9	1.3	100	第3層	内面底部ナデ。外面底部指押さえ後ナデ。 口縁～体部横ナデ。	灰白色5Y7/2	c類
34	19		土師器皿	7.8	1.6	100	第3層	内面底部ナデ。外面指押さえ後底部ナデ。 口縁～内面体部横ナデ。	灰黄色2.5Y7/2	d-3類
35	19		土師器皿	(9.6)	(2.1)	25	第3層	内面底部ナデ。外面指押さえ後体～底部粗いナデ。 口縁～内面体部横ナデ。	浅黄色2.5Y7/3	D-3類
36	19	11-5	瓦器椀	10.8	2.8	90	第3層	外面底部指押さえ。内外面ナデ。口縁～内面体部上位横ナデ。 内面ナデ後渦巻状暗文。	灰色N4/0	和泉型IV-3～4
37	19	2-1	青磁椀	(15.0)	(2.5)	5	第3層	回転ナデ。口縁～体部全面施釉。	灰色10Y5/1	龍泉窯系D-II類
38	19	2-1	青磁椀	(5.0)	(3.8)	10	第3層	全面施釉。回転ヘラケズリ。削りだし高台。 高台畳付～内部無釉。外面に輪連弁。	灰オリブ色5Y5/2	龍泉窯系A-I類
39	19	11-5	信楽焼壺	(45.0)	(5.5)	U5	第3層	回転ナデ。全体に自然釉かかる。	にぶい赤褐色2.5YR5/4	KA1類
40	19	11-5	瓦質播鉢	(30.0)	(6.0)	U5	第3層	内面横ナデ。すり目(4～5本/cm)。外面体部横ハケ後ヘラケズリ。	黄灰色2.5Y6/1	片口
44	25		土師器皿	(8.4)	1.7	30	19埋桶	内面底部ナデ。外面指押さえ。口縁～内面体部横ナデ。造り粗い。	灰白色5Y7/2	d-4類
45	25		土師器皿	(14.0)	(2.7)	60	19埋桶	外面底部指押さえ後口縁～体部横ナデ。 内面に細かいハケ。外面と内面の一部に煤付着。胎土緻密。	灰黄色2.5Y5/2	京都産模倣か。 灯明皿
46	25	12-2	瓦質羽釜	(22.3)	(8.0)	U5	19埋桶	体部内面横と斜め方向にハケ。口縁部、鏝部横ナデ。 口縁部に凹線二条弱く入る。内面と外面鏝下まで煤付着。	浅黄色2.5Y6/2	河内型
49	25		土師器皿	7.7	1.1	99	60溝	内面底部ナデ。外面指押さえ後体～底部ナデ。 口縁～内面体部横ナデ。内外面の一部に煤付着。	灰黄色2.5Y6/2	d-1類 灯明皿
50	25		土師器皿	8.0	1.6	60	60溝	内面底部ナデ。外面指押さえ後底部ナデ。 口縁～内面体部横ナデ。内外面の一部に煤付着。	灰色5Y6/1	d-3類 灯明皿
51	25		土師器皿	8.0	1.7	70	60溝	内面底部ナデ。外面指押さえ後体～底部ナデ。 口縁～内面体部横ナデ。	灰オリブ色5Y6/2	d-4類
52	25		土師器皿	8.4	1.6	60	60溝	内面底部ナデ。外面指押さえ後体～底部ナデ。 口縁～内面体部横ナデ。	灰オリブ色7.5Y6/2	d-1類
53	25		土師器皿	8.3	1.7	70	60溝	内面底部ナデ。外面指押さえ後体～底部ナデ。 口縁～内面体部横ナデ。内外面の一部に煤付着。	灰オリブ色5Y6/2	d-2類 灯明皿
54	25	12-2	土師器皿	8.5	2.0	100	60溝	内面底部ナデ。外面指押さえ後体～底部ナデ。 口縁～内面体部横ナデ。	褐色2.5Y5/2	d-2類
55	25		土師器皿	(14.5)	(2.7)	15	60溝	口縁～体部横ナデ。外面の一部に煤付着。胎土緻密。	灰白色5Y7/1	京都産か。灯明皿
56	25		土師器皿	(15.2)	(2.3)	10	60溝	外面体部指押さえ後口縁～体部横ナデ。	灰黄色2.5Y7/2	京都産模倣か。
57	25	12-2	土師器皿	9.4	2.3	99	60溝	内面底部ナデ。外面指押さえ後体～底部粗いナデ。 口縁～内面体部横ナデ。内面の一部に煤付着。	褐色2.5Y5/2	D-1類 灯明皿
58	25		土師器皿	10.0	1.9	99	60溝	内面底部ナデ。外面指押さえ後体～底部粗いナデ。 口縁～内面体部横ナデ。内面の一部に煤付着。	灰黄色2.5Y6/2	D-1類 灯明皿

遺物番号	坪区	図版	器種	口径 [cm]	器高 [cm]	残存率 [%]	出土 遺構・層	調整・特徴	主な外面の色調	備考
59	25		瓦質播鉢	—	(5.6)	U5	60溝	内面口縁部横ナデ。外面ヘラケズリ。すり目(4本/cm)。	灰N4/0	
60	25	12-2	瓦質火鉢	—	12.0	U5	60溝	方形。内面横ナデの後ハケ。下位に一部、横方向の板ナデか。外面凸帯、足部貼り付け。花菱文を挿入。外面ヘラミガキをナデ消すか。	灰色N4/0	浅鉢VI
61	25	12-2	ミニチュア 瓦質釜	(7.0)	(4.0)	U5	60溝	口縁部横ナデ。ほかハナデ。内面体部横ハケ。	灰色N4/0	
65	27	12-1	土師器皿	7.3	1.3	99	20土坑	内面底部ナデ。外面底部指押さえ後ナデ。口縁～体部横ナデ。	橙色5YR6/6	a類
66	27	12-1	土師器皿	7.5	1.5	80	20土坑	内面底部ナデ。外面底部指押さえ後ナデ。口縁～体部横ナデ。	灰黄色2.5Y7/2	a類
67	27	12-1	土師器皿	7.3	1.6	100	20土坑	内面底部ナデ。外面底部指押さえ後ナデ。口縁～体部横ナデ。	灰白色5Y7/2	a類
68	27	12-1	土師器皿	7.2	1.3	100	20土坑	内面底部ナデ。外面底部指押さえ後ナデ。口縁～体部横ナデ。	にぶい褐色7.5YR6/3	a類
69	27	12-1	土師器皿	7.4	1.0	100	20土坑	内面底部ナデ。外面底部指押さえ後ナデ。口縁～体部横ナデ。	にぶい黄褐色10YR7/3	a類
70	27	12-1	土師器皿	7.3	1.2	100	20土坑	内面底部ナデ。外面底部指押さえ後ナデ。口縁～体部横ナデ。	にぶい黄褐色5YR6/3	a類
71	27	12-1	土師器皿	7.5	1.3	95	20土坑	内面底部ナデ。外面底部指押さえ後ナデ。口縁～体部横ナデ。	にぶい褐色10YR5/4	b類
72	27	12-1	土師器皿	7.1	1.2	100	20土坑	内面底部ナデ。外面底部指押さえ後ナデ。口縁～体部横ナデ。	褐色5YR7/6	b類
73	27	12-1	土師器皿	7.6	1.6	100	20土坑	内面底部ナデ。外面底部指押さえ後ナデ。口縁～体部横ナデ。	灰黄色2.5Y7/2	b類
74	27	12-1	土師器皿	(8.2)	1.4	50	20土坑	内面底部ナデ。外面底部指押さえ後ナデ。口縁～体部横ナデ。	灰黄色2.5Y7/2	b類
75	27	12-1	土師器皿	7.6	1.3	95	20土坑	内面底部ナデ。外面底部指押さえ後ナデ。口縁～体部横ナデ。	にぶい黄褐色10YR7/3	b類
76	27	12-1	土師器皿	7.3	1.4	90	20土坑	内面底部ナデ。外面底部指押さえ後ナデ。口縁～体部横ナデ。	にぶい黄褐色10YR7/3	b類
77	27	12-1	土師器皿	7.8	1.7	100	20土坑	内面底部ナデ。外面底部指押さえ後ナデ。口縁～体部横ナデ。	浅黄色5Y7/3	b類
78	27	12-1	土師器皿	7.6	1.3	98	20土坑	内面底部ナデ。外面底部指押さえ後ナデ。口縁～体部横ナデ。	浅黄色2.5Y7/3	b類
79	27	12-1	土師器皿	7.7	1.3	95	20土坑	内面底部ナデ。外面底部指押さえ後ナデ。口縁～体部横ナデ。	灰黄色2.5Y7/2	b類
80	27	12-1	土師器皿	7.4	1.3	100	20土坑	内面底部ナデ。外面底部指押さえ後ナデ。口縁～体部横ナデ。	にぶい黄褐色2.5YR6/6	b類
81	27	12-1	土師器皿	7.6	1.6	90	20土坑	内面底部ナデ。外面底部指押さえ後ナデ。口縁～体部横ナデ。	灰黄色2.5Y7/2	c類
82	27	12-1	土師器皿	(8.1)	1.7	20	20土坑	内面底部ナデ。外面底部指押さえ後ナデ。口縁～体部横ナデ。	灰黄色2.5Y7/2	c類
83	27	12-1	土師器皿	7.7	1.6	100	20土坑	内面底部ナデ。外面底部指押さえ後ナデ。口縁～体部横ナデ。	灰黄色2.5Y7/2	c類
84	27	12-1	土師器皿	8.0	1.2	95	20土坑	内面底部ナデ。外面底部指押さえ後ナデ。口縁～体部横ナデ。	にぶい褐色7.5Y7/3	c類
85	27	12-1	土師器皿	7.6	1.5	99	20土坑	内面底部ナデ。外面底部指押さえ後ナデ。口縁～体部横ナデ。	灰黄色2.5Y7/2	c類
86	27	12-1	土師器皿	7.8	1.2	70	20土坑	内面底部ナデ。外面底部指押さえ後ナデ。口縁～体部横ナデ。	浅黄色2.5Y6/2	c類
87	27	12-1	土師器皿	7.7	1.2	80	20土坑	内面底部ナデ。外面底部指押さえ後ナデ。口縁～体部横ナデ。	灰黄色2.5Y7/2	c類
88	27	12-1	土師器皿	(11.3)	6.6	20	20土坑	外面底部、体部極弱い指押さえ後体～底部ナデ。口縁～内面体部横ナデ。内面底部ナデ。	浅黄色2.5Y7/3	F類
89	30		土師器皿	(15.9)	(2.4)	U5	14溝(下層)	内外面体部ナデ。口縁部横ナデ。外面下位黒斑(灰色N5/0)。胎土非常に緻密。	灰色5Y8/1	京都産か。
90	30		瓦質羽釜	(20.6)	(6.4)	U5	14溝(下層)	体部横方向にハケ。外面横方向のヘラケズリ。口縁部、鈔部横ナデ。外面口縁部に凹線三条弱く入る。	灰白色10YR8/2	河内D1型
91	30		瓦質羽釜	(23.7)	(4.5)	U5	14溝(下層)	体部内面横と縦方向にハケ。口縁部、鈔部横ナデ。口縁部に凹線三条入る。鈔下まで炭化物附着。	灰色10Y4/1	河内D2型
92	30		瓦質播鉢	(29.9)	(7.3)	U5	14溝(下層)	内外面体部ナデ。口縁部横ナデ。すり目(3本/cm)。	灰色7.5Y4/1	
94	31		土師器皿	(8.7)	(1.9)	U5	68ピット	体部ナデ。口縁部横ナデ。	灰白色5Y7/2	大和型
95	31		土師器皿	(11.7)	(1.6)	10	25ピット	体部ナデ。口縁部横ナデ。底部欠損。	にぶい黄褐色10YR6/4	
96	31		瓦器碗	(11.5)	(2.3)	40	30土坑	外面底部指押さえ。内外面ナデ。口縁～内面体部上位横ナデ。内面ナデ後荒い輪状暗文。ヘラミガキ。焼成不良による赤色化。	浅黄色2.5Y7/3	和泉型IV
97	31		瓦器碗	(11.8)	(3.0)	U5	35ピット	外面体部指押さえ後ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデ。後2mm幅のヘラミガキ。	灰色N4/0	和泉型III-3か。
98	31		瓦質播鉢	(37.4)	(6.5)	U5	50溝	内面、口縁部横ナデ。外面ヘラケズリ。すり目(5本/cm)。	暗灰色N3/0	
100	33		土師器皿	7.8	1.8	65	第4層	内面底部ナデ。外面指押さえ後体～底部ナデ。口縁～内面体部横ナデ。	灰オリーブ色5Y6/2	d-4類
101	33		土師器皿	8.4	1.5	70	第4層	内面底部ナデ。外面指押さえ後体～底部ナデ。口縁～内面体部横ナデ。造り粗い。	灰黄色2.5Y7/2	d-2類
102	33		土師器皿	8.0	1.5	70	第4層	内面底部ナデ。外面指押さえ後体～底部ナデ。口縁～内面体部弱い横ナデ。	灰白色5Y7/2	d-1類
103	33		土師器皿	(8.0)	1.3	50	第4層	内面底部ナデ。外面指押さえ後体～底部ナデ。口縁～内面体部横ナデ。	灰白色5Y7/2	e類(口縁部外反)
104	33		土師器皿	9.5	1.7	70	第4層	内面底部ナデ。外面指押さえ後体～底部ナデ。口縁～内面体部横ナデ。造り粗い。	灰黄色2.5Y7/2	D-2類
105	33		土師器皿	(9.0)	2.2	70	第4層	内面底部ナデ。外面指押さえ後体～底部粗いナデ。口縁～内面体部横ナデ。造り粗い。	にぶい黄褐色10YR6/3	D-1類
106	33	13-1	土師器皿	8.0	1.7	100	第4層	内外面底部ナデ。口縁～体部横ナデ。造り良い。	灰黄色2.5Y7/2	e類
107	33		土師器皿	(15.5)	(3.5)	25	第4層	外面底部指押さえ後体部ナデ。口縁～内面体部横ナデ。内面口縁部に細かいハケ。	灰白色2.5Y8/2	京都産横模か。灯明皿
108	33	13-1	瓦器碗	(11.4)	(2.8)	40	第4層(下層)	外面底部指押さえ。内外面ナデ。口縁～内面体部上位横ナデ。見込みに3～5mm幅の渦巻状のヘラミガキ。	灰白色10YR7/1	和泉型IV-3
109	33		瓦器碗	(11.5)	2.5	40	第4層	外面底部指押さえ。内外面ナデ。口縁～内面体部上位横ナデ。見込みに連結輪状暗文。二次焼成にて赤色化。	淡黄色2.5Y8/3	和泉型IV-4
110	33		瓦器碗	11.0	2.5	20	第4層	内外面ナデ。口縁部横ナデ。	灰白色7.5Y7/1	和泉型IV-5
111	33		瓦器碗	10.0	2.3	35	第4層	外面体部指押さえ後体～底部ナデ。口縁部横ナデ。	灰白色10Y8/1	和泉型IV-5
112	33		瓦器碗	(9.5)	2.6	30	第4層	外面体部指押さえ後内外面ナデ。口縁部横ナデ。見込みに連結輪状暗文。口縁部黒色化(暗灰色N3/0)。	灰白色7.5Y8/1	和泉型IV-5
113	33	13-1	瓦質羽釜	(19.0)	(8.7)	U5	第4層(下層)	体部内面横と斜め方向にハケ。口縁部、鈔部横ナデ。口縁部に凹線二条弱く入る。内面と外面鈔下まで附着物。	暗灰色N3/1	河内D2型
114	33		須恵器練鉢	(31.0)	(5.8)	U5	第4層	回転ナデ。口縁部自然袖付着。	灰色N6/0	東播系III-1
120	39		土師器皿	7.7	1.7	60	80溝	内外面底部ナデ。口縁～体部横ナデ。	灰オリーブ色5Y6/2	e類
121	39	16-1	土師器皿	7.9	1.9	80	80溝	外面底部、体部指押さえ後体～底部ナデ。口縁～内面体部横ナデ。歪み大きい。	灰白色2.5Y7/1	d-3類
122	39		土師器皿	(7.5)	1.7	50	80溝	内面底部ナデ。外面指押さえ後体～底部ナデ。口縁～内面体部横ナデ。	灰黄色2.5Y6/2	d-3類
123	39	16-1	土師器皿	7.0	1.7	99	80溝	外面底部、体部指押さえ後体～底部ナデ。口縁～内面体部横ナデ。	灰オリーブ5Y6/2	d-3類
124	39	16-1	土師器皿	7.8	1.7	100	80溝	外面底部、体部指押さえ後体～底部ナデ。口縁～内面体部横ナデ。体部外面の一部に籠目。	灰色5Y4/1	d-4類
125	39		土師器皿	(7.5)	1.5	50	80溝	内面底部ナデ。外面指押さえ後体～底部ナデ。口縁～内面体部横ナデ。造り粗い。	灰黄色2.5Y6/2	d-4類
126	39	16-1	土師器皿	7.8	1.8	100	80溝	外面底部、体部指押さえ後体～底部ナデ。口縁～内面体部横ナデ。	灰オリーブ5Y6/2	d-1類
127	39	16-1	土師器皿	9.2	2.1	100	80溝	内面底部ナデ。外面指押さえ後体～底部ナデ。口縁～内面体部横ナデ。	灰黄色2.5Y7/2	D-1類

遺物番号	挿図	図版	器種	口径 [cm]	器高 [cm]	残存率 [%]	出土遺構・層	調整・特徴	主な外面の色調	備考
128	39	16-1	土師器皿	9.3	1.9	95	80溝	内面底部ナデ。外面指押さえ後体～底部ナデ。口縁～内面体部横ナデ。	浅黄色2.5Y6/2	D-1類
129	39	16-1	土師器皿	9.3	1.9	95	80溝	内面底部ナデ。外面指押さえ後体～底部ナデ。口縁～内面体部横ナデ。	灰黄色2.5Y7/2	D-1類
130	39	16-1	土師器皿	10.2	2.0	100	80溝	内面底部ナデ。外面指押さえ。口縁～内面体部横ナデ。歪み大きい。	灰黄褐色10YR5/2	D-1類
131	39		土師器皿	10.6	2.1	100	80溝	内面底部ナデ。外面弱い指押さえ後体～底部ナデ。口縁～内面体部横ナデ。内面に煤付着。	灰黄色2.5Y6/2	E類 灯明皿
132	39	16-1	土師器皿	9.9	2.4	95	80溝	外面底部、体部極弱い指押さえ後体～底部ナデ。口縁～内面体部横ナデ。内面底部ナデ。	黄灰色2.5Y6/1	F類
133	39		土師器皿	10.2	2.3	70	80溝	外面底部、体部極弱い指押さえ後体～底部ナデ。口縁～内面体部横ナデ。内面底部ナデ。内面煤付着。	にぶい黄橙色10YR7/3	F類 灯明皿
134	39		土師器皿	(10.5)	2.5	40	80溝	外面底部、体部極弱い指押さえ後体～底部ナデ。口縁～内面体部横ナデ。内面底部ナデ。	にぶい黄色2.5Y6/3	F類。木簡「西方源三上」と近接して出土。
135	39	16-1	土師器皿	10.6	2.2	100	80溝	外面底部、体部極弱い指押さえ後体～底部ナデ。口縁～内面体部横ナデ。内面底部ナデ。	褐灰色10YR4/1	F類
136	39		土師器皿	(10.5)	1.9	40	80溝	外面底部、体部極弱い指押さえ後体～底部ナデ。口縁～内面体部横ナデ。内面底部ナデ。	灰黄色2.5Y6/2	F類
137	39	16-1	土師器皿	9.1	2.1	100	80溝	内面底部ナデ。外面指押さえ後体～底部ナデ。口縁～内面体部横ナデ。	灰白色5Y7/1	d-1類
138	39		土師器皿	11.0	2.3	99	80溝	外面底部、体部極弱い指押さえ後底部ナデ。内外面口縁～体部横ナデ。	灰黄色2.5Y6/2	E類
139	39	16-1	土師器皿	14.2	2.9	90	80溝	外面体～底部指押さえ後体部ナデ。口縁～内面体部横ナデ。内面底部ナデ。造り粗い。	にぶい黄橙色10YR7/2	京都産模か。
140	39		瓦器椀	10.7	2.6	75	80溝	外面底部指押さえ。内外面ナデ。口縁～内面体部上位横ナデ。口縁部まで内面の色調(灰色N4/0)。見込みに渦巻状暗文。	灰白色2.5Y8/1	和泉型IV-4か。
141	39		瓦器椀	(12.0)	(2.5)	25	80溝	外面ナデ。口縁部横ナデ。輪状暗文。	灰色N5/0	和泉型IV-4
142	39	2-1 13-2	瀬戸焼 灰釉皿	9.0	2.4	99	80溝	回転ナデ。内面～口縁部施釉。底部糸切り。	オリーブ灰色5Y6/3	
143	39	2-1	瀬戸焼 筒型香炉	(8.0)	(3.2)	5	80溝	回転ナデ。口縁端部面取り。外面～内面体部上位まで施釉。割れ目に漆継ぎの痕あり。	オリーブ黄色2.5Y6/3	
144	39	2-1	瀬戸焼 平椀	(16.0)	(4.0)	U5	80溝	回転ナデ。口縁～体部全面施釉。	オリーブ黄色5Y6/4	
145	39		青磁椀	(15.0)	(3.9)	U5	80溝	回転ナデ。口縁～体部全面施釉。外面に鎗連弁を片切彫り。	オリーブ灰色2.5GY6/1	龍泉窯系B-1'類
146	39	13-2	備前焼播鉢	28.0	10.7	50	80溝	回転ナデ。口縁部に自然釉付着。すり目(2本/cm)。底部は意図的に打ち揺れている。底部中心に煤付着。外面上位に縦方向に刷毛が入る。	にぶい赤褐色5YR4/3	IV-A
147	39	13-2	瓦質羽釜	(25.0)	(7.5)	U5	80溝	体部内面横方向にハケ。口縁部、罅部横ナデ。口縁部に凹線二条弱く入る。不定に、ヘラで二条の沈線入る。	灰色N4/0	河内I型
148	39	14	瓦質火鉢	(35.0)	(4.0)	U5	80溝	内面横方向のナデ。外面口縁端部面取り。外面凸帯貼り付け。雲文を押し捺。	灰色N4/0	浅鉢V
149	39	14	瓦質火鉢	(29.6)	(10.7)	10	80溝	内外面、横ナデの後、横方向の3mm幅のヘラミガキ。底部離れ砂。内外面とも剥離激しい。	灰色N5/0	浅鉢無足
150	39	14	瓦質火鉢	(30.6)	(9.0)	U5	80溝	外面体部縦方向の3mm幅のヘラミガキ。内面横ナデの後下位に横方向のヘラミガキ。	灰色N5/0	浅鉢IIか。
151	39	14	瓦質火鉢	(45.5)	(7.5)	U5	80溝	内面底部ナデ。内外面体部横ナデ。足部貼り付け。	暗灰色N3/0	浅鉢V
152	39	13-2	円形土製品	径8.5	4.4	80	80溝	椀に粘土を巻いて成形か。ナデ。	灰黄色2.5Y7/2	紡錘車か土鉢か。
153	40		土師器皿	7.7	1.9	90	80溝(上層)	内面底部ナデ。外面指押さえ後体～底部ナデ。口縁～内面体部横ナデ。	灰オリーブ5Y6/2	d-1類
154	40		土師器皿	8.2	1.9	55	80溝(上層)	内面底部ナデ。外面指押さえ後体～底部ナデ。口縁～内面体部横ナデ。	灰黄色2.5Y5/2	d-2類
155	40		土師器皿	7.9	1.7	100	80溝(上層)	内面底部ナデ。外面指押さえ後体～底部ナデ。口縁～内面体部横ナデ。	灰オリーブ5Y6/2	d-1類
156	40		土師器皿	9.9	2.2	90	80溝(上層)	内面底部ナデ。外面指押さえ後体～底部ナデ。口縁～内面体部横ナデ。造り粗い。	灰白色5Y7/2	D-1類
157	40		土師器皿	(8.0)	(1.5)	20	80溝(上層)	外面底部ナデ。口縁部～内面横ナデ。	灰黄色2.5Y7/2	
158	40		土師器皿	8.9	1.4	100	80溝(槽)	内面底部ナデ。外面底部指押さえ後ナデ。口縁～体部横ナデ。	灰黄色2.5Y7/2	b類か。
159	40	13-2	瓦器椀	(10.9)	(2.4)	30	80溝(上層)	見込みに2mm幅の渦巻状の暗文。口縁部横ナデ、ほかはナデ。	灰白色5Y7/1	和泉型IV-4
160	40	15-1	瓦質羽釜	(15.5)	(4.2)	U5	80溝(中層)	横ナデ。罅下まで煤付着。	灰黄色2.5Y7/1	摂津E型か。
161	40		瓦質羽釜	(27.0)	(6.1)	U5	80溝(下層)	摩滅のため詳細不明。ナデか。内外面に煤付着。	黒色N2/0	摂津E型か。
162	40	15-1	須臾器練鉢	(28.4)	(6.0)	U5	80溝(中層)	回転ナデ。口縁端部自然釉付着。	灰色5Y5/1	IV-A 片口
163	40		瓦質播鉢	(31.0)	(7.6)	U5	80溝(下層)	内面横ナデ。すり目(4～5本/cm)。外面体部横ハケ後ヘラケズリ。	灰色N4/0	
167	41	16-2	土師器皿	7.7	1.4	80	80溝(最下層)	内面底部ナデ。外面底部極弱い指押さえ後ナデ。内外面口縁～体部横ナデ。	灰白色5Y7/1	e類
168	41	16-2	土師器皿	7.6	1.5	100	80溝(最下層)	内面底部ナデ。外面底部極弱い指押さえ後ナデ。内外面口縁～体部横ナデ。歪み大きい。	灰オリーブ5Y6/2	e類
169	41	16-2	土師器皿	7.3	1.3	95	80溝(最下層)	内面底部ナデ。外面底部指押さえ後ナデ。内外面口縁～体部横ナデ。	灰オリーブ5Y6/2	e類
170	41	16-2	土師器皿	7.6	1.0	100	80溝(最下層)	外面体部上位～内面体部横ナデ。ほかはナデ。	灰白色5Y6/1	e類
171	41	16-2	土師器皿	7.7	1.3	80	80溝(最下層)	内面底部ナデ。外面指押さえ後体～底部ナデ。外面体部上位～内面体部横ナデ。	灰白色5Y7/1	e類(口縁部外反)
172	41		土師器皿	(8.4)	1.3	70	80溝(最下層)	内面底部ナデ。外面底部極弱い指押さえ後底部ナデ。口縁～体部横ナデ。	灰オリーブ色5Y6/2	
173	41	16-2	土師器皿	10.1	2.5	100	80溝(最下層)	外面弱い指押さえ後ナデ。外面体部上位～内面体部横ナデ。	灰黄色2.5Y7/2	E類
174	41		土師器皿	(11.5)	(1.8)	20	80溝(最下層)	外面弱い指押さえ後ナデ。外面体部上位～内面体部横ナデ。	浅黄色2.5Y7/3	E類
175	41	16-2	土師器皿	10.9	2.5	100	80溝(最下層)	外面底部、体部極弱い指押さえ後底部ナデ。外面体部上位～内面体部横ナデ。	灰黄色2.5Y6/2	E類
176	41	16-2	土師器皿	10.5	2.4	80	80溝(最下層)	外面底部、体部極弱い指押さえ後底部ナデ。外面体部上位～内面体部横ナデ。	灰黄色2.5Y7/2	E類
177	41	16-2	土師器皿	10.2	2.3	100	80溝(最下層)	外面底部、体部極弱い指押さえ後底部ナデ。口縁～内面体部横ナデ。歪み大きい。	灰黄色2.5Y7/2	E類
178	41	16-2	土師器皿	10.9	2.0	100	80溝(最下層)	外面底部、体部極弱い指押さえ後底部ナデ。口縁～内面体部横ナデ。歪み大きい。	灰黄色2.5Y7/2	E類(口縁部外反)
179	41	15-2	瓦器椀	10.3	2.9	50	80溝(最下層)	外面底部指押さえ。内外面ナデ。口縁～内面体部上位横ナデ。見込みに3mm幅の渦巻状のヘラミガキ。	灰色N5/0	和泉型IV-4

遺物番号	挿図	図版	器種	口径【cm】	器高【cm】	残存率【%】	出土遺構・層	調整・特徴	主な外面の色調	備考
180	41	15-2	瓦器碗	10.3	2.8	100	80溝(最下層)	外面底部指押さへ。内外面ナデ。口縁～内面体部上位横ナデ。見込みに2mm幅の渦巻状の暗文。外面底部に成形時の痕が残る。	灰色N4/0	和泉型Ⅳ-4
181	41		瓦器碗	(10.5)	2.7	60	80溝(最下層)	外面底部指押さへ。内外面ナデ。口縁～内面体部上位横ナデ。内面に連結輪状暗文。	灰色N5/0	和泉型Ⅳ-4
182	41	2-1	青磁碗	(5.0)	5.8	25	80溝(最下層)	回転ナデ。外面に鎬連弁を片切り削。全面施釉。割れ目に漆継ぎの痕あり。	オリーブ灰色10Y6/2	龍泉窯系 B-II-a類
183	41		須恵器鉢鉢	—	[3.4]	U5	80溝(最下層)	回転ナデ。	灰白色5Y7/1	東播系Ⅰ-2
184	41	15-2	須恵器鉢鉢	(28.9)	[3.5]	U5	80溝(最下層)	回転ナデ。口縁端部自然袖付着。	青灰色5PB6/1	東播系Ⅱ-2
185	41		瓦質挿鉢	(28.0)	[6.3]	U5	80溝(最下層)	内面ナデ。口縁部横ナデ。すり目(6～7本/cm)。外面体部指押さへの痕残る。口縁部横ナデ。体部横ハケ。	灰白色5Y8/2	
186	41		備前焼挿鉢	(14.0)	[6.0]	U5	80溝(最下層)	回転ナデ。すり目(4本/cm)。内面に自然袖付着。	褐色灰色10YR4/1	
187	41	15-2	常滑焼壺	(31.2)	[12.0]	U5	80溝(最下層)	回転ナデ。口縁部、外面体部自然袖付着。	にぶい褐色7.5YR5/4	7型式
267	49		瓦器碗	(4.5)	[1.0]	U5	83土坑	底部のみ。全体ナデ。	灰白色5Y8/1	
268	49		土師器皿	(8.0)	0.9	30	123ピット	内外面底部ナデ。口縁～体部横ナデ。	灰黄色2.5Y6/2	e類
271	50	15-3	土師器皿	10.3	2.7	80	第5'層	外面底部、体部極弱い指押さへ後底部ナデ。外面体部上位～内面体部横ナデ。	浅黄色2.5Y7/3	F類
272	50		土師器皿	(11.0)	2.0	35	第5'層	外面底部、体部極弱い指押さへ後体～底部ナデ。口縁～内面体部横ナデ。内面底部ナデ。	灰黄色2.5Y6/2	F類
273	50	15-3	常滑焼壺	(46.3)	[9.1]	U5	第5'層	回転ナデ。口縁端部自然袖付着。	褐色灰色7.5Y5/2	6b型式
276	52		瓦器碗	(1.6)	[1.0]	U5	155土坑	底部のみ。全体ナデ。	灰色N4/0	和泉型Ⅲ
277	52		土師器皿	(10.2)	(2.6)	20	155土坑	内外面底部ナデ。口縁～体部横ナデ。	にぶい黄褐色10YR6/3	碗か。
278	52		常滑焼壺	(35.0)	[1.9]	U5	155土坑	回転ナデ。口縁端部自然袖付着。	暗褐色7.5YR3/3	6A型式
283		2-1	青磁碗	[2.3]	—	U5	16井戸	施釉。	オリーブ灰色2.5GY5/1	龍泉窯系
284		2-1	白磁	[3.6]	—	U5	第2層	施釉。	灰色7.5Y7/1	壺か。
285		2-1	青磁碗	[5.7]	—	U5	第2層	施釉。見込みに印花文。	オリーブ灰色2.5GY6/1	
286		2-1	白磁壺	[6.3]	—	U5	20土坑	施釉。	灰白色5Y7/1	

②瓦 () は復元。[] は残高・長、U5は5%以下。

遺物番号	挿図	図版	器種	長さ【cm】	幅【cm】	残存率【%】	出土遺構・層	調整・特徴	主な外面の色調	備考
9	11	11-1	軒平瓦	(8.0)	[4.2]	10	第2層	瓦当面離れ砂。凹面体部横方向のヘラケズリ。全体にナデにて仕上げる。	灰白色5Y7/1	唐草文
16	14		丸瓦	15.8	14.2	20	14窪地	凹面に布目残る。凸面に若干縄目の痕跡残る。全体にナデにて仕上げる。	灰色N4/0	掛瓦
17	14	11-3	軒平瓦	(3.1)	[3.2]	U5	14窪地	瓦当面から頸部下面にかけて離れ砂。頸部の裏側はヘラケズリ。全体にナデにて仕上げる。	暗灰色N3/0	唐草文
93	30		丸瓦	30.9	13.2	100	14溝(下層)	凸面縄目若干残る。凹面布目明瞭に残る。各端部ヘラによる面取り。全体をナデにて仕上げる。	灰色7.5Y6/1	
115	33	13-1	軒平瓦	(5.1)	[7.3]	U5	第4層	凹凸面共離れ砂。ナデにて仕上げる。	灰色N5/0	唐草文
164	40	14	道具瓦	(16.8)	[12.5]	—	80溝(南側溝)	各部面取り。全体にナデにて仕上げる。	灰色N5/0	上～下層 唐草文か。
165	40	14	道具瓦	(20.7)	[7.3]	—	80溝(南側溝)	各部面取り。全体にナデにて仕上げる。	灰色N5/0	上～下層
166	40	13-2	軒丸瓦	(6.0)	[3.2]	U5	80溝(南側溝)	瓦当面に離れ砂。全体にナデにて仕上げる。	灰色N4/0	上～下層 巴文

③木製品 () は復元。[] は最大残存長。

遺物番号	挿図	図版	器種	長さ【cm】	幅【cm】	厚み【cm】	出土遺構・層	特徴	樹種	備考
41	23		桶底板	48.0	48.0	1.5	19埋桶	7枚一組。木釘にてとめている。	スギ	19埋桶の一部。
42	24	20-1	桶側板	[70.9]	7.0	1.0	19埋桶	中央部に直径5.0cm、導水管竹筒を通す為の孔あり。下端部尖り気味に加工。下端部、中央部に箍の痕あり。側面に加工痕あり。上部を欠損。	スギ	
43	24	20-1	桶側板	[65.6]	6.0	1.9	19埋桶	下端部尖り気味に加工。側面に加工痕あり。下端部に箍の痕あり。上部を欠損。	スギ	
62	25		曲物底板	[13.5]	[7.1]	0.6	60溝		ヒノキ	
63	25	19	加工材	[15.7]	[7.5]	1.1	60溝	コ字状に加工。各面を切断。	スギ	多角形の部材の一部か。
64	25	19	加工材	8.4	4.6	1.2	60溝	コ字状に加工。各面を切断。	スギ	鼻線を竹管をとめる板に加工転用か。
99	31	19	下駄	[20.6]	[8.8]	2.4	50溝	足先部欠損。歯部欠落。	ミズギ	露卯下駄。
116	35	20-2								
117	35	20-2								
118	35	20-2	礎板	19.2	13.0	6.0	87土坑	板材を4枚に割って使用。	コウヤマキ	法量は4枚重ね復元。
119	35	20-2								
189	42		木筒状木製品	13.3	1.9	0.3	80溝	上端部を削る。上部に孔あり。若干粒状の付着物あり。	スギ	
190	42		火付け棒	[10.1]	1.4	0.8	80溝(下層)	先端部炭化。上部欠損。	スギ	
191	42		加工材	[10.5]	2.4	1.7	80溝	上部欠損。下端部尖るように加工。	ケヤキ	
192	42		棒状木製品	[49.0]	2.8	1.9	80溝	上部欠損。下端部尖るように加工。摩擦。	スギ	
193	42		加工材	[20.4]	5.1	0.5	80溝	上端部一部欠損。コ字状に加工していたか。下部欠損。	スギ	
194	42		板状木製品	19.7	2.2	0.9	80溝	上端部に加工痕あり。両端部摩擦。	スギ	
195	42		棒状木製品	[17.6]	1.5	1.2	80溝	上部欠損。	スギ	角材か。
196	42		板状木製品	28.6	[5.1]	0.8	80溝	中央部下に横方向の切り込みあり。上部に貫通しない孔あり。山形に切り込みあり。下端部に刃物による切り込みが入っているが、引きちぎっている。	スギ	
197	42		板状木製品	[26.3]	3.9	0.8	80溝		スギ	草履芯か。
198	42		板状木製品	[33.7]	4.9	0.8	80溝	上部側端部に溝状のへこみ、4箇所あり。両端部欠損。	スギ	建築部材か。
199	42		板状木製品	28.9	4.1	1.0	80溝	表面下部に斜めに入る刃物による傷跡あり。	スギ	桶底板の部材か。まな板に転用。
200	42		棒状木製品	[35.0]	2.3	1.5	80溝	上部欠損。	スギ	角材か。
201	42	19	糸巻き 椀木 支木	21.9 [8.5]	2.4 2.5	2.4 1.1	80溝	椀木と支木を木釘にてとめている。	スギ	図は復元。
202	42	20-3	板状木製品	33.9	6.4	1.3	80溝	L字状に加工。長側面に木釘3箇所、打ち込まれる。表面に刃物傷あり。	スギ	経巻具の転用か。まな板に転用。
203	42	19	円盤状木製品	7.4	7.4	2.2	80溝	縁部を細かく面取り加工。中央に小孔あり。	スギ	紡錘車か。
204	42		加工材	8.7	5.7	4.3	80溝	端部をL字状に加工。	スギ	
212	43	20-3	棒状木製品	66.0	2.6	2.5	80溝	両端部を突起させる。突起部に貫通する小孔あり。中央に幅約0.8mm、深さ約1.2cmの溝が彫りこまれている。	ヒノキ	箆棒か。

遺物番号	挿区	図版	器種	長さ【cm】	幅【cm】	厚み【cm】	出土遺構・層	特徴	樹種	備考
213	43		板状木製品	[47.3]	11.7	0.9	80溝	角を丸く加工。上部と下部の一部を欠損。	スギ	
214	44		加工材	4.7	5.1	2.7	80溝(上層)		スギ	
215	44		綜絊	(23.9)	2.4	2.0	80溝(上層)	丁寧な加工。全体に黒色漆。中央に不規則な小孔が10箇所あり。孔には木釘が打たれている。下部欠落。	スギ	
216	44		板状木製品	(15.8)	2.7	0.4	80溝(下層)	半分以上欠損か。	スギ	籠か。
218	44	21-2	壁板	[82.6]	9.4	1.4	80溝	中央に貫通する直径5mmの釘穴あり。両端部欠損。	ヒノキ	柵に転用。
219	44	21-2	棒状木製品	[104.3]	7.1	2.9	80溝	中央に幅約2cm、深さ約0.5mmの溝が粗く彫りこまれている。中央と両端部をコ字やL字状に加工。両端部欠損。	スギ	棧の一部か。柵に転用。
220	44		棒状木製品	19.5	0.8	0.4	80溝(下層)	扁平に整形。両端が尖る。下部摩滅。	スギ	箸か。
221	44		箸	[12.9]	0.6	1.0	80溝(下層)	先端尖る。両端部欠損。	スギ	
222	44		箸	10.2	0.5	[0.4]	80溝(下層)	下部欠損。	スギ	
223	44		板状木製品	14.0	3.0	0.5	80溝(下層)	両端部欠損。	スギ	
224	44	19	板状木製品	10.7	10.2	0.5	80溝(下層)	中央両側に切り込みあり。一部欠損。	スギ	
225	44		加工材	4.5	(7.6)	3.0	80溝(下層)		スギ	
226	44		板状木製品	[16.9]	(5.6)	0.5	80溝(下層)	端部は丸みを帯びる。	スギ	草履芯の一部か。
227	44		板状木製品	38.7	7.4	0.4	80溝(下層)	ひずみ大きい。上部欠損。	スギ	
228	45		箸	[16.7]	0.6	0.6	80溝(最下層)	下端部尖る。上部欠損。	ヒノキ	
229	45		箸	[15.7]	0.7	0.8	80溝(最下層)	下端部尖る。上部欠損。	ヒノキ	
230	45		箸	[16.8]	0.6	0.6	80溝(最下層)	両端部欠損。	スギ	
231	45		火付け棒	31.2	1.1	1.2	80溝(最下層)	先端部炭化。	ヒノキ	
232	45		棒状木製品	26.6	1.5	1.0	80溝(最下層)	上部段状に加工。欠損。	スギ	織機の一部か。
233	45		棒状木製品	[28.8]	[1.2]	[1.1]	80溝(最下層)	両端部欠損。棒状を呈するが、本来もう少し厚いものか。	スギ	
234	45		棒状木製品	[36.5]	3.0	2.8	80溝(最下層)	下部欠落。上端部摩滅。中央に小孔あり。	スギ	
235	45		加工材	12.8	2.8	2.7	80溝(最下層)	2箇所焦げ、少し窪む。	ヒノキ	
236	45		棒状木製品	14.6	2.0	1.2	80溝(最下層)	上部先端、段状に加工。中央に貫通しない小孔あり。黒色漆一部残る。下部欠損。中央に、切り込みあり。	スギ	織機の一部か。
237	45		杭材	35.7	3.9	3.9	80溝(最下層)	黒木のまま使用。先端を尖るように加工。	コナラ亜属	
238	45		棒状木製品	[16.5]	2.7	1.4	80溝(最下層)	両端を面取り。	スギ	
239	45		荷札状木製品	15.0	2.0	0.5	80溝(最下層)	下端部を尖り気味に加工。摩滅。	スギ	
240	45		糸巻 支木	[8.7]	3.8	1.1	80溝(最下層)	側部を粗雑に削る。半分以上欠損。	コウヤマキ	
241	45		加工材	6.5	2.6	0.8	80溝(最下層)	体部がやや反る。	スギ	
242	45		加工材	[9.2]	1.9	1.9	80溝(最下層)		ケヤキ	
243	45		栓	4.6	3.0	2.0	80溝(最下層)		スギ	
244	45		棒状木製品	[23.4]	1.7	1.3	80溝(最下層)	荒く側面を削る上部先端に突起があるが、欠損している。	スギ	
245	45		火付け棒	[16.5]	0.8	0.6	80溝(最下層)	下端部炭化。上部欠損。	マツ科	
246	45		板状木製品	[11.5]	1.1	0.3	80溝(最下層)	下部欠落。上端部丸く加工。	ヒノキ	
247	45		棒状木製品	30.6	1.8	1.0	80溝(最下層)	下端部など、部分的に欠損。	スギ	角材か。
248	45		棒状木製品	[26.4]	2.3	0.9	80溝(最下層)	上部欠落。下端部丸く加工。	スギ	
249	46	21-1	曲物底板	[11.6]	5.4	0.9	80溝(最下層)	側部中央に木釘が打たれている。片面黒色漆を塗布する。側面に面を整える加工の傷あり。裏面剥離あり。半分程度欠損。	スギ	
250	46	21-1	曲物底板	13.3	[6.2]	0.65	80溝(最下層)	半分程度欠損。	ヒノキ	
251	46		曲物底板	[17.1]	[5.0]	0.6	80溝(最下層)	大半が欠損。厚みがあるので桶底か。	ヒノキ	
252	46		板状木製品	25.4	[3.4]	0.2	80溝(最下層)	両側の側面部欠損。	ヒノキ	折敷底か。
253	46		草履芯	[8.3]	[4.7]	0.3	80溝(最下層)	表裏に斜め方向の加工痕あり。先端に小孔あり。	ヒノキ	
254	46	19	草履芯	16.4	7.6	0.5	80溝(最下層)	中央で縦に2つに別れる。中央側面両側に切り込みあり。上部先端に小孔2箇所、下部両側に小孔2箇所あり。	スギ	
255	46	19	下駄	22.5	10.6	4.2	80溝(最下層)	使用による指圧の窪みあり。	スギ	連歯下駄。
256	46	19	加工材	[15.7]	[5.4]	2.5	80溝(最下層)	L字状に加工。両端を切断。	スギ	鼻縁の加工転用か。
257	46		板状木製品	[35.3]	6.8	0.8	80溝(最下層)	上部欠落。下端部丸く加工。	スギ	建築部材か。
258	46		板状木製品	29.7	2.8	0.8	80溝(最下層)	表面に刃物傷あり。大半が欠損か。	スギ	折敷底か。まな板に転用。
259	46	21-1	曲物底板	25.0	—	0.7	80溝(最下層)	表面にまな板に転用の刃物傷あり。裏面に付着物あり。	コウヤマキ	
260	47	19	加工材	[25.5]	4.7	1.5	80溝(最下層)	方形の窓が3箇所あり。	コナラ亜属	大足の一部か。
261	47	18-1	木筒	[20.0]	2.7	0・8	80溝(最下層)	上端部面取り。表裏面に加工痕あり。下部欠損。	ヒノキ	「田八郎小麦十九把又ハ口(幸カ)カラ六把」
262	47	18-2	木筒	7.0	1.9	0.4	80溝(最下層)	下端部を尖り気味に加工。上端部は切目をつけて折り取る。表裏面に加工痕あり。	スギ	「西方源三上」
263	47	20-3	棒状木製品	[26.1]	1.5	1.2	80溝(最下層)	貫通しない孔が13箇所ある。両先端は段上に加工。先端には貫通する孔が慮方にある。孔は、材の中央を、ほぼ直列に並ぶ。一部片端を欠損。	スギ	粗箴か。
266	47	19	毬	—	4.8	6.0	80溝(最下層)	両端を細かく削る。一部欠損。3つに割れている。	カキノキ	毬杖の毬。
269	49		棒状木製品	[85.3]	2.9	2.5	83土坑	貫通する小孔2箇所あり。両端部欠損。	スギ	
270	49		板状木製品	[21.3]	3.5	0.5	83土坑	両端部欠損。	スギ	
274	50		棒状木製品	[13.8]	0.9	0.7	第5'層	両端部摩滅。	スギ	箸か。
275	50		曲物底板	[26.0]	[8.3]	5.6	第5'層	約2mm幅の直線的な窪みあり。大半が欠損。	ヒノキ	
279	52		荷札状木製品	14.0	2.0	0.3	150ピット	先端を尖り気味に加工。上部は切断。	スギ	荷札か、籠か、杓柄の転用か。
280	52		荷札状木製品	[12.2]	[1.2]	0.3	150ピット	先端を尖り気味に加工。上部欠損。	スギ	荷札か、籠か、杓柄か。
281	52	19	加工材	11.7	12.0	3.0	150ピット	コ字状に加工。各面を切断。	スギ	鼻縁の加工転用か。
282	52		加工材	4.3	2.55	2.0	157土坑		ヒノキ	
287		21-2	壁板	[99.0]	[10.6]	0.8	80溝	上端部面取り、下端部欠損	スギ	柵に転用。
288		21-2	壁板	[89.0]	5.4	0.6	80溝	両端部欠損	スギ	柵に転用。
289		21-2	壁板	[81.7]	9.2	0.8	80溝	下端部面取り、上端部欠損	スギ	柵に転用。
290		21-2	壁板	[66.0]	7.2	0.7	80溝	両端部欠損	スギ	柵に転用。
291		21-2	壁板	[62.2]	9.0	1.2	80溝	両端部欠損	スギ	柵に転用。
292		21-2	壁板	[61.5]	[10.3]	1.2	80溝	上端部面取り。下部半分程度欠損。下端部わずかに面取り部残る。中央に1箇所、上端部に左右に2箇所の縦長(1.5×0.8)ほどの孔あり。	スギ	柵に転用。

④漆器類 図版の太字はカラー図版。()は復元。[]は最大残存高・長。斜体は残長。

遺物番号	挿図	図版	器種	口径【cm】	底径【cm】	器高【cm】	出土遺構・層	特徴	樹種	備考
47	25	2-2	漆器椀	—	8.0	[3.2]	19埋桶	内外面黒色漆の地に赤色漆で丸窓に笹の文様を内外に描く。	トチノキ	
48	25	2-2	漆器椀	[12.0]	6.0	[4.0]	19埋桶	外面黒色漆、内面赤色漆。外面丸窓に三の字状の文様を赤色漆で描く。外面高台裏に笹の文様が木地に彫られている。	トチノキ	
205	43		漆器	—	—	[3.9]	80溝	内外面黒色漆。外面に赤色漆で文様(不明)を描く。	トチノキ	
206	43	17	漆器椀	—	—	[4.8]	80溝	内外面黒色漆。内面に赤色漆で草文を描く。	トチノキ	
207	43	17	漆器椀	—	—	[11.4]	80溝	内外面黒色漆。見込みに赤色漆で文様(草文)を描く。	トチノキ	細片
208	43	17	漆器椀	—	(8.0)	[0.8]	80溝	内外面黒色漆。見込みに赤色漆で文様(不明)を描く。	トチノキ	
209	43	17	漆器皿	(9.2)	1.3	(7.0)	80溝	内外面黒色漆。見込みに草花文を描く。	トチノキ	
210	43	17	漆器椀	—	(8.2)	[6.4]	80溝(最下層)	内外面黒色漆。高台畳付は木地露出。内外面に赤色漆で草木文を描く。	トチノキ	
211	43	17	漆器椀	—	(9.0)	[3.3]	80溝	内外面黒色漆。高台畳付は木地露出。外面と見込みに赤色漆で草木文を描く。	トチノキ	
217	44	17	漆器椀	—	(5.5)	[2.8]	80溝	内面赤色漆。外面黒色漆。	コナラ亜属	細片
264	47		漆器	—	—	[4.2]	80溝(最下層)	内外面黒色漆。外面に赤色漆で扇文を描く。内面付着物多く文様は不明。	ケヤキ	
265	47	17	漆器椀	—	6.7	[3.7]	80溝(最下層)	内外面黒色漆。外面の高台端部と底部の中心部を塗り残す。内面州浜?、外面扇?を赤色漆で描く。見込みに付着物あり。	ケヤキ	

⑤金属器・石器・鈇滓類 ()は最大残存長。

遺物番号	挿図	図版	器種	長さ【cm】	幅【cm】	厚み【cm】	出土遺構・層	特徴	備考
1	9		銃弾	7.7	1.2	0.15	廢土		記念品
29	18	11-4	煙管	5.4	0.8	0.1	16井戸		
30	18	11-4	鞘尻	[2.6]	3.0	0.1	16井戸	中空、2箇所小孔有。	
188	41		砥石	6.8	3.9	1.2	80溝(最下層)		
293		22-2	鈇滓	4.4	—	—	33ビット		
294		22-2	鈇滓	4.6	—	—	第2層		
295		22-2	鈇滓	3.2	—	—	第2層		
296		22-2	鈇滓	7.7	—	—	第3層		
297		22-2	鈇滓	5.4	—	—	150ビット		
298		22-2	鈇滓	9.5	—	—	80溝(最下層)		
299		22-2	鈇滓	4.8	—	—	33ビット		
300		22-2	鈇滓	6.9	—	—	第5層		

⑥柱材

遺構番号	種類	挿図	図版	出土遺構・層	樹種
70	柱穴			第4面	スギ
89	柱穴			第4-2面	スギ
96	柱穴			第4-2面	ハンノキ
99	柱穴			第4-2面	トチノキ
102	柱穴			第4-2面	ヤブツバキ
103	柱穴			第4-2面	ハンノキ
105	柱穴			第4-2面	コウヤマキ
106	柱穴	22-1		第4-2面	スギ

遺構番号	種類	挿図	図版	出土遺構・層	樹種
114	杭	48		第5面	ハンノキ
115	杭	48		第5面	スギ
118	杭	48		第5面	スギ
132	杭			第5面	スギ
133	杭	48	22-1	第5面	スギ
134	杭		22-1	第5面	スギ
135	杭			第5面	ケヤキ
148	杭			第5面	ケヤキ

観察表における分類は以下の著作によった。

森島康雄ほか「瓦器類」、立石堅志「奈良火鉢」、森田稔「中世須恵器」、中野晴久「常滑・渥美」、木戸雅寿「信楽」以上中世土器研究会編1995『概説中世の土器・陶磁器』真陽社に所収

菅原正明1988「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会

重根弘和「中世の備前焼」2005備前歴史フォーラム資料集『備前焼研究最前線』II～備前焼、その歴史、今まで何がわかって、何がわからないのか～備前市歴史民族資料館・備前市教育委員会

上田秀雄1982「14～16世紀の青磁器碗の分類について」『貿易陶磁器研究』No.2日本貿易陶磁器研究会

遺物出土遺構 一覽

遺物出土遺構 一覧 (1)

〔破片数〕

種類	器種	0層 攪乱	1層	2層	14窪地 【3面】	15溝 【3面】	16井戸 【3面】	17溝 【3面】	3層	14溝 〈上層〉 【4面】	14溝 〈下層〉 【4面】	14溝 〈最下層〉 【5面】	19埋桶 【4面】
瓦質土器 (中世)	瓦器椀・皿	2	6	23	2	4		1	40		1		
	羽釜	5	3	39	3	9	2		29		12		3
	甕		2	4	2				5		2	6	
	火鉢	5	2	13		5			5				
	鉢	4		7	1	4			2		1	2	
	播鉢	2	7	11	2	10	1		6		7		
	ミニ釜												
	ミニ羽釜			1									
	ミニ播鉢		1										
不明			3	2	6			2		2			
土師質土器 (中世)	土師器皿	21	24	78	11	97	7	2	241	2	7		20
	羽釜	2	6	8		6		3	10				
	鉢		1			1							
	土塊			1									
	甕			1					2				
	播鉢												
	土錘												
不明	1		8		1			6	1				
日本製陶磁器 (中世)	備前焼甕・壺	4	8	5		5	2		1				1
	備前焼播鉢	1	2	2	1	1							
	常滑焼甕・壺		2	32	3	3	3	3	12		3	1	1
	常滑焼鉢			2									
	信楽焼甕・壺								1				
	東播系甕・壺								3				
	東播系練鉢			4	4			1	9		1		
	須恵器不明								1				
	瀬戸・美濃		1	3									
	不明陶器												
不明													
中国製陶磁器 (中世)	青磁椀			3	1	1	2		2				
	白磁椀・皿			1									
	白磁壺												
	青花皿			1									
瓦 (中世)	丸瓦	3	9	23	10	4	3	1	6		4		
	平瓦	2	5	50	7	7	5	2	17		14	7	
	軒平瓦			1	1								
	軒丸瓦												
	道具瓦					1							
	不明			1									
その他 (古代以前)	須恵器甕	1		2			1		2				
	須恵器壺								1				
	須恵器杯身	1		2									
	須恵器杯蓋												
	須恵器椀	1											
	須恵器高杯												
	須恵器不明			1									
	土師器把手			1									
土師器高杯													
近世	唐津椀・皿	1	4	1			1						
	青磁染付						1						
	白磁												
	堺播鉢	1											
	信楽播鉢	1	1	1									
	染付	1											
不明陶磁器		6											
その他	鈺滓類			3					3				
	砥石												

遺物出土遺構 一覧(2)

〔破片数〕

種類	器種	20土坑 【4面】	22土坑 【4面】	25ピット 【4面】	30土坑 【4面】	33ピット 【4面】	35ピット 【4面】	37ピット 【4面】	50溝 【4面】	52土坑 【4面】	60溝 【4面】	61ピット 【4面】	64ピット 【4面】
瓦質土器 (中世)	瓦器椀・皿				3		1		1		7		1
	羽釜								1		5		
	甕								2		1		
	火鉢										2		
	鉢										1		
	播鉢								3		1		
	ミニ釜										1		
	ミニ羽釜												
	ミニ播鉢												
	不明												
土師質土器 (中世)	土師器皿	227	3	1					8	2	108	2	2
	羽釜	1											
	鉢												
	土塊												
	甕												
	播鉢												
	土錘												
	不明											1	
日本製陶磁器 (中世)	備前焼甕・壺										2		1
	備前焼播鉢										1		
	常滑焼甕・壺	1						6	3	1	3		
	常滑焼鉢												
	信楽焼甕・壺												
	東播系甕・壺												
	東播系練鉢								2		1		
	須恵器不明												
	瀬戸・美濃												
	不明陶器												
中国製陶磁器 (中世)	青磁椀												
	白磁椀・皿												
	白磁壺	1											
	青花皿												
瓦 (中世)	丸瓦								1		1		
	平瓦	1									1		
	軒平瓦												
	軒丸瓦												
	道具瓦										1		
不明													
その他 (古代以前)	須恵器甕												
	須恵器壺												
	須恵器杯身												
	須恵器杯蓋												
	須恵器椀												
	須恵器高杯												
	須恵器不明												
	土師器把手												
	土師器高杯												
近世	唐津椀・皿												
	青磁染付												
	白磁												
	堺播鉢												
	信楽播鉢												
	染付												
	不明陶磁器												
その他	鉢滓類						2						
	砥石												

遺物出土遺構 一覧 (3)

[破片数]

種類	器種	68ピット 【4面】	70ピット 【4面】	4層	87土坑 【4-2面】	94ピット 【4-2面】	4-2層	80溝 【5面】	80溝 〈上層〉 【5面】	80溝 〈中層〉 【5面】	80溝 〈下層〉 【5面】	80溝 〈最下層〉 【5面】	80溝 〈柵〉 【5面】
瓦質土器 (中世)	瓦器椀・皿	1		20	1			17	3	2	11	20	
	羽釜			11	2			9	1	1	6	4	
	甕			2				2		2	1		
	火鉢			1				9	1	1	2		
	鉢			5				4					
	播鉢			1				3			4	1	
	ミニ釜												
	ミニ羽釜												
	ミニ播鉢												
不明			2				2						
土師質土器 (中世)	土師器皿	7		111	7			193	40	6	45	165	3
	羽釜			4				1			3	7	
	鉢							2					
	土塊			4				2			1		
	甕							2				1	
	播鉢							2					
	土錘							1					
	不明			3				1	2				
日本製陶磁器 (中世)	備前焼甕・壺			5				3		1	2		
	備前焼播鉢							4	1			1	
	常滑焼甕・壺			4				12	1		8	12	
	常滑焼鉢												
	信楽焼甕・壺												
	東播系甕・壺												
	東播系練鉢			2				1		1	1	3	
	須恵器不明			1									
	瀬戸・美濃							2	1				
	不明陶器												
不明													
中国製陶磁器 (中世)	青磁椀							2				1	
	白磁椀・皿												
	白磁壺												
	青花皿												
瓦 (中世)	丸瓦		5	3				6			2	3	
	平瓦		8	9		1	6	8			2	2	
	軒平瓦			1									
	軒丸瓦							1					
	道具瓦		1	1			1	3					
	不明							3					
その他 (古代以前)	須恵器甕			1				1			1	1	
	須恵器壺												
	須恵器杯身			1							2	2	
	須恵器杯蓋			1									
	須恵器椀												
	須恵器高杯			1									
	須恵器不明							1			1		
	土師器把手												
土師器高杯													
近世	唐津椀・皿												
	青磁染付												
	白磁			1									
	堺播鉢												
	信楽播鉢												
	染付												
	不明陶磁器												
その他	鈹滓類											1	
	砥石										1	1	

遺物出土遺構 一覧(4)

〔破片数〕

種類	器種	83土坑 【5面】	123ピット 【5面】	149ピット 【5面】	5' 層	150ピット 【5-2面】	155土坑 【5-2面】	157土坑 【5-2面】	06-2 包含層
瓦質土器 (中世)	瓦器椀・皿	1			10	2	2		6
	羽釜				1			1	18
	甕								2
	火鉢								1
	鉢								
	播鉢								4
	ミニ釜								
	ミニ羽釜								
	ミニ播鉢								
	不明					1			
土師質土器 (中世)	土師器皿		2		44		3		40
	羽釜								
	鉢								
	土塊								
	甕								
	播鉢								
	土錘								
	不明	1			1				1
日本製陶磁器 (中世)	備前焼甕・壺								
	備前焼播鉢								
	常滑焼甕・壺				4		3		
	常滑焼鉢								
	信楽焼甕・壺								
	東播系甕・壺								
	東播系練鉢								1
	須恵器不明								
	瀬戸・美濃								
	不明陶器								
	不明								
中国製陶磁器 (中世)	青磁椀								
	白磁椀・皿								
	白磁壺								
	青花皿								
瓦 (中世)	丸瓦			2					
	平瓦								1
	軒平瓦								
	軒丸瓦								
	道具瓦								
	不明								
その他 (古代以前)	須恵器甕				1				
	須恵器壺						1		
	須恵器杯身								
	須恵器杯蓋								
	須恵器椀								
	須恵器高杯								
	須恵器不明				1				
	土師器把手								
土師器高杯				1					
近世	唐津椀・皿								
	青磁染付								
	白磁								1
	堺播鉢								
	信楽播鉢								
	染付								1
	不明陶磁器								
その他	鈎滓類				1	1			1
	砥石								

写真図版

図版1 06-1-1調査区 第1面(上) 第2面(下)

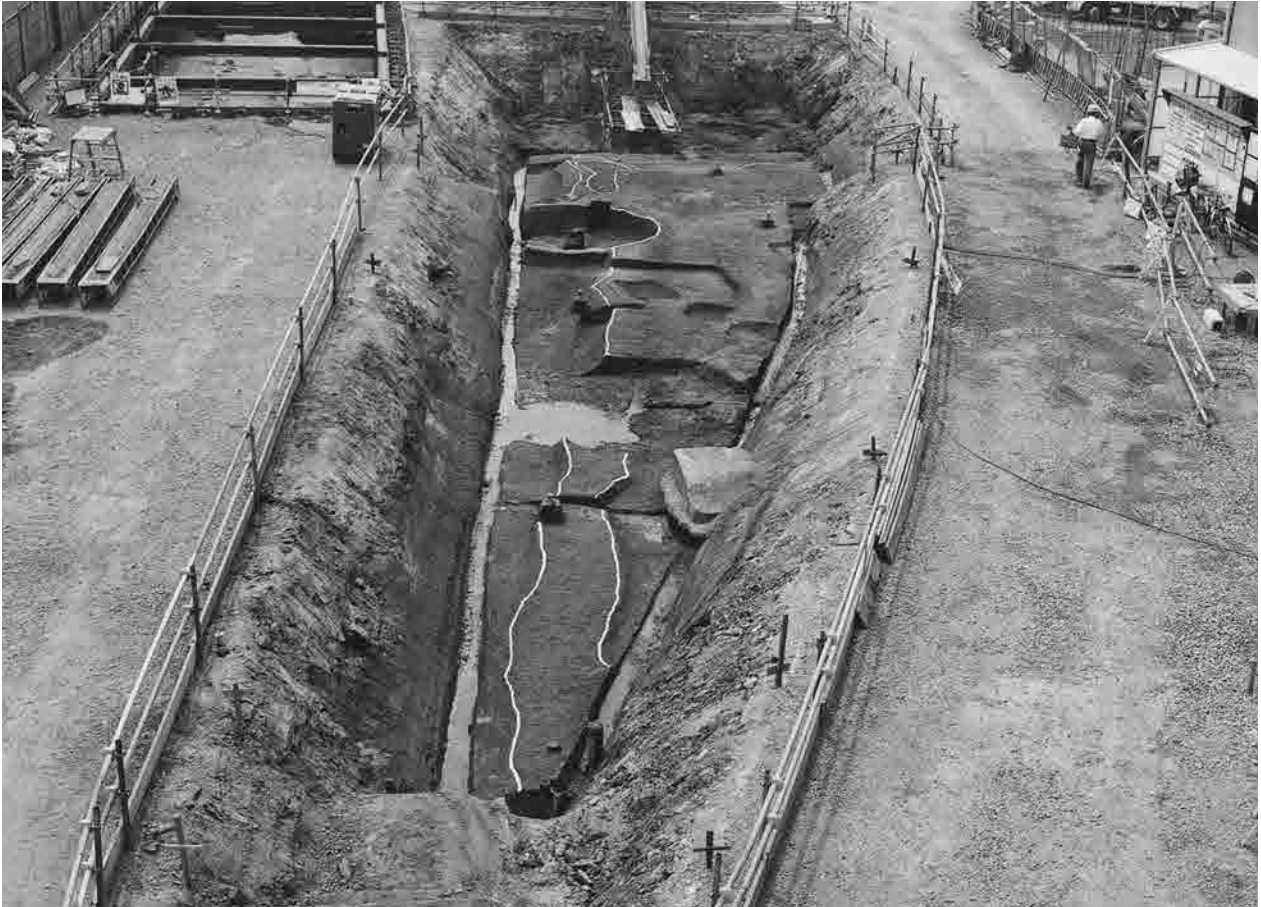


1. 第1面全景(西から)



2. 第2面全景(東から)

図版2 06-1-1調査区 第3面



1. 第3面全景（東から）



2. 第3面全景（西から）



1. 第4面全景（東から）

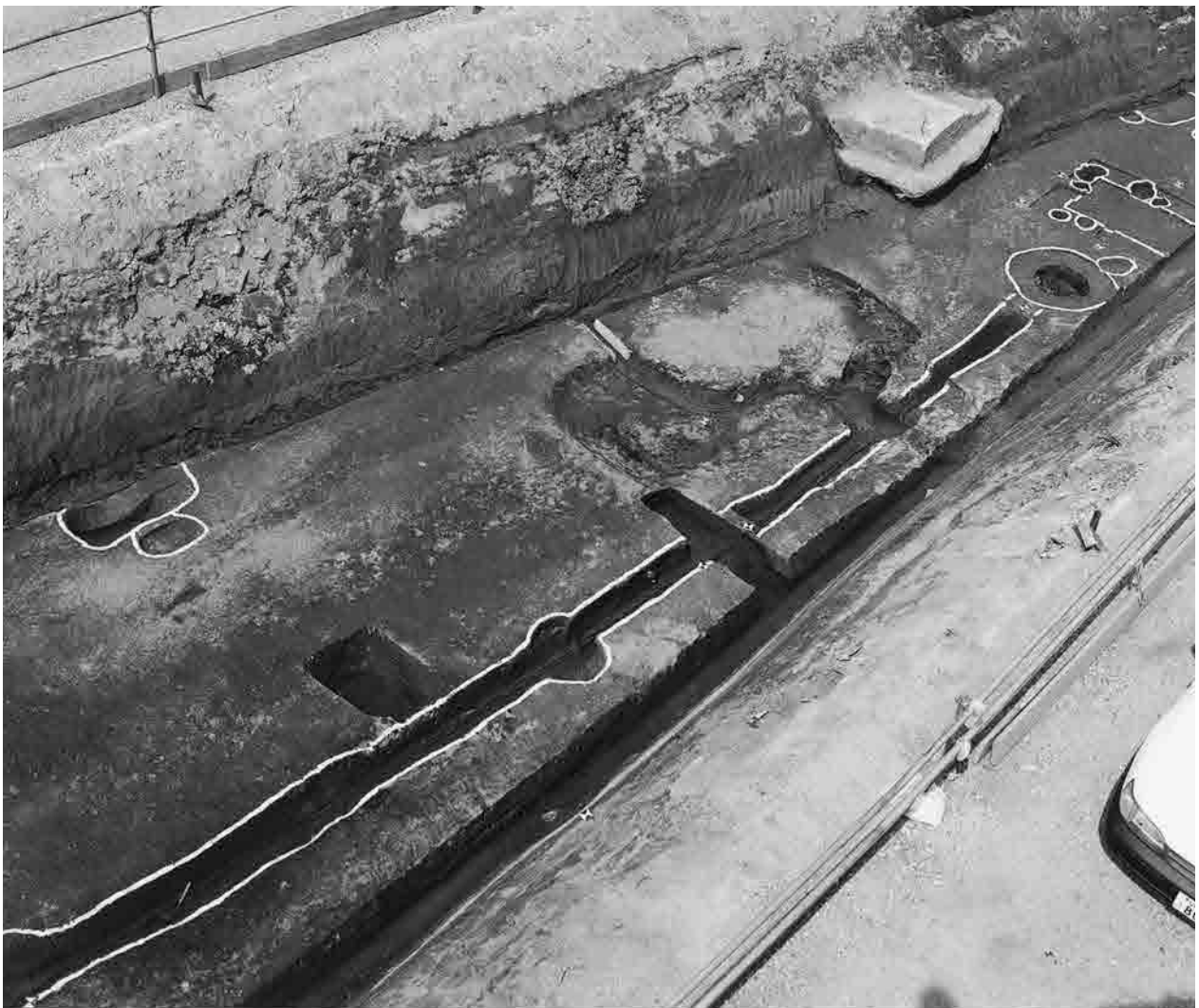


2. 第4面全景（西から）

図版4 06-1-1調査区 第4面



1. 20土坑遺物出土状況（北から）



2. 19埋桶・60溝〔貯水・導水施設〕（南西から）



1. 60溝竹製導水管と土師器皿54出土状況（北から）



2. 60溝竹製導水管出検出状況（東から）



3. 19埋桶検出状況



4. 19埋桶漆器椀出土状況



5. 19埋桶取水口部



6. 19埋桶籠出土状況

図版6 06-1-1調査区 第4面



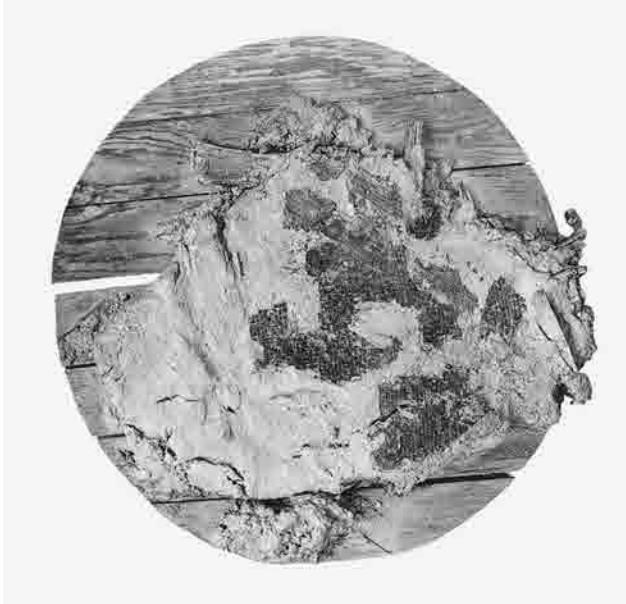
1. 19埋桶半裁状況と60溝より延びる竹製導水管（北から）



2. 19埋桶側板とタガ（北から）



3. 19埋桶底板除去後（北から）



1. 19埋桶出土籠 (クリーニング後)



2. 19埋桶出土籠網目 (部分写真)



3. 19埋桶上部の籠除去後、遺物出土状況



4. 19埋桶底板



5. 第4-2面全景 (南西から)



6. 87土坑、108ピット (北から)

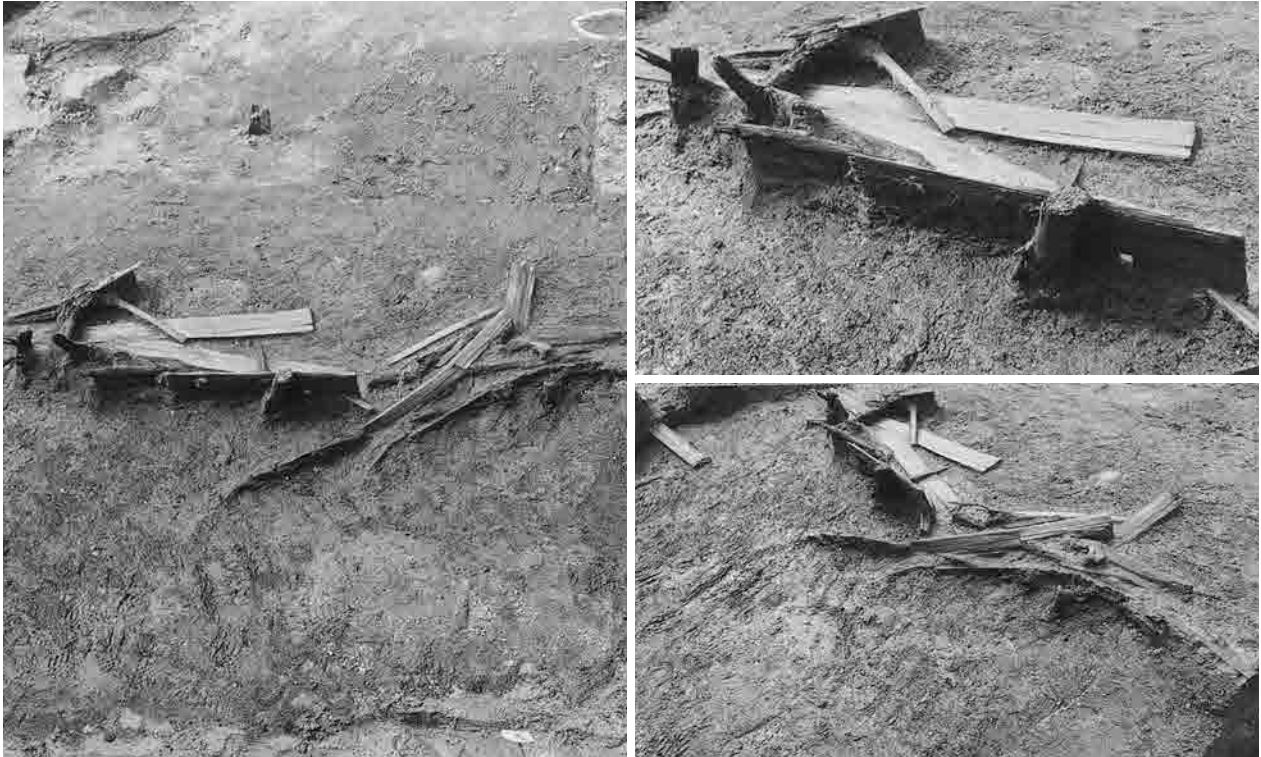
図版8 06-1-1調査区 第5面



1. 第5面全景（西から）



2. 第5面全景（東から）



1. 80溝〔柵〕(左：南から 右上：部分 右下：東から)



2. 80溝断面(東から)



3. 第5-2面全景(南東から)

図版10 06-1-1調査区 第5面(上・中)、06-1-2調査区(下)



1. 118柱穴(北から)



2. 125柱穴(北から)



3. 133柱穴(北から)



4. 134柱穴(南から)



5. 135柱穴(南から)



6. 148柱穴(南から)

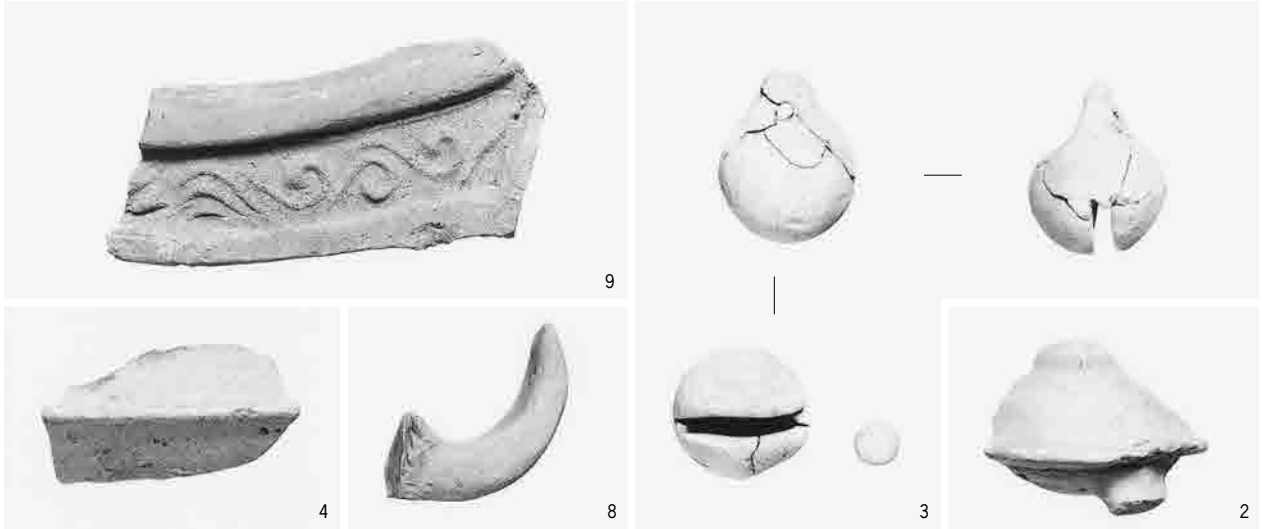


7. 06-1-2調査区全景(西から)



8. 172土坑(西から)

図版11 06-1-1 調査区 出土遺物 1



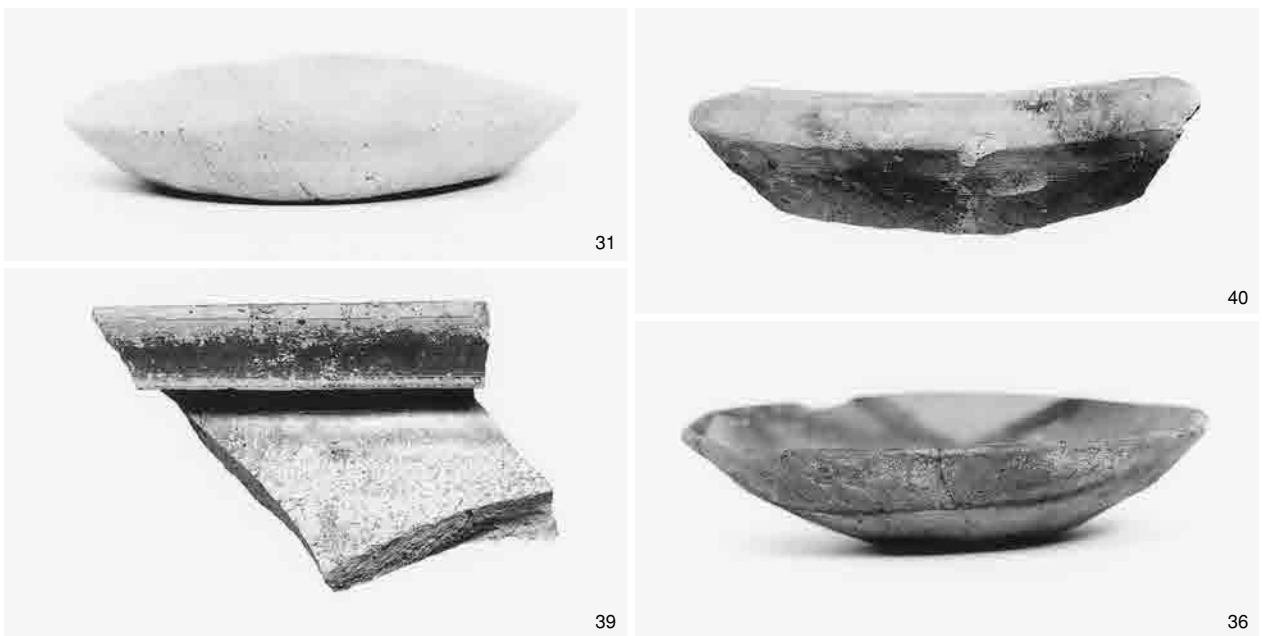
1. 第2層出土遺物



2. 14窪地 (第3面) 出土遺物 3. 15溝 (第3面) 出土遺物



4. 16井戸 (第3面) 出土遺物



5. 第3層出土遺物

図版12 06-1-1 調査区 出土遺物 2



1. 20土坑（第4面）出土土師器皿



46



60



57



61



54

2. 19埋桶・60溝〔貯水・導水施設〕（第4面）出土遺物

図版13 06-1-1 調査区 出土遺物 3

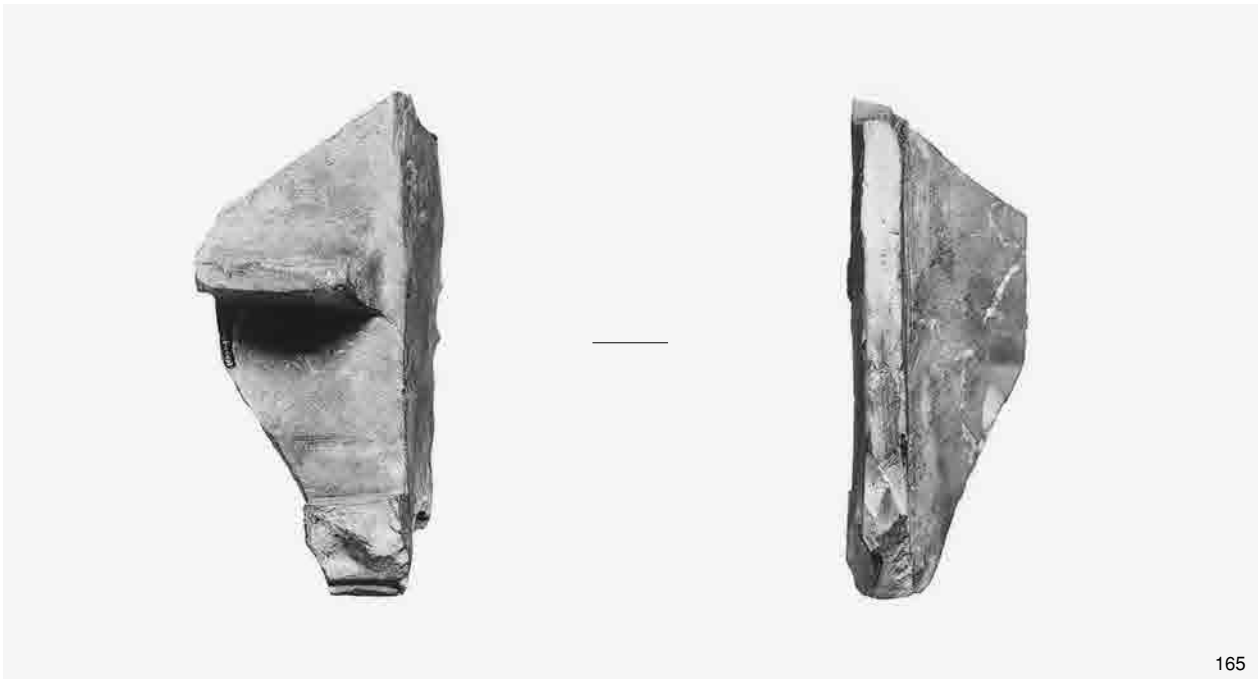


1. 第4層出土遺物



2. 80溝 (第5面) 出土遺物 1

図版14 06-1-1 調査区 出土遺物 4



165



164



149



150



151



148

図版15 06-1-1 調査区 出土遺物 5



160

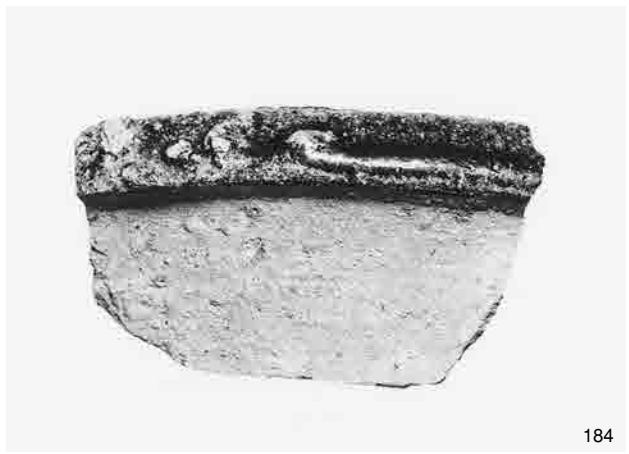


162

1. 80溝〈中層〉(第5面) 出土遺物



180



184



179



273



187



271

2. 80溝〈最下層〉(第5面) 出土遺物

3. 第5'層出土遺物

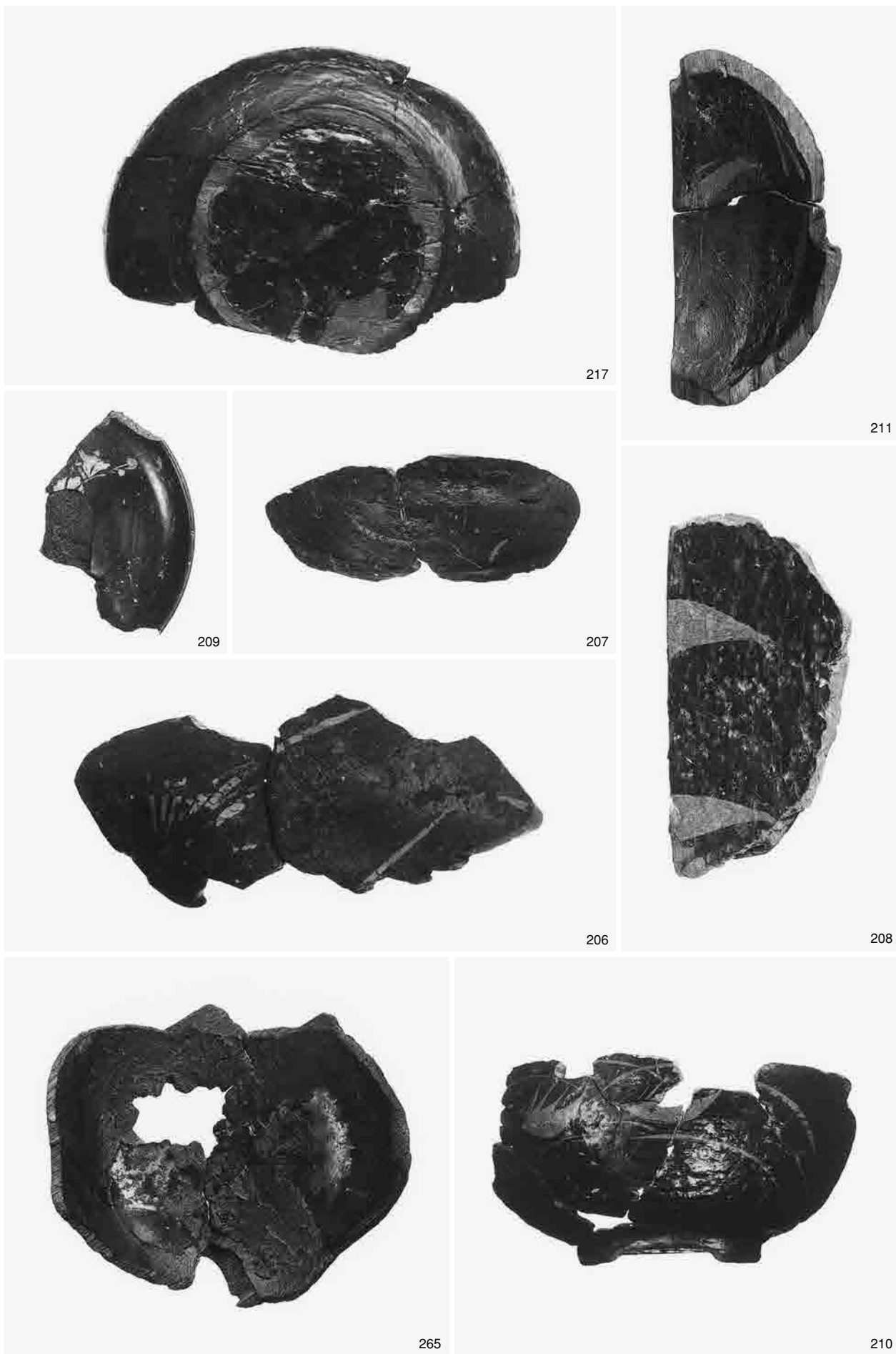
図版16 06-1-1 調査区 出土遺物 6

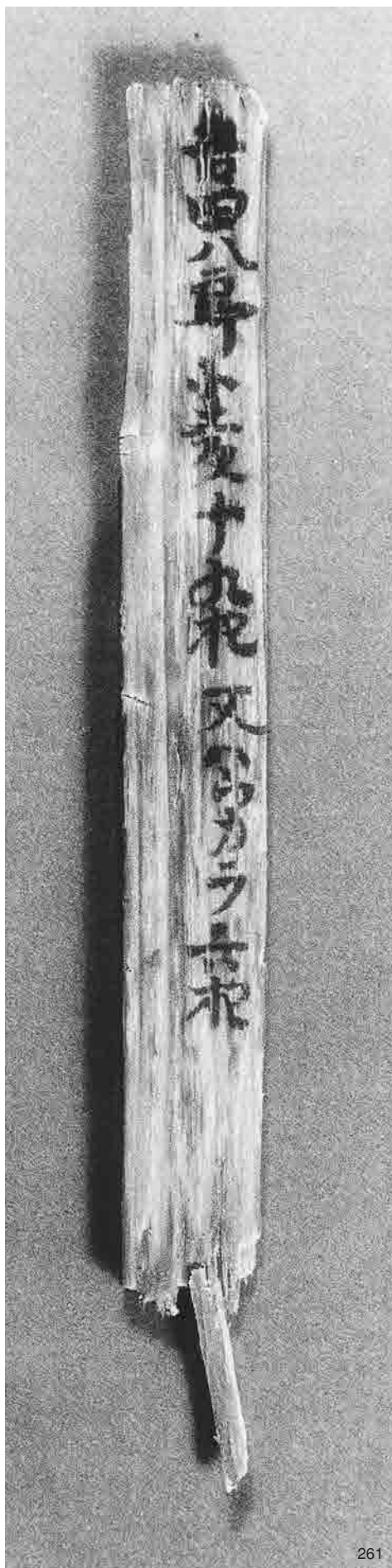


1. 80溝 (第5面) 出土土師器皿



2. 80溝〈最下層〉(第5面) 出土土師器皿





261

1. 80溝〈最下層〉(第5面) 出土木簡

□田八郎小麦十九把又ハ□(葎カ)カラ六把



262

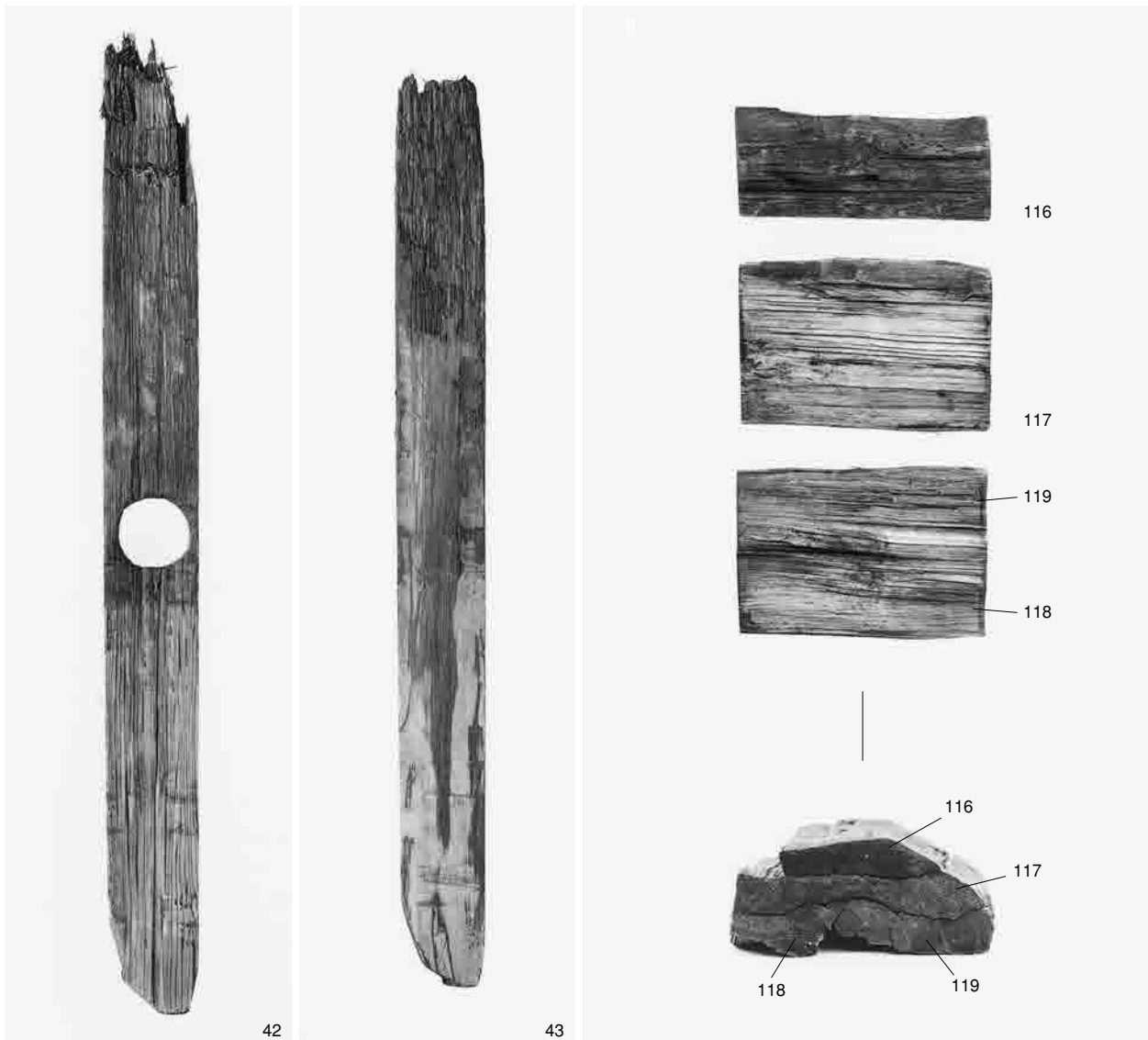
2. 80溝〈下層〉(第5面) 出土木簡

□西方源三上



50溝（第4面）・60溝（第4面）・80溝（第5面）・150ピット（第5-2面）出土木製品

図版20 06-1-1 調査区 出土遺物10

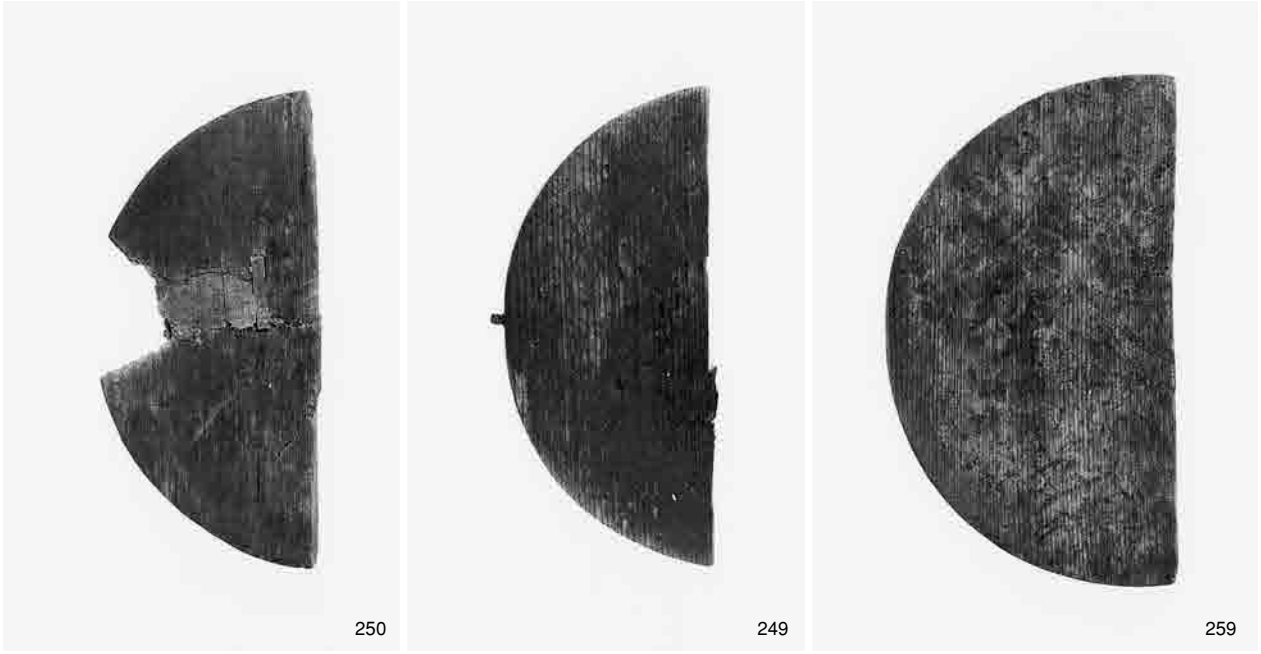


1. 19埋桶〔貯水施設〕（第4面）側板

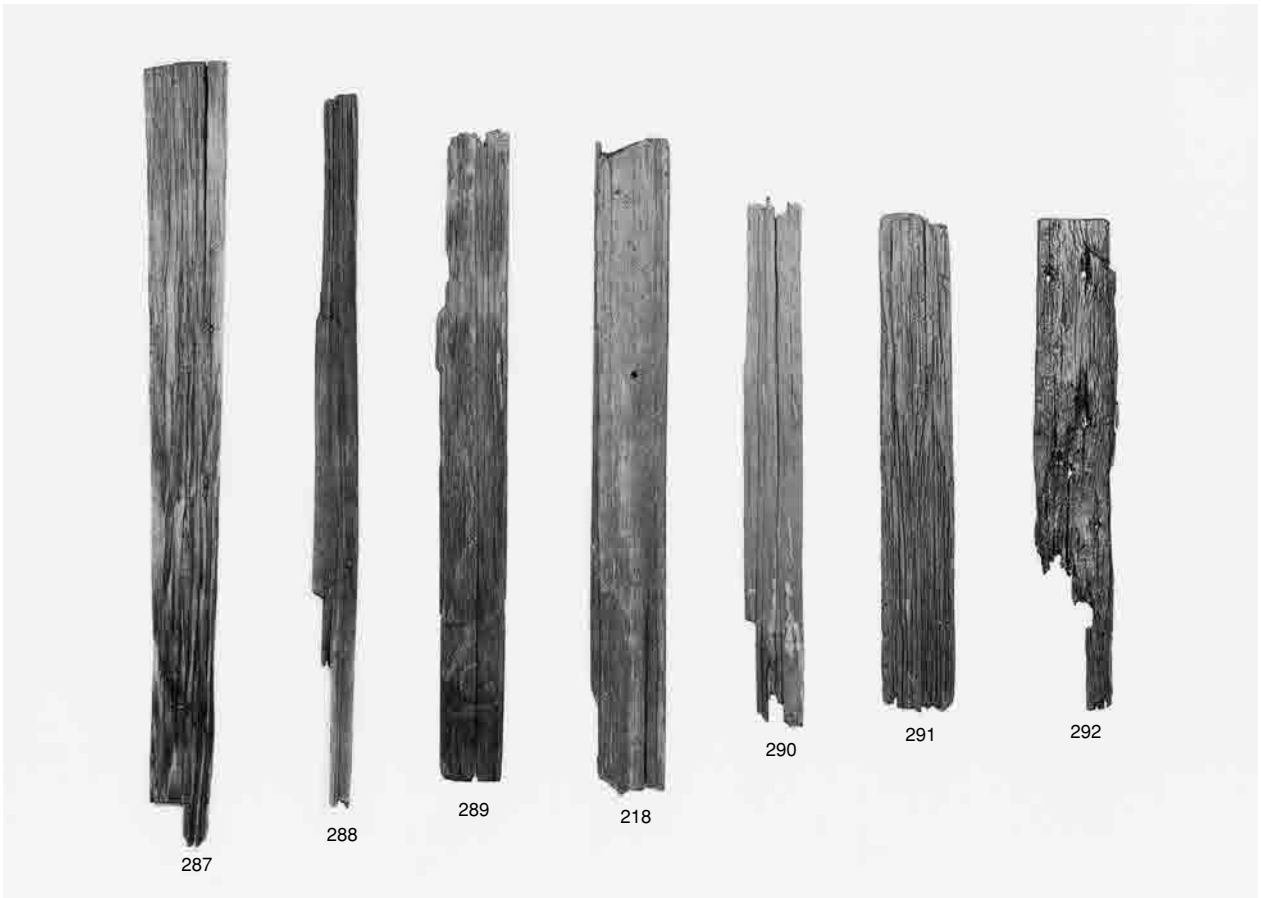
2. 87土坑（第4-2面）礎板



3. 80溝〈最下層〉（第5面）出土木製品

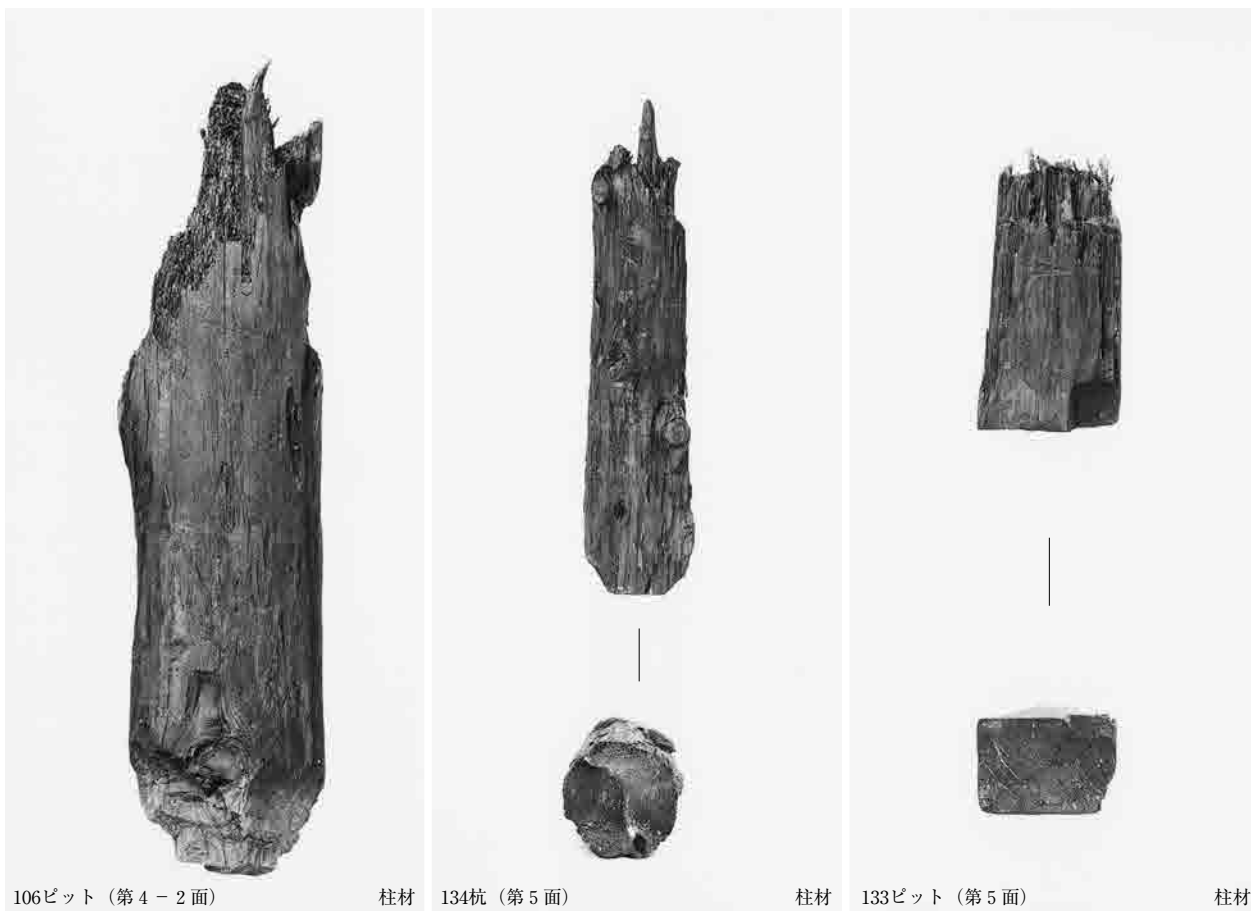


1. 80溝〈最下層〉(第5面) 出土木製品

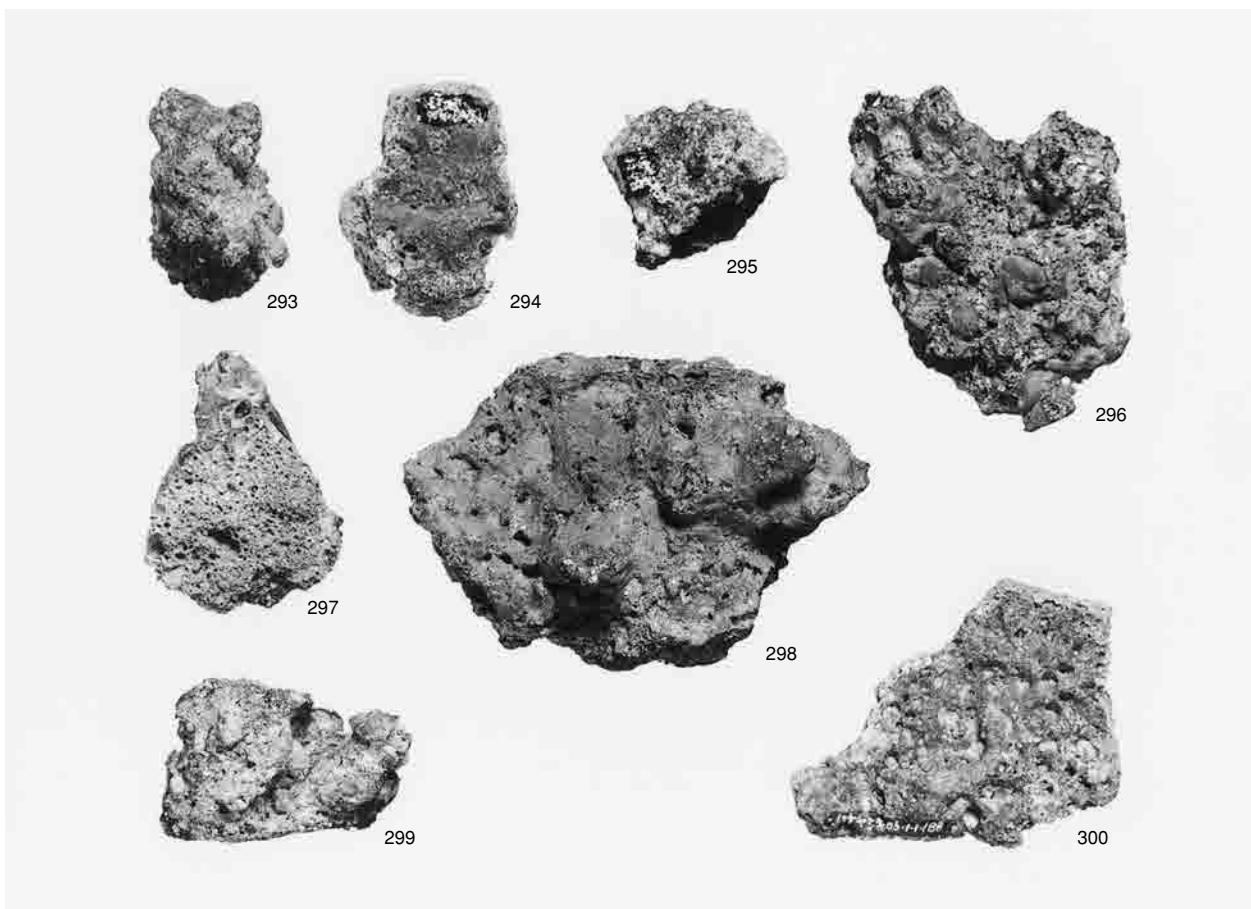


2. 80溝〔柵〕板列(第5面) 構成木製品

図版22 06-1-1 調査区 出土遺物12



1. 柱根・杭



2. 出土鉾滓

報告書抄録

ふりがな	はなやしき いせき いち						
書名	花屋敷遺跡 I						
副書名	河内花園駅前地区第一種市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査						
巻次							
シリーズ名	(財)大阪府文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第161集						
編著者名	岡本圭司						
編集機関	(財)大阪府文化財センター						
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台 3 丁21番 4 号 TEL072-299-8791						
発行年月日	2007年3月30日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		緯度・経度	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号				
はなやしき いせき 花屋敷遺跡	おおさかふ ひがしおおさかし 大阪府東大阪市 よしたいっちょうめ 吉田1丁目	27227	87	北緯 34° 39' 46" 東経 135° 37' 11"	2006. 05. 12 ~2006. 07. 31	160m ²	近鉄河内花園駅前 地区第一種市街地 再開発
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
花屋敷遺跡	集落	古代	ピット・土坑・溝	土師器・須恵器	遺物のみ出土		
	耕作地	室町時代	井戸・溝	土師器・瓦器・瓦質土器 ・瓦・青磁・陶器・漆器椀 ・木簡 陶磁器	区画溝で囲われた屋敷地 竹筒製導水管を伴う貯水施設(結桶) 土師器皿の集積する方形の土坑 井戸・灌漑用溝		
要約	<p>平成17年に新たに発見された遺跡である。中世の主要遺構面が2面と中世末から近世初頭の面が1面、近世以降の面が2面である。中世の部分的に存在する2面と合わせると7面となる。第5面では中世の集落跡を検出した。正方位をとる溝で囲われた掘立柱建物で構成される屋敷地と考えられる。区画溝からは、土師器皿・摺鉢、瓦器椀、瓦質甕・羽釜・備前焼播鉢、常滑焼甕、東播系須恵器練鉢、中国製青磁椀など多くの土器、陶磁器のほか、曲物、織機部材、草履、下駄、漆器椀、毬杖の毬などの木製品と木簡が2点出土した。釈文は「西方源三上」、「□田八郎小麦十九把 又ハ□(芋カ)カラ六把」である。13世紀後半から14世紀後半の遺構面と考えられる。</p> <p>第4面の中世遺構面からは導水用の竹管伴う結桶を使用した貯水施設を検出した。土師器皿が集積する方形の土坑も検出した。15世紀代の遺構面と考えられる。</p> <p>中世末から近世初頭の遺構面である第3面からは灌漑用の溝を検出した。この面以降当地は耕作地と化したと考えられる。</p>						

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第161集

花 屋 敷 遺 跡 I

河内花園駅前地区第一種市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日／2007年 3月30日

編集・発行／財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台 3丁21番 4号

印刷・製本／株式会社 中島弘文堂印刷所
大阪府大阪市東成区深江南 2丁目 6番 8号